



始



5850

敵討

三遊亭
司馬龍生
園口生
新演

三遊亭
圓朝校關

義侠の

惣七



東京
文明林
發兌

敵義俠の惣七

緒言

抑我天明寛政の頃より。俠客長脇差と唱る徒。東西に輩出し。數十百人の乾兒を集め時としては。争鬪奮擾。あるひは民家を火まはは吏人を殺し。往々幕府の命令に従はず其狀一百八人の反賊が。水滸に屯集し。宋朝の天下を紊亂せしに像り。其因て起所を尋るに。是亦多は地方の代官。領主の家來等が。太平の久きと。政權を私しするの永きとに馴致。暴威を恣にして小民を虐げ。苞苴賄賂を以て事を左右し。富裕なる者は惡を爲も賞せられ。貧乏なる者は善を行ふも罪を受。其甚だしさに至ては。幾ど無政府と謂べき程の内情有しより。血氣ある者。之が爲衣食と成に忍ず。其反動力を得て。此の如きに至しなり。頭者司馬龍生氏が。連夜本色の雄辨を揮。大喝采を得られたる。義俠の惣七と題せ





木
静
印

義 俠 の 惣 七

敵討 義 俠 の 惣 七

第 一 席

扱高聴に達するれ嘶しは表題を仇討義俠の惣七と申しまして
 越後國蒲原郡新飯田村の俠客惣七の實傳でござりますが結局に
 至りまして文政九年の冬本所千間原と云ふ所ろで仇討に相成る
 勇ましいいれ嘶でござります今晩より兩三席の間だは惣七の父長
 兵衛の傳記を伺がひます此長兵衛と申します者は早く兩親に
 別れ仔細あつて家出を致しまして諸所を彷徨廻つた末に奥州三
 春の城主秋田安房守様の御藩中で知行貳百五拾石を領して居る

三遊亭圓朝 校閱
 三遊亭圓新
 改司馬龍生 口演

し新奇話説は。個も亦當時北越にて。一頭角を顯したる。新飯田の惣七が實傳
 にして其一生の間。勇壯活潑の行爲より。其結局に至つて。二男年藏が復讐の
 美譚迄。通篇二十席。聴衆をして。覺す臂を張腕を撫。身其郷に入るの感あらし
 めたり。新。富樫の兩子。其事實を普く江湖に傳んと欲し。平生の健筆を走せ。
 餘さず洩さず之を筆記して一小冊となし。今將に活字に付せんとす。予も亦定
 連の一個なれば。傍觀するを免さず。是非共手を借と責立て。稻妻の光に紛ふ。
 洋燈の影に引出され。まばゆき眼をシヨ水く仕ながら。其言辭の重複せし所。
 語氣の圓滑ならざる所。二三を校正し了。前坐に代て入ざる緒言をかくの如し。

明治三十二年水無月初十日

新潟古街山亭定席樂屋の片隅に於て

贅言道人しるす

七 惣 の 俠 義

敵討 義俠の惣七

第一 席

初高聴に達せしは表題を仇討義俠の惣七と申しまして
 越後國蒲原郡新飯田村の俠客惣七の實傳でござりますが結局に
 至りまして文政九年の冬本所千間原と云ふ所で仇討に相成る
 勇ましいれ嘶でござります今晩より兩三席の間だは惣七の父長
 兵衛の傳記を伺がひます此長兵衛と申します者は早く兩親に
 別れ仔細あつて家出を致しまして諸所を彷徨廻つた末に奥州三
 春の城主秋田安房守様の印藩中で知行貳百五拾石を領して居る

三遊亭圓朝 校閱
 三遊亭圓新
 改司馬龍生 口演

し新奇聞説は。個々亦當時北越にて。一頭角を顯したる。新飯田の惣七が實傳
 にして其一生の間。勇壯活潑の行爲より。其結局に至つて。二男年歳が復讐の
 美譚迄。通篇二十席。聽衆をして。覺す臂を張腕を撫。身其郷に入の感あらし
 めたり。新。富樫の兩子。其事實を普く江湖に傳んと欲し。平生の健筆を走せ。
 餘さず洩さず之を筆記して一小冊となし。今將に活字に付せんとす。予も亦定
 連の一個なれば。傍觀するを免さず。是非共手を借と責立て。稻妻の光に紛ふ。
 洋燈の影に引出され。まばゆき眼をシヨボく仕ながら。其言辭の重複せし所。
 語氣の圓滑ならざる所。二三を校正し了。前坐に代て入ざる緒言をかくの如し。

明治三十二年水無月初の十日

新潟古街山亭定席樂屋の片隅に於て

贅言道人しるす

義俠の惣七

昨今困却中だテ、ナニ些少元利共八兩餘だが幸はい貴殿の厚情
で返済が出来りやア實に有難い得底で松江は諾と承知をする
だろが金イヤ其儀は決して心配仕玉ふナ萬事拙者がグット
呑込例の布裳那まさりの辨否を揮つて甘く周旋致すから最早十
が九つ出来るものと御安心下さい拙者が引請申す然ば是より
直に先方へ参り就れ吉左右の後刻までには知らせ申さう
ンナラ駒木貴公へ何分れ頼申すせ金宜しい心得たと清見の邸
を飛出しまして松江右膳の玄關へ参り金頼み申すドレと
出て来たのは右膳の長男右一郎でござります右二イヤ是は駒木
氏何か御用で金イヤウ是は右一郎様其後は誠に御疎音貴殿
のれ取次では甚はだ恐縮がれ父上へ一寸拜顔を願ひ度が御在
宅へすか右二幸はひ宅に居ますから申聴ませう暫時扣下
さいと右一郎は右膳の居間へ参まして右二「父上唯今駒木が

義俠の惣七

参つてれ目通を致したいと申居ます右ナニ駒木が来た左様か
直此方へ通して而て茶と煙草盆を出しナ右是は駒木かアア
ア此方へ其れでは不可、スットれ先へ金へイヤ、エー其後は誠
とに存外の御疎音先日種々御馳走に相成一寸れ禮に昇堂管の
處彼是御用多の爲め遂々失禮を致して誠にどうも右イヤ其
節ア失禮しました、サテ拙者への用向きといふのは何事でござ
ア金早速申上ますが余の儀でも有ません、御當家のね儀は早
既他方へ御縁組に相成ましたか如何でございますナ右ムーす
まの事かへイヤ彼も御承知の通今年は十七才に相成から相應な
處へ結縁する積りだが未だ別に何方へも相談は致さア金ソレ
は重疊實は其のね儀を是非共に申請たいから話説申して呉
れイヤと云ふ人がございます如何でせう御相談になりませうか
右然ば是非他家へ結縁なければ相成ぬ彼様な不東者でも強て

七 惣 の 俠 義

欲しいと仰しやるは忝じけないがシテ誰殿でござるナ 金へ一
ナニ其でげすてナ 右何方のれ方で 金へイ夫れは其でげすが
ナアノ一ナニサ貴老人抵御存でござりませうウ 右イヤ拙者は
一向心當がないが何方の誰殿だか談話なさい 金然らば是非に
及ばん斷念つて申上やうかナ實は其清へイナニ其清見得四郎殿
でござるが拙者には是非共周旅を頼むと言れるので無據推參致し
た次第でござるナント御承知下るとは出来ませうまいか 右ハ
、ア左様か清見氏か成程イヤ思召は忝じけないが是りやア先づ
ね斷はり申さう 金へ一成程好ませんかナ實は御知行が違ひま
すから屹度左様來るナニれ出成さるだらうと思つて居りました
右コレサ脚木、藤高身格の事などを彼是申す松江右膳ではござら
ん 縦令足輕仲間でも拙者が鑑定に叶つた人物ならば随分遣はさ
んものでもないが清見では右膳の娘を遣はす譯には參らソイ

七 惣 の 俠 義

折角の御周旋を斷はるのは貴公へ對して誠に氣の毒だが宜敷
様に清見へ斷はり申して上さい 金へイ成程御道理でげすがナ
然らば又近日またね話しが有たら申上ませウと腋の下から汗を
流し、匆々にして清見方へ歸つて參りました 得イヤア脚木氏大
層早かつた松江は何と挨拶をしたへ 金ウム一其挨拶だが子
得如何云つて居つた無論承知だらウ 金處ろが子一イヤハヤ誠
とに大變な相違で拙者も實に當惑したヲ 得吳られんと言たか
金如何にも其吳られんサ其吳られんが尋常の吳れられんなら宜
しひが先づ如此次第サ拙者が松江に面會の上ねすま殿を貰受た
いと云ふ人がござるが御縁結になりませうかと云ふと何ウせ他
方へ遣はさんければならぬ娘だから遣も仕様がマア欲しいと云ふ
者ア何人だど問ふから清見得四郎殿だと云ふと俄然に顔色を變
て他方の者なら兎も角も清見氏ではね斷はり申すと云つたから

七 惣 の 俠 義

知行が違ひますから断はりに成ますかと問と聽玉へイヤ祿高
身格を彼是云ふ様な極江ではない縦へ足輕仲間でも鑑定に叶へ
ば遣も仕様が清見では拙者の娘を呉れる許には参らんから断は
ると云たヨ其機幕と云ものア拙者も如何も返す語がなかつたか
ら早々歸つて来たんだナント清見氏如何にも失敬な挨拶ではご
ざらんか清見では呉られんといふ其デハが誠に不届な申分で
ござるて手へ貴君コリヤア此儘に打ちやつては置れませう
得左様かイヤ彼剛直い右膳だから左様な事を申したで有う餘り
どいへば輕蔑た挨拶殊に武士が一旦想ひを懸たアノれすま此食
指を喰ひて引込時は百二十石を頂戴する清見得四郎の武道か相
立んテ斯成からは理を非に曲ても是非と想ひを晴さんければな
らぬ就ては貴公少々加勢をして下さるまいか 金イヤ其儀なら
ば頼みまでもない自己も乗掛つた舟でござる平生貴殿の御恩

七 惣 の 俠 義

を蒙むり居る拙者だから一命に懸ても御助力は致しませうが全
体如何いふ事を爲さる思し召てござるナ 得然ればさ今となつ
ては手緩い對談杯では追つかないから是非に及ばん腕づくを以
て強姦を致す了簡だが朋友の信義助力をして呉れへ 金エーナ
ンデすと強姦アノ強イヤ是は眞平御免を蒙むる外の事なら兎も
角も強姦の手傳は誠に慣んからナア 得イヤサ其代りには先
刻の二十金ををれ禮に爲し其上拙者が一番槍を繰込だ跡は二番槍
を貴公に任せろワナ 金ナニアノ二十兩に二番槍デグスカナ成
程宜しい如何にも手傳申さう 得イヤ早速の承知有難いと傍
への手文庫の中から金子を出しまして 得駒木ね禮は現金だせ
受納して呉れ 金是は恐縮成程二十金既での事で皆無形なしに
成所だつた有難い儘かに頂戴致したテ松江の娘を誘引す計略
は 得イヤ其儀に就ては妙計があるト云ふのは外でもないが自

七 惣 の 俠 義

己の下郎源藏は平常松江の仲間長兵衛新平とか云ふ兩人と懇意に致して居るから彼奴を探偵に遣つてだすまが外へ出るを探らせ途中に於て引捕へ本望を達する所存だテ 金ム一或程それは至極好い計略でござる然らば其積りにと互ひに相談を致しませし駒木金十郎は歸りました扱得四郎は仲間源藏を呼び寄せ少々の金子を興へて密かに言付ましたから元來善ない奴でありますから宜しうございますと香込では是から毎日松江の仲間部屋へ参つておすまの様子を密々偵つて居ましたが何分松江は人身ではあり殊に右膳は嚴重な人でございますから容易に娘を郎外へ出す様なことはございません清見も困つて居ましたか或日の事源藏は例の通松江の仲間部屋へ参りまして 源、オイ長兵衛さん今日は何も毎日出て来て手を止るが實ハ子他に友達も無いもんだ

七 惣 の 俠 義

から遂此方へ斗り来て濟ないヤへ時に新平さんは如何仕た 長、れ嬢様のれ伴をして出たがモウ今に歸るだらウマア緩々談話なさいれ茶を入るから 源、描いさんな其ぢやあれ嬢様ア今日は何方かへ被参つたンかへ 長、ウム御城下の八幡屋で子何御祝事とかト在と云ふのでれ出でなすつたんだ 源、八幡屋と云ふのヲ長、ソラれ前も知てる人入ヨ 源、ウム左様か 長、實は子若旦那をれ招き申したんだが少々御風邪氣たと云ふのでれ嬢様が御名代にれ出なすつたのサと元より正直の長兵衛でございますから何の氣なしに話しを爲て居ります處へ新平が歸つて参りました長、新平歸つたのか大きに御苦勞だツた 新、オヤ源藏さん能來なすつた時に長兵衛誠とに濟んが實は自己がれ迎ひに行管だが如何も一杯飲た故か頭痛がして困るかられ前御苦勞でも自己の代りにれ嬢様のれ迎ひに行て吳ンヤヘナ 長、ム、宜どもく、而し

七 惣 の 俠 義

て何時頃行のた新日暮てからた歸りたから夕方から行て奥
子へト雨個が話しを聴て居た源藏は腹の中でメた哩と喜こびな
が善つて羨やましいヨそれに此方の旦那様は温順な方だから萬
事た氣を注て下さるが自己の内旦那なんざア獨身者ではあり
其に年が若いから思ひ慮と云ふア事夢にせへ見た事アないと云
ふ代物だからホントに勤め悪ひやアナだがマア主人となり家來
となるのア是も何かの因縁だらると言た様なモンだから断念て
居るのサ長ソリヤアさうと源藏さん和郎の故郷は信州だと云
ふ事たが何の邊だサ源丹波島サ長さうかへ自己は越後の三
條在新飯田村と云ふ所のもんだか夫ぢやア隣國ダサ源新平
さんは備上州だつけサ新上州の吉井サ源コリヤ妙ダネへ長
兵衛さん上州信州越後と云やア皆な隣國た其隣國の者が三人揃

七 惣 の 俠 義

ふと云ふのは随分不思議な事サ新是からはれ互ひに間を宜し
ませうネト四方山の話しに粉らかし態と長居をして源藏は清見
の邸宅へ歸つて來ました源旦那様只今源源藏か大層遅かつ
たな而して首尾は何如ダ源旦那様喜こびなさいまし漸やう
時節が來ました清ウムれすまめが何處へ行たか源御城下の
八幡屋へれ出になつて日が暮てから歸りになるさうで清ナ
ニ城下の八幡屋へ參つたウム左様か大きに苦勞ダ是は少々だが
小遣ひにしると懐中より金子を一兩出して源藏に與へ是から右
の次第を手に紙に認ためまして遺コリヤ源藏是を十駒木方へ持
參致して至急面談を得たい儀があるから早速れ出下さる様にト
申して十宜しいか大切な書簡だから手渡しに致して參れヨ宜し
いか法意て十源へイ畏こまりましたト源藏は急いで駒木の邸
宅へ參りました扱て此後は如何云ふ事になりませうか第貳席に

申上ます

第二席

義俠の惣七

引續いて伺がひます松江右膳の娘ねすまは途中に待伏をする者ありとは神ならぬ身の知由も有ませんから城下の八幡屋で色々
馴走に成迎ひに参つた長兵衛と共に城下を出ましたは初更々々
過でございましてが城下より御城内へ行まする路に庚申塚と云
ふ五町計りの原がございす只今たすまど長兵衛の二人は此原
へ掛りますると頃しも神無月の始めでございすから朧月夜で
ボツリと小雨が降参りました其時提灯を持って先へ立た長
兵衛は長エ、意地の悪いも少しにて降て来た時雨空と云者
は當にならねへもんだモシね嬢様流雲でございすから太した
事も有ますまいチト急いで参りませう
すま、妾しは合羽を着て

義俠の惣七

居るから宜がれ前提灯を消さない様に氣を付けヨ長宜しう
ございすすと主従が急ぎ足に丁度今原の中程の庚申塚の邊りへ
参りますと兼て霧から待設けたる清見得四郎駒木金十郎の雨
人は覆面頭巾に面体を蔽し身輕な打扮にて只今長兵衛が心焦燥
まゝ小石に踏づきヒヨロ、と踏踏る所を小蔭より飛出した
る金十郎が突然提灯を斜に斬て落しましたから是はと驚き後へ
一足下つた所を肩に引掛投ししましたから長兵衛はウンと氣
絶を致しました其時たすまはアレ長兵衛如何たしだと駈寄ます
る所を清見得四郎が飛出し驚ろくねすまを小脇に抱へて片方
の小蔭へ這入ましたからねすまは一生懸命振放さんと致しまし
たが何分脆弱女の力アレ一狼藉者人殺しと悲鳴を上げて泣叫びま
した
人往來する者とはなく只木梢を鳴す風の音のみでございす

七 惣 の 俠 義

續いて金十郎も驅來たり無残にも兩人にて悶苦しむれすまの手
足を捕へ遂に有間じき所業に及びました開けぬ世とは申しなが
ら實に憎む可仕業でございます借て松江右膳の方では右一郎は
晝から頭痛がすると云うので問居に閉籠つて居ますから右膳
一人机に向つて書物を覽て居ましたか雨も大降になつて餘り娘
の歸りが遅ふございますから右新平は居らぬか旦那様何か御
用でございますか右外の事でもないが餘りすまの歸りが遅い
し人分雨も降つて參つた様だから其方大儀ながら城下の八幡屋
で迎へに參つて呉れ新平宜しうございます直に參りませす是か
ら新平は夫々雨具の用意を致しまして提灯を提さげ早足に參り
ますると丁度今御城内を出まして庚申塚の原へ來掛りまするに
遙か向にアレーと女の泣聲が聞えまするか何事やらんと駈
付て見ますると二人の男が一人の女を捕へて言語同断の有様で

七 惣 の 俠 義

ございますから思はず透見ると粉方なくね様で有ますから新
平己曲者と云も敢ず持たる傘にて乗かゝつたる男の頭をしたゝ
かに擲りました清見得四郎は不意を蒙れてコリヤ大變と云ふよ
り早く一目散に遁出しました跡には駒木金十郎が是から拙者が
二番槍と遁出す所ろを思懸なく個奴もボツカリト新平に懸られ
ましたから同じく逃げ去りました新平は泣入るれすまを介抱しな
から新平か遅かつた新シテ長兵衛は如何致しましたと
問ますれせねすまは更に詞ばもなく只泣て計り居ますから新平
は彼方此方を見ますると道の傍邊に長兵衛が倒れて居ますから
抱きして呼生ますると漸々の事で息を吹返し長新平かた様
は如何なさつた新イヤ實は斯様斯様だと話ししましたから長兵
衛はどツクリして長夫ではアノ強姦アノ強誠とに口惜い事を

七 惣 の 俠 義

仕たナアと三人は顔を見合せて更に言べき言辭もなく長サア
れ嬢様新平は兎も角も私は晝かられ伴をしながら言甲斐ない始
末で面目次第もございませぬ加之敵手を取逃し且那樣へ何と申
し譯を致しませう實に顔の方向がございませぬ新イヤ自己も
其場へ駆付て斯云事に成つて見りやア咎は同事ぢや然し此處に
斯やつて居た處るか仕方がないから一ト足も早くれ供をしてれ
邸へ歸つた上且那樣にれ能を致さうと泣倒れて居りますすれすま
を種々慰さめまして主従三人悄然として松江の邸宅へ歸つて參
りました右ヲ、すまか大層遅かつたナと娘の様子を見まする
と髪は頰れ衣類は泥塗れで泣涙で居りますから右膳の不審に思
ひまして右コレすま如何致したかコレナ泣て居ては分明んコ
レすま すま、ハイ妾くしは只今途中で狼籍者に 右ヲ、長兵衛如何致
に 長其仔細は下郎から申し上げませう 右ヲ、長兵衛如何致

七 惣 の 俠 義

したのだ長イヤ誠に面目次第もございませぬが實はれ嬢様
のれ伴を致しまして庚申塚の原へ掛りますと何者とも知れませ
ず下郎の持ました提灯を切落し矢庭に自己を投付ましたから其
體氣絶を致しまして前後を辨まへませなんだ所へ新平が參つ
て斯様々々と強姦の次第を申しましたから右膳は吃驚致し 右
ナニソナラすまは肌身を汚されたかすま、ハイとばかり只泣伏
て居まする 右シテ何者か相評らんか 新雨天ではありますし
殊に面体を蔽して居ましたから一向譯りませぬが二人の奴の逃
出しました跡に斯様な手紙か落ちてございませぬ 右ウム左様か
と急ぎ開いて見ますると清見得四郎から駒木金十郎へ贈つた書
簡でございす其文言は松江の娘すま事今日城下の入入渡世八
幡屋へ參り候間兼々約束の通り庚申塚の邊りに待伏本懐を遂げ
申すべく云々と記して有ますから 右膳は敵手は清見と駒木の

義 俠 の 惣 七

兩人に相違ないナゼ三人まで伴を仕ながら曲者を取逃した周章
者めが長誠とに申し譯がございませぬ大切な伴を致しなが
ら斯様な事に相成手を空しく曲者を取逃しませぬ腹立の程恐
れ入り奉まつります 新、只だ此上は旦那様の御無念の晴る爲め
下郎兩人をれ手打になし下さいます様ね願ひ申し上げます 右
如何にも其方が此度の不調法手打に致すのは武家の作法では有
りシカシ其方兩人の首を斬たればとて娘子の耻辱が雪けるとい
ふ譯でもないから兩人とも是より長の暇を遣はす是を路用に
致してチツトも早く邸宅を立退様致し手間取て他人の口の齒に
懸らば掛さるゝろなく活ては置れぬと文庫から金子を出して兩
人に與へました 新、長、ハイ、ハイ、有難く存じますア、ア
今に始めぬ旦那様の御厚恩重々の不届きを一命をれ助け下され
た其上に路用まで頂戴致しまして御恩の程は死でも忘れば致し

義 俠 の 惣 七

ませぬと兩個は厚つき情けを謝しまして自分の部屋へ参り夫々
旅の用意を致し改めて再び右膳の居間へ参りまして只今の
御語に従がひ立して直に出立致します御縁があれば又重ねて
目通りを致します先夫までは随分共にね身を大切に遊ばしてど
兩人共に涙に暮暇乞をして住馴た松江の邸宅を出まして城下
の人入渡世八幡屋方へ引取ました切松江右膳は黙然といたして
手を組暫時考がへて居りましたが傍に泣いて居るれすまの顔を
ツク、と見まして眼をしばたき 右、コレすま能合點せよ縦
ひ町人百姓の娘でも肌身を人に汚されては汗顔と捨置譯には参
らん予況てや貳百五拾石も頂戴する武士の娘が強さを致され其
儘に打捨置時は父右膳の武士道が廢れるばかりか松江の家名が
相立ん武門の意地是非に及ばぬ可慙なからコリヤすま和女の
命は父が貰ふたす 仰しやるまでもございませぬ武士の娘

七 惣 の 俠 義

が肌身を汚され何面目に永生て居られませう元より覺悟を致し
て居ります少こしも早く妾しの首を刎遊ばして武家の娘と譽
られるやうにして下さいませ 右「ア、能く云うた夫でこそ松江
右膳が娘天晴潔きよい其覺悟ッカッ右膳も三春の一藩士なれば
かならず和女は犬死はさせぬ直様仇清見駒木の兩人を討果し怨
みは晴して遣はずすサアね父上チットも早く 右「ア、云に
や及ぶと大刀提さげて立上りましたが思出せば十二の年母に別
れて其後は我手一つで育て上人並々に成長させ相應な所もあ
らば結んで早く初孫の顔を見んと樂しみしも今となつては空願
み日比磨さし我武技娘子を斬て試すかと思へば慕なき親子の不
幸と流石石心の右膳も不覺の涙だに暮ましたがふたふび心ろ
を取直して是非に及ばぬ時刻が延ては不覺の基娘覺悟をいたせ
と涙だならにれすまの後ろへ廻りエイと掛たる聲と共にコロリ

七 惣 の 俠 義

と首は前に落まする機發に間だの機を聞いて嘔出した長男右
一郎は此体を見て驚ろきながら 右「コリヤれ父上妹をね手打
に 右「ウム長男か様子は定めて聞たであらう生置ては松江家の
武道が立んからは是非は及ばず手打に致して 右「御尤もではご
ざりますれと餘りといへば可憫の最後 右「今更云ふても返らぬ
縁言夫よりは娘の怨みを晴すが專一是より清見方へ此首を持參
なし松江右膳の武士道を相立すまの仇を討なければ相成ぬとね
すまが首級を風呂敷に包み出やうとする袴の裾を押へ 右「私
しも御一所に御伴を致し妹が當の敵を 右「何を申丈が知たる清
見に駒木右膳一人で事は足る 右「デモござりませうが 右「イヤ
何時上の御用が有かも計られねば其方は跡に残りて不都合なき
様取計らへ 右「夫ぢやと申して 右「たつて申は上の御用を能略
に致すか不屈者のめ 右「アア是非に及ばずと二言と返す詞も

義 俠 の 惣 七

なく右一郎は差扣へる是より右膳は娘々の首を提げ清見の家敷へ参りました
れ話談變つて清見の宅では得四郎は先へ歸つて 得源藏門戸を開へ 源れ歸りてございませるか首尾は如何でございませ 得首尾は上首尾だが駒木はまだ参らんか 源まだ出はございません 得ハナナ如何致したか知らんと話しをして居まする所へ息絶て駒木金十郎源藏へ 清見氏はれ歸りか 源只今れ歸りに成ました 金然らば之免ヨ 奥へ通る 金ヤア先生旨く本望をれ遂だつたナア自分は頼だ目に逢つた能夫でも早く逃だつたチへ 得イヤ巳での事に危ない所ろだつたれ身も能早く逃たナア 金一体何者だらツ 得何者が知らんが突然に傘で打れたから大きに肝を潰した 金しかし貴君は思ひをれ晴しなすつたから宜しいが拙者は歸らんナア 得時に吾々の仕業とは知や

義 俠 の 惣 七

アせまいか 金必らず分る氣遣ひなしと云ふ中懐中を索し 金ヤア大變が出来たゾ 得如何した 金最前貴君かられ來しになつた手紙を取遣した 得エ、夫リヤア一大事だ和郎また如何したもンだナ斯る密書を懐中して來たア輕躁いにも世間例があらアナコレへ 源藏へ 大急ぎだ 只今庚申塚で駒木が手紙を遣して來たから人手に渡らない中に些とも早く行て見て呉れる源ハイ畏こまりましたと手丸の燈打を付て韋駄天走りに駆行ました 得どうだいいい梅に有て呉ればよいが 金左様だてシカシ多分は有うと存ずると話しの中源三立戻て 源所々方々を搜索ましたがございませんソコで下郎が考がへまするは多分は松江さまの手へ遣入たに相違ございませんと云譯は只今庚申塚の側で長兵衛新平の二人に出逢ましたが平生兄弟同様にして居る私くしへ挨拶もなく餘程腹の立た様子で下郎の面を見て居り

七 惣 の 俠 義

ました其處で思ひまするにあの手紙は松江さまの手に入られた様
子は彼等も知つて居るかど存ます得夫は一大事駒木を聴か
金イヤ大變此上は如何致さう得手紙が手に入たからは只は置
まい今にも右膳が此處へ参らうも計り難ないテ金若参つたら
如何致さう清見暫らく思案有て得宜しい氣遣なさるな若し來
たらば斯々と駒木の耳に口を寄何か密話さました金夫は上策
然らば左様致さうか得源藏其方は今にも松江が参つたら留守
だと申せ源長こまりました夫より兩人は仕度及び右膳の來
るを待て居ましたサテ松江右膳は娘の首を提さげ清見が宅の玄
關に來たり頼々々と案内の聲を聴いて源藏密と清見に報知ます
ると兩人は庭へ下て裏の切戸より忍び出ました源藏は急忙氣に
玄關へ出源何か御用でござりまするか右清見氏は御在宅か松
江右膳が参つたと申して吳源主人は留守でございますれ申し

七 惣 の 俠 義

れいて宜しい御用なら私くしまで願ひたうございます右清見
迄のはれ留守と申すかアア是非に及ばず夫ではと歸宅に成た
らば松江が参つたと申して吳と右膳は柏子拔が致しまして情々
と歸る道ね馬場先と申す處へ参りますと一人の武士小蔭より
出で突然に右膳に斬てかゝります右膳は元より心得の有る武士
でございますから一足跡へ下り持たる首級を側へに投捨合せ
暫らく争闘つて居ましたが此武士は駒木で有まして元來劍術が
下手でございますから右膳の爲に斬立てられ次第々々に後へさ
がる所と右膳は付入隙が有たと見ぬまして駒木の肩先より胸へ
掛て斬下ました駒木はアツと云ひながら倒れたる所を今一刀
と踏込ました右膳の後ろから清見得四郎は物をも云ず斬付まし
たから右膳は不意を討れて振向途端に面部をしたゝかに斬られ
倒れる處ろをば刺止を指し血を拭うて鞘へ收め其儘屋敷へ歸り

七 惣 の 俠 義

ました 得源 源々々 源且 那樣でございませすか如何なりました
得、駒木は右膳の爲にやられたつた 源、エ、夫は氣の毒様の事
でございませした 得、扱右膳を手に掛て見れば屋敷には最居ん何
へなりとも参らんければならんが夫に付ても源其方も永々務
めて呉たが最早之にて暇を遣はす、些少なれども之を遣はすか
ら些ども早く立退けと金子五兩を與へました 源、難有ございま
す左様ならば一ト足も疾く何れへ成ども身を遣れませうと直に
仕度に掛り源蔵は何へか出立致しませした跡に得四郎は支度爲る
間も心焦燥家財諸道具は其儘にして金銀次を取集め何くともな
く逐電致しませした松江右一郎は父の歸りの遅きゆゑ待飽みモウ
堪らん手丸の提灯を點て清見の宅へ参らうと通り掛りませした
れ馬場先に何やら倒れて居ませすから提灯に照見ると血に染まし
た駒木の死骸が有ませすから是へと驚ろく此方にも又た一人血の

七 惣 の 俠 義

染たる死骸が有ませすから段々見ませすれば雨なく父の右膳でござ
いますから天に叫び地に呼て抱き起して介抱致しませしたやは
事が絶て居りませした 右「れ父上、淺ましいた姿たに成なされ
ました之だから私くしが最前清見の宅へ御供しやうと申しませ
たのでござりますと悲歎の涙だに返らぬ練言を並べ泣臥して居
ませした暫らく立て涙を拂ひ 右「イヤ、と悲歎て居る所ろでな
い儘かに響は清見得四郎只一ト打と刀の目釘を潔し清見の屋敷
へ来て見ればはや何處へか遺出しました跡でございませしたから
詮方なく、屋敷に立歸り委細の形体を物語り家内舉つて悲歎
に沈みしありませは目も當られぬ次第でござりますサテ右一郎
は直様此事を其の掛りへ訴たへませして葬儀を營なみ愈々警討出
立は明、晩

義俠の惣七

引續いて申し上ます新平長兵衛の兩人は夫より人入八幡屋方へ
 参り事の仔細を語り此處に四五日逗留して各自に思案を定め新
 平さんれ前は如何するか知んが私は一先古郷新飯田村へ立返る
 所存だ新私も一先古郷上州吉井へ歸る積りだ就ては此まで不
 思議の縁で兄弟同様にしたか此上は互ひに信音をしませうぜ
 長夫が第一だシテ上州の吉井で何と云つたら知るへ新吉井の
 町で綿屋の新平と尋ねれば直に分る是非尋ねて来て下さい左様
 してれ前は新飯田で何と云つたら知る長新飯田は町と村と兩
 方有から村の方へ来て長兵衛とさへ尋ねれば直に分ると日頃親
 しく起臥を共にしました兩人なれば兄弟に別れる様な心持がし
 まして涙だを流し右と左へ立別れましたサテ長兵衛は日を重ね

義俠の惣七

まして新飯田村へ立歸り村の入口で三左衛門と申して古い名染
 がございますからマツ夫へ立寄勝手口から長御免なさいまし
 三左衛門様はれ宅か手長兵衛でございます永の年月誠に御無
 沙汰を致しましたと云ふ聲を聞て三左衛門は立出三ヤ一長兵
 衛さんか下へウモムマア壯健で能歸つてござつたナア長イ
 ヤモウ漸々の事で歸つて参りました阿叔にもれ變りもなくれ目
 出たらございます三イヤ變つた事もござしねへサア、上ら
 しやい長夫ぢやアと免と鞋を解て上へ上り長ヤレ、久し
 振で此家の圍爐ばたへ坐るワイ三イヤもう毎度村の者が寄
 いすりヤア主の噂さベエして居やしたモウ村を出て何年に成ノ
 ウ長足掛八年になりやす三エライもんだ昨日今日の様に思
 つたがモ一八年になるか道理で己アも年を取たでがアンす其年
 を取たで思ひ出したが名主さんでも此間老人達が集合つて主の

七 惣 の 俠 義

村の某がしの娘れ種と云ふ者を妻に迎へ夫婦中善暮し居ました
得て居ますから安睡舟と名付たる小舟を一艘出来夫を長兵衛に
杯彼此仕まする中に名主親類相談の上元來長兵衛は舟の方を心
は名主を始め親類一家の者がかはるに呼まして馳走を致す
も集まりて久々挨拶も済み其夜は茲に一泊致しサテ其翌日から
澤の衆へ知らせやうと氣輕に出て行ました程なく瀧澤一家の者
しやるナ好兒だワイ三巴アチヨククリ一走り名主せんから瀧
にも知やアしねへホンヨ困つたもんだア、長ハイ、管はつ
十一だアレ竹エ此處へ來て辞義をしる身体許り大く成たッて何
ア主が居る時分に二ツか三ツだつた斯様に大くなりやしてモウ
れ竹や茶を入るヨ長好娘子が居るが何所の兒だへ三是リや
話しをして居たッけがチヨククリ己が行て知らして來ベエコレ

七 惣 の 俠 義

扱れ話しは後へ戻りまして松江右一郎は即刻父の横死を其掛り
へ訴ゐて出ましたれば檢視として監察役夫々出張有逐一事の情
態を詰問ありまして全たく清見駒木がれすまを強姦せし末松江
を暗殺致せし事明白に分りましたから直に清見を呼出しに成ま
す、既逐電して行衛知れざれば屋敷は其儘欠所となし右膳の死
骸は取片付を言付られ駒木の死骸は其親屬へ引渡しになりまし
た此で右一郎父と妹の死骸を泣々菩提寺へ引渡りまして七日七
日の追善も済ませサテ自分の妻れ勝と申す者の父は山村幸左衛
門と申しまして二百石を頂戴して當時御側頭を務めて居ますか
ら夫へ集りまして右一サテ見様亡父并に妹の盡七日に無縁に相
務めましたれば改めて頼ひの筋が有て罷り越ました幸道
回足下の家の大變右膳殿は申すに及ばず妹までが其日も違へず
非業の最後を遂られた跡に残りし足下夫婦の悲歎其心中察しや

義 俠 の 惣 七

られる縁に連がる拙者の事なれば何事に拘はらず遠慮なく話説
れへ右少々多聞を憚り申すれば人拂ひの義を願ひます
幸宜しいコレヨ誰ゾ茶を入れて来ヨシと夫で宜しい用が有ば呼
から其方へ行て居れンテ右一郎の願ひとは右御存じの通り
父右膳は清見得四郎の爲に討れ其無念遣方なく如何かないたし
て父の無念を晴し度妻勝ども申し合せ決心致しました只此上は
男様より何卒警討の願ひを上へ宜しく御取傍下さる様此義偏へ
に願ひ上たてまつります幸道理の願ひ夫でこそ松江の家督囃
かし右膳殿も草葉の蔭にて喜こばれるであらう早速上へ願つて
遣はさう夫までは謹しんで御沙汰を待て居られへ右何分ども
に宜しひ願ひ奉まつります幸定めて此中よりの疲勞もあらう
憂晴しに一獻酌んど夫より酒肴を調のへ右一郎に進め種々に馳
走をして返しました幸左衛門は其翌日未明に登城致しまして君

義 俠 の 惣 七

候にね目通りを致し右膳が横死に就て子息右一郎の仇討の願ひ
透一言上に及びますると早速右一郎をね呼出の上 侯コリヤ右
一郎其方父右膳が爲め仇討出立の願ひ神妙には存するが少し思
ふ仔細あれば追て沙汰に及ぶまで出立は罷りならんぞ左様心得
る幸左衛門心得違ひを致さぬやう氣を付けて遣れへといと不
に言放て下られました雲時あつて山村幸左衛門を君側へ招かれ
何かで内意有て山村は歸宅に及び其夜右一郎を呼に遣はし
たれば右一郎は夜中ながら俄かに仕度に及び山村の屋敷へ参
り案内を請て奥へ通り 右今日は何色々御世話に相成れ禮の申し
様もござりませんマテ上の首尾は如何でござりまするか先刻の御
不
免
恐
れ
入
ま
し
た
幸
其
事
に
就
て
中
態
々
呼
に
遣
は
し
た
拙
者
も
彼
か
ら
色
々
願
ひ
申
し
た
が
殿
に
は
何
か
思
ひ
召
有
る
と
見
ぬ
此
度
仇
討
の
出
立
は
相
成
ぬ
と
思
し
召
き
つ
て
の
を
沙
汰
囃
や
本
意
な
う
思
は
れ

七 惣 の 俠 義

るで有らうが君命の義は背かれず據せざるない義で有テ 右「ス
リヤ出立の義は如何でも叶ひませぬかアア是非に及ばぬ尙此
上どもは馬標のお取計らひを以て其中にはれ許しに相成やう偏
へに願ひ奉まつりませす 幸「イヤ其義は某がしが承知致した心配
致されナ 右「餘り夜更ぬ中にね暇を致せうと力も抜て情々
と立歸る道れ馬先を通りかゝり此處にて父が横死せしと思ふに
就ては俱不戴天の父の響なる清見得四郎己れ安穩に置べきかと
睨む目先へ見と閃く光の黒打扮の一人の武士が行手に對つて
立塞がり物をも言す斬付る右一郎は持たる提灯抛捨て狼籍者と
抜合す隙もあらせす又一人が後ろ袈裟に斬付るを左知つたりと
身を翻し二人を相手に斬給ふ折から吹出す呼子の笛に此所彼所
より現はれ出たる同じ打扮の武士都合六人右一郎を追取圍み無
二無三に斬立てました右一郎は飛鳥の如く怯まず憶せず火花を

七 惣 の 俠 義

散して戦かひましたたが六人の者は遂に散々に斬捲られ塵らす何
方へか逃去せました右一郎は後を見送り白刃を提さげてホット一
息吐て居ますと後ろより聲を掛る者が有ますから揮向て見ま
するど山村幸左衛門でございませすから 右「貴君は馬標 幸「手練
のほはは感服いたした此上は君侯へ申上早速仇討もれ許しに成
やう宜して吹擧致すであらう 右「さては只今の狼籍者は 幸「汝
の手練を試さん爲め迅より此所に忍ばせた我君さまの御仁恵で
有分 右「エエ左様ども存せず無禮の手對ひ平に御容赦を 幸「
イヤ其斟酌には及び申さぬ何れ明朝上の御沙汰を相待れヨ 右「
何分どもに宜しく 幸「然らば之にて 右「れ別れませすでござい
ませうと夫より兩人は右と左りへ別れました山村幸左衛門は翌
朝に相成ますると早速登城を致した上昨夜の次第右二郎の働ら
き一々言上に及びますると君にも殊の外御喜こびにて早速右一

七 惣 の 俠 義

郎夫婦を呼出に成れ土蓋を下され警討御免狀並びに國光のれ
ん差料金子百兩拜領に及び本望成就致した上花咲三春へ立歸れ
どれ辞を下されました右一郎夫婦並びに山村幸左衛門は有難涙
に袖を濡しして君側を下りました右一郎は宅を片付け出立の
日を定めて山村幸左衛門の宅へ参り之までの厚き心添を謝し
した幸さて右一郎の出立は何日に相定めたナ 右善は急げ
の常言もござりますれば明後四日と相定めました 幸成程と指
を繰まして幸ウム大安日に當れば至極宜しい然らば明日はね
勝諸共御入來下さい、仇討出立の送別を致さう 右何から何まで
れ心を添られれ禮は言葉に盡されせん最早暇を致します
幸ア、左様か今日は管いも致さず明日は必らず早く参るが宜し
い 右難有う存じますと其まゝ宅へ歸りまして妻のれ勝に男
の志ろさしを話し翌日に相成ますと早々旅の仕度を致します

七 惣 の 俠 義

る山村は頸を長くして待て居ます所へ右一郎夫婦参りまし
た 幸先程から待て居たアよ、此方へ 右、れ詞に従がひ推參
致しましてござりますね勝此たびは何から何まで父上様のれ心
ろ添有がたう存じます 幸イヤ、其禮には及ばん別段越向は致
さんがホンノ有台の者で目出度一獻酌みませうコレ、先程申
し付た仕度及び此より酒肴を持出し親戚三人盃を交換す中
にもれ勝は父幸左衛門の顔を見て何となく胸迫り落涙に蔭し
鼻し拭みながら勝行先々よりれ手紙は差上ますが父上様も追々
にれ年も重なりますから随分れ身を大切に遊ばして下さる様是
計かりが心ろがよりでございませと涙だぐむ 幸イヤ手前は年
を取ても此通り次夫だから心配致すナコリやれ勝能承たまはれ
其方一旦松江家へ嫁し付たからは自己は親ではない右勝殿が親
ぢやゾ其親の誓を討に夫の供を致すと云ふは此上もない仕合せ

義 俠 の 惣 七

者だ良や十年廿年の永の年月を重ぬるとも天晴夫の片腕と成て
流石は三春の家中山村幸左衛門が娘子ちやと天下に美名を揚て
飯れ是過去し右膳殿れすまの善供養ばかりでない三春一
家中の武名を輝やかすと云者ちや右一郎殿は元より文道の達
人なれば如此事は千も万も御承知たが其方は女子の事なれば老
人の役目に一ト言申し聴して置のだサア是からは賑やかに家内
をもを集めて酒宴を仕様に智仁勇の三徳を備へました誠どの武
士の幸左衛門が表面は立派に勇み立まするが真底の悲しみは龍
生が申し立てすまでもなく皆さまのれ心ろで推察遊ばしませ是
より夜の深るまで話し合ましてハヤ丑満も過る頃漸々にして枕
に就朝早く起出朝伺も仕舞右一郎は幸左衛門の前へ出で右
最早出立仕まつりませす勝左様ならば父上様幸もう仕度
が出来たか昨夜も申す通り必らず卑怯の真似をしてならんぞ南

義 俠 の 惣 七

人委細承知仕まつりませしたと是より玄關へ出まする跡より積い
て幸左衛門は見送りませす右一郎は草鞋を穿て立上るに勝は草
履を穿きながら勝左様なれば父上様幸エ、まだ愚頭と
致して居るか未練者めがど此一ト言に罵まされ二人は心残して
立出ました下男の善藏は城下端れまで荷物を持って送りませした是
より右一郎は勝越後の國に於て大難に出遇ふの一條は明晩に委
しく申し上ます

第 四 席

引續いて申し上ます清見得四郎は下男源藏に別れを告三春を還
電致しまして京大坂より諸國を廻り遂には越後路へ差掛り長
岡を過ぎて與板へ参りまして日も漸々七時下りでございまして
得四郎は既に路用を消費し宿錢にも困却いたす位な哀れな休載

義 俠 の 惣 七

でございませぬ城下の入口の掛茶屋へ這入ると亭主「入つちやいま
し此方の床机が宜しうございます清見親爺茶を一盃呉亭主「ハイ
悪いれ茶でございます得「何でも宜しい時に親爺此邊りに安値
宿はないか亭主「ハイもう十四五軒れ出なさると木鏡宿がござい
ます清左様か實は某がしは長旅で旅用を盡し大きに難澁致す
から其木賃へでも宿らう亭主「旦那様甚はだ失禮ではござります
が斯成ッては如何でございませう此先に當時賣出の博奕打で品
玉の國藏親分と云ふのがございますか此親分の内は普通浪人衆
や劍術家また博奕打杯が尋ねに来ると何時でも泊ては親切に致
します夫へれ出なすつては如何でございます得「夫は千萬番と
けねい然らば夫へ尋ねやう新錦色々世話に成ッて相濟まん此は
甚はだ少ないが茶代だと懐中より二文置ました亭主「有がたうご
さいますれ静かにれ出なさいまし得「此所から餘程参るのか亭

義 俠 の 惣 七

主「一町許り行てお尋ねなさいませ得「忝じけない然らばと掛茶
屋を出まして一町許り参りまして品玉の國藏と聽ますと直に知
れました來て見ると誠家では有まするが可なり廣い家でござり
ます入口から得「ご免なさい國藏親分の家は此方かナ子分と見
なまして年頃廿三四の男が生まれて若「何方かられ出になりま
した得「手前は奥州三春の浪人で清見得四郎と申す者此度新潟
まで罷り越さうと存じて御當所を通り掛り兼てれ名前を聞及ん
だから尋ね申す今宵一泊を願ひたい所存で罷り出ました國藏
殿「宅ならば宜敷れ取次を願ひたい若「只今親分も居ますから
話して見ませう暫らく待てれ呉なさいと國藏の前へ行き若「親
分浪人が一人來ました國「何處の浪人だ若「何だか六フ敷い事
を云つて來ましたエーかうッて何でも奥州だと云やしたエー奥
州のその何でございソレ親分知て居ませう國「馬鹿野郎取次だ

七 惣 の 俠 義

手前に分らなくって奥に居る已に分るか奥州の何處だと云ふんだ
若今考がへて居ります所だワナ焦燥しねへツツト分りま
した 國ビツクリした大きな聲をするなイ 若奥州三春の浪人
だと云つて其ウ名前はエー清見得四郎と云ふ人でございまサア
キ新潟へ行ンだつて此處を通つたから泊めて呉れろと云ふん
でござんせう 國間拔野郎め取次位ゐナ事せへ實眞に出來やし
ねへンシテ如何な身装をして居 若黒の紋付の着物に月代を生
して至で芝居の定九郎の様です 國何にしる可申にお通し申せ
若エ宜ござい升と立て参まして 若エ大きに待遠でございまし
た今分分に云やしたら此方へね上んなさいまして 清早速の御
承知忝じけない鳥渡足を洗ふものを貸て下さい 若ヲイ源ヤ鹽
へ其處の銅壺の湯を汲んで來ねへ 源ヨシと奥より鹽に湯を汲
で参りまして 源サア洗ひなさいまして云ながら思はず互ひに

七 惣 の 俠 義

顔を見合せて 源ヤア貴方は旦那様 得其方は源藏エマア如何
致した 源コレハ 旦那様如何遊ばしました私くしもれ屋敷
をね暇まになりまして所々方々と飄零ましたが到々此方の親分
の掘介者に成ました 得思ひ懸ない處ろて逢つたなア 源是が
比喩に云ふ盡せぬ縁でございませう夫より清見は案内に連れ奥
へ通る 國サア遠慮なく此方へね通りなさい 得手前ことは奥
州三春の浪人清見得四郎と申者計らずも今宵一泊を願ひ早速御
承知下され千萬忝じけない以後は御別戀に願ひたい 國御丁
の御挨拶申遅れました私くしは目藏と申ます鹿暴者でございま
す以後はれ心ろ易くね願ひ申ます今承たまはりましたらうちの
源藏の御主人ださうでございますチ 源親分へ私ちは以前此且
那樣に御奉公致しまして厚い御恩を受けました 得彼も以前は
手前が召使つて居つた者でござる不思議な事で御當家の御掘介

七 惣 の 俠 義

誠に千萬忝しけなふござる 國「イヤ別段世話、致しませんが
其れ詞ばでは恐れ入りませす源藏何はなくとも仕度をしろよ 源
畏こまりましたと勝手へ行き酒の仕度を致しまして座敷へ持運
びまする 國「何にも有りませせんサア御緩くう召上りませ 得「是
では却って恐れ入る飛だ御扼介になつて相濟まん 國「さう御遠
慮なすつちや困りますサア一ツれ上りなさいませと 盃をさす是
より様々の話しに時を移し得四郎もはや十二分に酔まして 得「
存外の馳走になつて相濟まん 國「れ管ひ申しませんから緩々れ
上りなすつて下さい就ては清見様は此から何處へれ出なさるの
でございます 得「何處と申して別に心宛もなき長旅其仔細は此
なる源藏も存じて居るが手前が三春を浪人を仕たと云ふ譯は同
家中松江右膳と申者を少かな意恨を以て殺害に及び夫れ故古郷
を後に致して早や三年諸國を廻つて計らずも今宵御世話に相成

七 惣 の 俠 義

ます 國「左様云ふ事なら別段にれ管ひ申すとは出来ませんが御
覽の通り汚穢しい處ろでも宜くば縱令五年が十年でもれ厭にな
るまでれ出なさいまし 得「信あり義ある主人のれ言辭何分宜し
くれ世話願ひたいでサア是から得四郎は品玉の國藏の所ろに食
客となり博徒仲間て云ふ備身力となりましたれ話變つて松江右
一郎れ勝の兩人は父の仇を討んが爲め諸國を廻つて最早三年に
成れども差して敵の手掛りも有ませんから且暮心を惱まし向
細々と搜索歩行まする所ろく越中富山にて敵清見得四郎は越後
路に居ると聞き早速越後を指て参りました此に清見得四郎は奥
板の國藏が備身刀となり其儘當國に足を止めまして先は氣樂な
身の上となりました今日も所用有て他に出たる歸途長岡の石
内と云ふ所ろの茶屋にて獨酌で酒を飲で居ります所ろへ源藏が
通りかゝりました清見を見るより駈來りて 源「旦那様善所ろ

七 惣 の 俠 義

でれ目に掛りました 得、ム、源藏か何處へ行た 源、新町まで行
つて來ましたが夫、事ア如何でも宜敷が旦那大變が起りました
ヨ今渡し場で見掛ました武士は確かに松江の倅右一平附て居る
女は女房のね勝に相違ないと思ひます貴方が此國にた出なさる
事を知て敵を討つため此へ参つたのかとも知れませんが御油は
なりませんせ 得、エ夫は一大事彼奴に出逢ては甚はだ不都合な
事が有るといふは其方も存知の通り自己はまて御道は不銀練右
一郎は頗る遠人妙な組船ひで面と向つては迎も叶はんテ如何
かよい手段を廻らし返討に致す計略はなからうか 源、御尤でござ
いますすが此計りはと暫らく考がへ膝を打つて 源、よい事がござ
います何でも右一郎は新瀉へ志す様に思はれます幸ひ私しの
悪意な由藏と云ふ者が船を持て來て居りますから彼に金を子
を遣し新瀉までの下り船を勤めて二人を乗込せ途中で失て士よ

七 惣 の 俠 義

う様ナ手段は如何でござります 得、夫は妙策其由藏と云奴ア悪
い方には抜目のない云事ア自己も聞て居るから失策氣遣は無
らウシテ由藏は此邊に居るか 源、只今彼所に見ゆました 源、ヲ
イ、く、く、由藏ヤ急用だ、 由、誰だへ 源、己だ、 由、源藏
か何だへと出さしたを源藏が誘引て清見の前へ連れて行ます
清見は悠々として 得、由藏一盃飲め 由、コレハ先生でございま
すか有がたらシテ源藏自己に用とア 得、外でもないが耳を貸せ
と何か暫らく耳打を致しますと 由、へ、ナ成程。所で後の骨折は
得、多分は遣れんがと懐中より金五兩取出し由藏に渡す由藏受取
て 由、是りやたつた五兩 得、不足か 由、マア其ナ物と云た様ナ
譯ですなへ 源、少なからうが今旦那様も御不都合だから夫で負
けて置いて呉ナ 由、餘り安いが仕方がねへ大負に負け上やせう後
は此直段ぢやア不好ましませんせ 得、左様度々頼んで堪るもんか

七 惣 の 俠 義

源商買をする氣に成て居やアがらア三人アハハハ、由藏は船の仕度にかゝり右一郎夫婦の來を今や遅しと待て居りました右一郎夫婦は先にかゝる大難の有る事を夢にも知らず只新潟は繁華な土地ゆゑ正しく敵得四郎は彼地に粉れ居るに相違なしと新潟を志しましたたが妻のね勝が足を痛めし事ゆゑ下り船を頼んど石内へ來掛ると由藏目早く見て 由且那樣新潟までの下り船は安く遣ます召て下さい 右何位ゐで新潟まで參る 由れ一人前四百宛で參ります陸を行けば十六里の遠路を寝て居て行かれる下り船は安いものだ乗て入らしやい 右酒手は遣さんが夫で宜か 由れ一人前四百文づゝ下さりヤア跡は何にも入ません 右然ば乗ら 由長りましたと夫より由藏は親切らしく拾拾と辨當の世話まで致サアれた召なさいましと云ふに右一郎はね勝の手を取ら 右危険い儘てずに徐く乗るが宜い 由さう二人ぢやア遣

七 惣 の 俠 義

入させん一人宛もぐり込でね呉なさいまし未積込む荷物も有りますから少し待て下さいと暫く立つてモウ刻限と船を出す名に負ふ北陸名代の信濃川急流劇しく船は次第次第と下ります與板大河津三條を通り起し萩島の端へ掛りましたのは其夜の五ツ時ごろでございまして頃しも安永の四年五月十一日の夜月は水面に照互り何處ともなしに沉々と物凄く只水音のみ淙々と聽せしに遠に見ゆる狐火の影も哀な身の成行に右一郎夫婦は越方行末案じ煩ふ折しもあれ由藏は四邊を見廻し往來舟の途絶へしを幸に船椽に足を踏み掛けエイト聲掛け漕だる櫓をば逆に返すとアレヨと云ふ間もあらばこそ忽地舟は横さまにカッブリ覆つて仕まいました哀れにも右一郎夫婦は底の藻屑と消ぬ果ました様子を見定め由藏は仕てやツたりと泳ぎ上り舟を元の如くに反かへして跡白浪と逃戻りました折から一艘の小舟が櫓を押して此邊を

義 俠 の 惣 七

通かゝりますると月の光で何やら確に分らねども浮つ沈みつ流
れて参りましたから舟人が目早く見認めて楫を上げ近寄りますと
人で有ますから直に船際を踏み踏へ漸に引上げまして見ると
若き婦人でございませうから水を吐せ介抱致しませうに漸にして
息を吹き返しましたから月明りに熱と顔を見まして舟人は膽を
潰し舟人「イヤ貴女は若御新造様ではござりませんか ね勝「エ、其
方は長兵衛か 長御新造様でござりましたかと各自に睨れて言
語も出ず潮時顔を見合せ居ました扱て如何成すか一息ついて
申上ます

第 五 席

引續て申上ます長兵衛は計らずもれ勝を助けまして色々介抱し
ました末事の仔細を一々聴いて仰天を致しましたが兎も角もど

義 俠 の 惣 七

て夫よりれた勝を伴ひ新飯田村へ立歸りまして 長「ねたねた出ね
今辰ツた早く出て来い ね種「何か急用でもた来たか 大層早い戻だ
ね 長「早い所か途中から戻つたのだサア貴女此方へね遣入なさ
いませ汚穢うはございませうが御遠慮なしにサアく ね上りなす
ッて下さいませしコレく ねたね 手前の着る物を此所へ来うれた
ね此れ方様は自己が常々話す以前御恩を受けた御主人の若御新
造様だが今日不思議な事であらせ申てれ供を仕た委細の証説は
後からするナニ御新造様コレハれたねと申しまして私の女房で
ございますね勝「そんなら此れ人が其方のね女房さんか妾は三春
の家「中「江右一郎の妻で有ます重さねく の薄命 富國まで彷彿
復来り既に一命も亡ないましたを不思議にも長兵衛の船が来か
り助け上げられたましたたね「ア、ア、ア、夫はマア危険事でありまし
たナア何は借置其れ体裁ぢやア居られませんサア、之をね召

七 惣 の 俠 義

替成さいませ 長就ましては心ろ懸りは若旦那様れ勝どるか一
尋申に参りませすれたねや自巳やア往て来るから此處へ来てね湯
を沸して御膳を上ろ頼んだぞヨ左様なら御新造様行て参りませ
ると出て行ませした跡に女房は膳拵らへをしてね勝の前へ持て参
りませしたれ勝計らず扼介に成りませして濟ないたねアレサ夫の御
主人さまの事少しも御遠慮は有ません一体マア如何云ふ譯でぞ
アんして此の邊僻の國へれ出成さいますしたんですナと問れまし
てれ勝は涙ながら夫婦が身の上遺なく物語りませしたれたねは驚
ろき且は悲しみ涙に暮て居る所ろへ長兵衛は立戻り 長今戻つ
たれ種若旦那は分りやしたか手ね勝知れませしたか 長分りませ
んまた明日になつたら夫々尋ねませうが何分御存じの通の雪汁
ゆゑどるかよい塩梅に助かつて下さればよいがね勝若萬が一の

七 惣 の 俠 義

事が有たら如何仕様ノウレ種若旦那様は男の事ゆゑ左様な事は
ござりやすめへノウ長兵衛どん 長已も左様思ッちやア居るが
如何にも強い水勢だからイヤ別段の事もございますまい明日に
成たら分りませう今夜はマアね寐みなされませしと聽てね種は手
早く床を敷きた種汚なふございます此處へれ寝みなさいませし
と無理に勤められてね勝は床の上へ坐りませした夫右一郎の身
の上が案じられませして其夜は眠に就ません扱れ話しは變りませし
て右一郎は舟を覆されませすと其儘押流され柳川村の水除杭に
押附られ慌忙杭に掴まり水振ひを爲て一息吐き漸々の事で土
堤に上りませした右思ひも寄ぬ難に出逢ね勝は如何致したか
みは元より大小まで皆流されて仕舞つたが夫はともあれ女房が
助かつてくれれば宜がと獨言ながら向ふを見ますと男鬚と火光
が見ぬますから 右彼火光は儘かに人家と思はれる彼へ参つて

義俠の惣七

今宵の始末を物語り一夜を明させて貰うと火光を便りに参りま
した只見ると一軒の藁屋がござりま戸口に立寄まして 右御
免下さい拙者は只今此河にて舟を覆され殆んど難渡仕つる者哀
れ願はくば何の隅でも苦しうござらんから一夜を明さしては下
さるまいかと云ふ聲を聞き主人が夫は定めし御難渡でござす只
今開ますと門口を開右一郎の姿を見て 主ヤレと云れ氣の毒ナ
何しろ此方へれ這入なさい 右然らば許て下いと這入升と主人
足を拭て此方へ上らッしやい今火を焚ますと此より爐へ粗衆
を折り薫べ火を焚ながら 主遠慮なく此方へござれ 右然ば御
免下さいと爐の邊へ参りました主人は右一郎の装を見て 主何
しろビョロ濡れでござすこりやア私の寝巻だが之をね着替なさ
いまし 右御親切に有がたうござります然ば暫時借用申でござ
らうと着物を着替濡たる着物は片側へ掛けまして元の所へ坐り

義俠の惣七

ますと主人は右一郎に向い 主そうしてれ前さんは何處から何
處へお出なさるでござんす 右イヤ某は奥州三春のものだが仔
細有て新潟まで罷越さうと存じて長岡より下舟に乗り此邊まで
参りし所計らず船を覆され妻諸共に流れしが運能手前は此土堤
下の水除杭に押付られ辛くも命は助かりしが妻は生死の程も相
知れず斯して居る間も心掛主人のね助力を持って尋て頂く譯には
参りませぬまいか 主夫は誠に氣の毒でござす併先月中から此
川は雪汁と云て山々の雪が融て所々から押出す洪水の急況てや
女子の身では助からう様はねへが夜が明けたら及ばずながら尋
索して上やせう 右どうか何分どもに死骸なりどもね索なすつ
て頂たう存ますと其夜は夫にて夜を明し翌日に相成りますると
主人は同村の若者を四五人頼み所々方々と尋ねましたが見當り
ません是はその倍れ勝は新飯田村の長兵衛の處に助ッて居りま

義 俠 の 惣 七

すゝとは神ならぬ身は知らざる筈でございます 右誠にはハヤ知
厄介でござりましたた知れませんか 主一向に知やしねへ多分は
流されやしれたに違ねへ御新造さまはれ何幾になりやすエ 右當
年が二十二でござります 主そりやアれやげねへ事を仕やした
だがナア尙一ツ骨を折て又々索してやりませうと最親切に索し
て呉ましたたが知れませんサテ右一郎は此處に三日程逗留致まし
たが愈え勝の死骸が知れないと云ふ事になりました新潟の様子
を應合せまするに其處同所は船舶ばかり幅濶土地にて中々武士
の浪人環の入込べき場所ではないと聽ましたから尋行んも無用
の事と存まして詮方なく 信州善光寺へ彼が菩提爲めに參
詣せんと思立まして此家を出ました尤も包み大小は皆な流しま
したれど路銀は胴巻のまゝ肌にて居りましたから主人を始め
夫々へ禮物を置まして直に三條へ出て衣類大小を購求め日を重

義 俠 の 惣 七

ねて善光寺へ至り妻の追福を營み同所を出立して上田の驛に來
り原町の菱屋清兵衛と云ふ旅籠やへ宿を取ります不幸の上にな
幸を重ね其夜から右一郎は大熱を發し俄に苦みしゆゑ主人を始
め家内中醫者よ薬と介抱致しまして明日になり益々熱は盛に相
成まして出立も成餘儀なく此處に永々の逗留を致すに成ま
したたが元より多くもあらぬ路用を皆な遣盡し右一郎は困却を致
して居りまするを主人の清兵衛は色々深切に世話を致し且其身
の上をも尋ねますると右一郎も當時は浪人の事指て行べき方も
なき趣ひきを答へましたにつき清兵衛は改ためて右一郎に向ひ
兎も角病氣快復まで當地に足を止め筆學の指南にても成されて
は如何でございますと勧めますると右一郎も其志ろさしを悦こ
び早速清兵衛に頼み同所鍛冶町と申す所に清兵衛の持家の有を
掃除いたし此へ引移りまして松江堂と云ふ標札を出して筆學指

七 惣 の 俠 義

南を致す事に成りました扱れ話しは變りまして上州の吉井町の
新平は飛脚を渡世に致しまして此度越後の新潟まで参りました
歸りがけ以前三春に居た時兄弟同様にして居た長兵衛は今新飯
田村と云ふ所に居ると聞きましたから豫て約束の通り新平は能
々新飯田村へ來まして長兵衛と尋ねると直分りましたから門口
より新御免なさい三春に居た長兵衛さんは内かねれ種れ出な
さい何處から來やんした新ハイ私は上州の吉井町の新平と云
ふもの長兵衛さんが宅なら鳥渡れ目に懸りたいた種今近所へ
まゐりましたから待て下さい呼ッて來るからと云ながら迎ひに
参りますると長兵衛は直様歸つて参りまして長イヤア新平と
んか珍らしいア上つて奥なさいを種ヤ足を洗ふ水を汲で來い
新夫ぢやア御免下さいと足を洗つて上へ上りまする所へ奥の
より出て参りましたのは右一郎の妻に勝て有ますから新平は

七 惣 の 俠 義

見るより吃驚して新貴嬢は若御新造様如何した譯で長兵衛
んの内に長是には長い話がある恰度五年跡の五月の十一日の
夜三條までの上り船に行た途中漲ぎり來る水面を月の光りで能
く見れば浮つ沈みつ流れて來る人が有ゆへ何國の誰かは知らぬ
へが助けて遣らうと帶際取つて引上げて介抱しながら能く見れば御
新造様吃驚して話を聞けば前も知ての大旦那右膳様を討
て立退た清見得四郎の跡を辿かけ此越後路へれた出になり長岡よ
り新潟までの下り船で萩島の端まで來ると船人が過まらて船を
覆したか但しは敵の片割か若旦那右一郎様諸共水底に沈めら
れたたの話を夫から直ぐに若旦那様の行衛を所々方々と尋
ねたが一向に見當らず何でも流れなされたに違ひないと思ひ
歸らめて新平と見當らず何れも流れなされたに違ひないと思ひ
様と書て朝夕回向をして居る親御の仇も打果せず思へば慕な

七 惣 の 俠 義

いれ身の成行ぢやアないかた勝今長兵衛のいふ通り世にも慕な
い夫婦の身の上夫から直に實父の山村方へ手紙を出した所父上
の仰しやるには仇を討たすに返るとは武士の道に有間敷事内々
貢は致してやれば得四郎の首を見るまでは長兵衛とやらの所に
世話に成れどのお返事故長の年月斯うやつて長兵衛の世話にな
つて居たよと始終を聞いて涙を拂ひ新始めて承まはつた其た
話さす御愁傷でござりませうと話の内から表から惣七が歸て來ま
した此時惣七は七才でござりませうと惣七と云て七歳になりやす
衛さん此りやア結搦だ私も今歳五ッになる兼松といふ俸が出来やし
新夫りやア結搦だ私も今歳五ッになる兼松といふ俸が出来やし
たイヤモ兒供もいゝが五月蠅もんだノウ長ソコでお種此人は
元此御新造様のね宅に居た時分兄弟同様にして居た新平と云て家
云人だ新始めて御目に懸りやした私は上州の新平と云て家の

七 惣 の 俠 義

長兵衛とんとは全で兄弟だアチどうかた心易く願ますれ種私ア
在郷もんで口は便やしねへが何分な心易く願申ますと其夜は
長兵衛方に一泊し翌日は新平も名残惜くは思ひましたがそこへ
に挨拶を致しまして新飯田村を出立に及び夫より信州路へ廻り
上田の驛原町の菱屋へ泊り交した其夜新平は下の便所へ参りま
した戻がけ二階へ上らうとする時店の方を伺とろなく鳥渡見
ますると三十位な浪人体の武士が帳場格子の側へ坐り主人と頻
に話を仕て居りました其横顔を新平が見まして喫驚し思はず聲
を上若旦那様右一郎様と聲を掛けんと致しましたがイヤく右
一郎様は體かに信濃川でれ果成さつたに違ない夫が此處にね出
成らウ筈はなし常語にもいふ他人の虚似と思ひ直ましたが何分
瓜を其儘ゆゑまた口を利としてイヤく若人違なら面目ないど
取ッ捨ッ階子の下で新平は頻に氣を揉で居ましたと思ひ切つて

七 惣 の 俠 義

新平は若旦那様と聲を掛ました其跡は如何成ませうか明晩のれ
樂しみに致しませう

第 六 席

昨夜の續き 新若旦那右一郎様ではございませんか 右其方は
新平ではないか 新是れはどらも若旦那様思ひ掛ない夢ぢやア
ございませんか 貴君様には信濃川で死去り成されたと承たま
はりましたたが如何して御無事でないでなさいました 右是れに
は段々話しても有がマア坐敷へ行ど是から二個は二階へ上り新平
の坐敷へ通りまして一別以來の挨拶も済み 右サテ拙者も上の
れ暇を頂き清見が跡を眼で越後路へかゝり長岡より新潟への下
り船に乘萩島と云ふ處ろまで来て船を覆され巳に一命も危うき
處不思議と命の助かつたと云ふ譯は水勢の爲に押付られて水除

七 惣 の 俠 義

杭へ掛り夫から漸々陸へ這上り柳川村の百姓に助けられたか可
愛や妻のれ勝は底の薬屑と相成た夫が爲に當國の善光寺へ参り
彼の善提を吊らひ夫より上州路へ志ざした計らず當家に一宿
致せし其晩より大熱發して歩行も叶はず百日餘りの長逗留に路
銀も残らず消費し進退谷まる折から主人清兵衛の厚情を受色
々々周旋にて此暇治町と云ふ處ろに世帯を持其名を松江堂と改た
り筆學指南を致して居るが切月日の経過は早いものコレ新平れ
勝に別れてより既に五年に相成が未だ仇にもめぐり逢はず無念
の月日を送るソイ 新夫に就て若旦那様不思議な話しがござい
ます御新造様にて何方の地に懸つて参りました 右ナニ勝に逢つと
テ申すれば何方の地でも新越後でね目に懸りましたその仔細
と申しませすは私にくも只今は古郷の吉井へ歸りまして飛脚渡世
を致しませすが川度新潟までの用向で参りました歸り掛ね屋敷に居

七 惣 の 俠 義

ました時分兄弟同様にした長兵衛の處ろは蒲原郡の新飯田村と
豫て聞いて居ましたから餘りの懐かしさに尋ねました處ろ計らず
御新造様にね目に懸り仔細を承たまはれば只今ね話し遊ばしま
した夜に計らず長兵衛がね助け申しました夫から貴君様のね行
衛を色く捜りました所が分りませす餘義なくれ里方の山村様
へ御相談をいたしましたれば云々どの御返事にて時々ね貢が参つて
長兵衛方に長々ねい遊ばすど承たまはりました夫に就て貴君
様は死に遊ばしたと思ひつめ佛檀に俗名を記し香花を絶さず
に手向て居らッしやいませに其貴君様が御無事でねいなさる
と云ふは不思議な事でございますに其貴君様が御無事でねいなさる
さうとは知らず此方でもね勝の位牌を拵らへて今日まで回向を
致して居た新造様にお逢になり今までのね歎きに引變て悦こばし
なつて御新造様にお逢になり今までのね歎きに引變て悦こばし

七 惣 の 俠 義

いた顔をね見せ遊ばしましたなら長兵衛は言までもなく敷なら
ぬ新平も此如嬉しい事はございません右シテ其新飯田村と申
すは何の邊だナ新三條から二里は在でございます右其方
太儀ながら案内を致しては吳まいか新仰しやるまでもござい
ませんね供をば致します元來華客の用向は濟しました歸り途の
事言譯は如何でも出来ませす其より旅の仕度に及び主人清兵衛
にも此事を語り翌朝新平を連れて信州上田を出立致しました月日
は天明の八年三月中旬でございませしたその日ハ善光寺に一泊い
たし翌日は開山へ泊り日を重ねまして新飯田へ参りました新平
は兼て勝手を知り居ますから長兵衛の門口へ参りました新此
間は色々ね世話になりませした新平がまた来ましたヨだねヲ新
平さんか長兵衛さん
んがござつたとサア
此方へ上らつしやい未だ區へ歸らなか

七 惣 の 俠 義

たかい 新「未だ國へ歸らなかつた處ではない長兵衛とん大變十
事が有が話から吃驚さつしやる十若旦那右一郎様に信州上田で
れ目に懸りれ供をして來たから御新造様に早く知らせ申して
下さい 長「エ、若旦那様をね連申したとソリヤ新平本當かへシ
テ何處にれ出成さると云門口から 右「長兵衛右一郎だ久々だつ
たなア 長「コレハ思ひ掛ない確かに貴郎は若旦那様如くして御
無事であれ出遊ばしましたと云ふ内れ勝は聲を聞つけ奥より馳出
顔を見て 勝「若旦那様ですかマア、貴郎は如何仕て御無事で
右「ア、和女も無難でと共に嬉し涙に暮ました 長「コレれたね水
を汲で來いと聽てれたねが小桶に水を入れて参りまして右一郎
の足を濯ぐ中れ勝は右一郎の手荷物と奥へ運ぶ杯彼是仕て漸々
風も静まり是より四人は種々の物語りを爲す中倅惣七は此時始
終の咄を見供心に聞て居りました處ろへチャルメロの音が聞

七 惣 の 俠 義

すから惣七は「れ爺、餉を買て呉ナ 長「五月蠅奴だれたね買てやれ
たね、餉やさん、一ツ遣てれ呉なせいと呼れて餉やは門口より
餉や「幾何上ますいたね、「二文遣つてれ呉なせい、餉や「ハイ有難うと
さいますと餉を出て居る所へ新平は淨手に行うと奥より出て思
はず餉やと顔見合して 新「ヤア和郎は清見の源藏とんちやアね
へか、餉や「さう言和郎は松江の新平とんかコレハマア如何もと云
中に長兵衛も出來れば 源「ヤア長兵衛とんでございますか、長
源藏とん是は不思議ナ如何した譯でその有様エ、源「お前達も知
つてる通り己が旦那の清見様がア、云ふ譯に成た故據なく三春
を立退今は奥板の國の親分の處で厄介になつて居るが猪毒と云
ふ病の爲に賭博打も出來ず仕方がねへから些少な錢を資本にし
て此の商買を始めたりへと奥の方を眺め 源「長兵衛とん奥にれ
出なさるは松江の若旦那右一郎ではねへか、新「如何にも右一郎

七 惣 の 俠 義

様御夫婦と聞て源藏不思議に思ひまして 源ナニ右一郎様御夫
婦とはハテナア御運の宜しい 長コレ源藏さん百里隔てた三春
の朋友が再一所に出逢のも盡せぬ縁が有のだらうね互に末長く
聞き信を仕様ぢやねへか其に就ては辛抱が肝腎だから稼やせへ
よ 新人間は身を固めねへちや駄目だ 源イヤ大きに左様だ是
からア一ト辛抱して稼させう又此頃には緩々来ませうヨ 長ソ
ンナラ源藏さん 源ナニ右一郎様ならと出て行きました後に右一郎長兵衛
今のは誰だ い 長へイ彼は清見の仲間源藏でございませう 右ナ
ニ清見の仲間源藏と 新左様でございませう 此時物七は頑是なけ
れで後先管はず 惣れ爺御新造さんや若旦那さんを川へ流した
のはアノ館屋の奴だぜ 長何を詰らねへ 惣其でも旦那さんの
顔を見て誰も何とも云はねへのに御運が宜と云たものヲと聴て
一同顔を見合せましたが右一郎は膝を進め清見の家来と聞て疑

七 惣 の 俠 義

がひを起す折から今伴が申す言葉も尤も其理に當る三歳子に
聞て浅瀬を渉るの譬へ全たく是は物七が云ふにあらず過去玉ひ
し父上が云し給へるに違ひなしコレ新平遠くは行まいからアノ
源藏を連れて參れ 新畏こまりましたと門へ出ましたが何方へ行
たかトント相譯りませんから思案に暮て居まする所へ物七は
走り來たり耳を立て阿叔さん彼所だヨと幽かにチャルメロの音
が聞ゆまする方角を教へましたから新平は其利發に驚ろきなが
ら其音を便りに駆出しまして程なく追付源藏と捕へ 新ライ源
藏さん少しは前に衛兵が有からチヨクリ歸つて呉れ源三も心
付す 源何の用だ 新チヨイとれ前に頼みが有から長兵衛さん
の内まで歸つて下さい 源ムー好々と新平に立って歸りました
新サア上なさい 源何の用だ子と云ふ中鞋を解て上へ上り 源
御免なせへと奥へ通り 源コレハ 極江の若旦那さま様變り

義 俠 の 惣 七

もございませんでれ目出たふございます御新造様貴女にもた
りもなくしてト坐り右一郎は源三の側へ摺寄 右イヤ源藏其方に
尋ねたい事がある匿しては不宜ぞ外でもないが清見得四郎は何
かに居聽して呉い 源是りやア思ひも寄らんれ尋ねでございま
す私くしは一向存じません 右イヤ存せんとは云せんゾ先刻此
へ参つた時吾々夫婦の顔を見て御運の宜と云つた言辭は某がし
夫婦が萩島にて害されんと致したを儘かに知つての事ならん察す
る所該一件は全く清見が當國に居て船頭に申付船を覆したに相
違無らう夫ども汝は知んと云へば憂目を見ても云はせねばなら
ん夫どもに清見の在家を申せば汝の命は助けて遣す源藏さうだ
源夫は御無体私に限り左様な事は知ません 右黙れ然ば何故に
吾々を御連の宜と申したのだ 源其はエ、ス様でござります
三春を御出立なされてより別段にね變も無から御運の宜と申す

義 俠 の 惣 七

したと云ふ傍から新平堪兼て源藏の胸襟を取てグットメ上 新
嘘を吐な何でも手前が知てるサア真直に云ッて仕舞長兵衛は捨
寄 長源藏とん如何したもんだ云て仕舞なさい旦那の方のた詫
は私が仕てやりませう 右新平手繰モット締ろ 新長こまりま
したと力に任して締付ければ元より微毒病の源藏なれば堪兼
源痛へく 苦しい免して下さい新平せん 新免して遣から云ふ
か 源云ふから免して呉と云ふ故少し緩めると源藏は溜息をつ
き 源ア一悪い事は出来ねへものだ僅かな言葉の端からして顯
はれると云ふも天の罰もうかう成たからは何もかも申し上ます
其代御計りは 右云ふと有らば助けて遣はす 源新平せんもう
包圍は仕ないから其方へ退て居て呉れと右一郎の前へ手を突
き 源實は貴君方御夫婦を此信濃川で謀つたは御推量の通り清
見得四郎ふいませす 右スリヤ清見は當國に居たに違いなかつか

七 惣 の 俠 義

ナそうして吾々夫婦の此國へ来たをどうして彼奴が知て居た
源斯なりやア仕方がないその元の起はコノ源藏が長岡にて貴君
リ卯夫婦をね見掛申しました故ア早速注進に及び與板
の悪漢由藏と云ふ船人を語らひ貴君様方を返討に致さうと存じ
ましたその貴君方が助かつて反つて謀つた私くしが捕へられる
といふも悪事の終りかう速やかに申し上ますからはどうぞ一命
をね助け下さいまし 右シテ清見得四郎は只今何方に居 源や
はり與板の國藏の所にね出なさいます 新夫では若旦那さ一
刻も早くうの與板とやらへね出なすつては如何でございます
長私くしも共々に御役には立ませんねれ供を致して参ります
右尤どもでは有が敵手は知れた清見得四郎某がし一人にて事は
足る萬事懸引の爲に新平を連れ是なる源藏に案内させ彼與板へ
罷越日頃の怨みを晴すであらうコレね勝其方も此處に止まつて

七 惣 の 俠 義

吉相待居れ 勝夫は貴郎ね情けない私しの爲には舅の仇妹どの
敵是非れ供をね許し下さい 右その志ろさしは尤どなれども仇
は一人夫を討んが爲に大勢参るは耻辱であるから此新平許源藏
を逃さぬ爲に連れて参る 勝夫では貴郎 右相ならんコレ源藏を
のはう一命は助けて遣す代與板へ参つて秘かに清見を呼出して
吳源イヤモ命さへ助けて下さる事なら如何な事でも致します
長左様ならば旦那さま御新造様私くしも 右聽て目出度歸るを
待やれど是より三人は源藏を連れ與板へと趣ひきました如何
なりませすか明晩に

第 七 席

申し上ます右一郎新平は源藏を連れ與板へ乗こみまして宮本屋と
云ふ旅宿へ止り日の暮るのを待まして燈が點と夫々仕度を致し

七 惣 の 俠 義

新平に源藏を連させ右一郎は信濃川縁の土堤に待て居ました源藏は國藏の宅へ参り源今晚は源藏でムいます若者ヲ、源藏か
チヨットも顔を見ねへノ源商買都合で三條下へ行てたから御
不沙汰した親分わエ若者今日小千谷迄行たヨ源清見の旦那さ
まは若者奥にね出なざる源チヨットれ目に懸りたいが左様
いつて下さいナ若者今左様云つてやるから待て居ねへと奥へ参
り清見へ申しますると清見は出てまゐり得源藏何の用だ源
旦那さま貴君に是非れ目に懸りたいと云ふ方が此先に待てれ出
なさいます此方へ出たいが國藏親分に不都合が有つて家へ行兼
るから誠に濟ませんが貴君さまにね出を願ひたい願ひまう
す事が有からと云つてまつて居ます得誰ダ源行つてた違な
されば分ります得左様か誰かは知んが行てやらうかど是より
得四郎は仕度をついたし源藏と共に出かけると新平は見へ隠

七 惣 の 俠 義

れに尾て参りまして早土堤へ掛りました得源藏何處まで参る
のだ一体待て居ると云ふのは誰だと云ふ後ろより右誰でもな
い松江右膳の伴右一郎だよも見忘れはいたすまいと名乗られて
得四郎は見るといかにも松江右一郎でござりますから驚ろさ
して得左様云ふね身は右一郎か右いかに右一郎だ八年以
前本國三春に於て父右膳を討て立ち退し汝ちの孫悪その無念を
晴さんため歳月尋ねた甲斐あつて此處で逢たは天の助け父の仇
サア尋常に勝負しろと刀を放つて立向へば得成程和郎の父
右膳は已が討たに相違なし流石は武家の片割と仇呼はり感心い
たした不便ながらも返り打此刀を受取とエイト一聲掛けや否や
刀を抜て右一郎に斬て掛る右一郎も抜合はせ暫しの間戦かひま
したを新平と源藏は手に汗掛つて見て居ました清見は右一郎に
斬立られ後へくと下る所を右一郎は曇みかけて斬付るを清見

七 惣 の 俠 義

提の爲源蔵一所に坊頭に成らうと云ふを側で見居る右一郎は
 提の爲源蔵一所に坊頭に成らうと云ふを側で見居る右一郎は
 シ此邊が悪事の年貢納めとは是も同じく切由なき雨親の昔
 をしたを聴かない故夫を苦に病二人とも歸らぬ旅へ行ました、シカ
 一恐ろしいもんだナア此で思ひ當つたは巳の悪事を雨親が意見
 さした清見さまが所も同じ信濃川へ飛込で命を落すも天の報ア
 出来ないもんだナア此信濃川で殺したと思つた方が助かつて殺
 由蔵先刻からの刀打を怖々此所で見居たが源蔵とん悪い事は
 右ム一能も發心いたしたと語る後の船小屋より始終を聞いた船人
 四郎様多分死に成つたに相違ないから其吊らひをいたします
 さま生れの程は知らないが急流劇しい此河へ飛込なすつた主人得
 と變ねれ過なされた右膳さまれ妹子のれすま様悪では有と駒木
 プツツリ切て夫へ出し源御覽の如く坊頭に成身は墨染の衣

七 惣 の 俠 義

はもう堪らぬと外引し前なる信濃川へザンプト計り飛入ました
 が悪運終に盡果て此に一命を落しました右一郎は切齒をなし今
 にも身体が浮上るかを見て居ましたが其切見へすなりました新
 平は焦躁で源蔵を押しつけ新敵を逃した腹癒に此源蔵をかう
 してやると道中差に手を掛けて斬うといたしますと右智らく
 待彼を此處に殺したとて草葉の蔭の父上や妹の追善供養にも成
 まいし其上清見の首は見ざるも確に死だと覺れば個奴の命は助
 けて遣すか悪き主人を持つのは其方の不幸其罪を憎で其人を憎ま
 すと云ふ諭へも有と汝の命は助けて遣はす向後心を改めた
 めて善心になつて世を送れ必ず右一郎がまうしたことを忘れま
 い源蔵は大地へ兩手を突き源有がたい今のお言葉此源蔵の
 鵬へ染波りました命を助けて下さるのみならず今の御意見有が
 たらござり
 と言ながら新平の道中差へ手を掛拔より早く

七 惣 の 俠 義

賞まして奥板の土堤で別れましたがその後源藏は智曉山藏は西
真と改ため其頃奥板の二人坊頭とは此二人でござりませぬ
しかわつて右一郎は敵清見得四郎の首を擧ざるを無念遣方なく
は思ひましたけれども詮方なく新平を伴ひ飯田村へ立歸り
れ勝長兵衛にも此由を物語たり此處に四五日逗留いたした
或日長兵衛新平を招き右借雨人色々厚き世話に相成た禮は言
葉で盡されぬが夫はさて置敵清見を討洩し多分は水死致したに
相違ないが吾が手を以て殺さねば全く討たに非ず且君侯より
拜領の國光の一刀并に敵討免状まで獲島水難の砌り皆河中へ流
して仕舞本郷へ歸參の手藝を失なふたる上は是非に及ばず信州
上田へ先立歸り時節を待て歸參致さんまた勝も永々長兵衛の
世話に相成た此禮も追て致さう明日は兎も角もね勝を連れて出立
に及ぶから左様思つて呉へ長飛でもないね勝を連れて出立

七 惣 の 俠 義

いません、是まで受た御恩返しナア新平せん新さうでございませ
すとも必らずに及びませんア長々の御心勞も水の泡と
消失ましたね心の中を察し申し上まするシカシその中には御運
の開く時節もございませうから必らず御短慮を遊さぬ様にと二
人は右一郎を慰めましてその夜は四方八方の咄しに明し愈明日
になりますと出立の用意も出来ましたから右一郎夫婦は長兵
衛夫婦に厚く禮を述べ新平を供に連信州上田へ立歸りました
是より何事もなく昨日と暮今日と明早三年立ました後のれ唯し
でございませぬ長兵衛の宅では早や惣七も今年は十才に相成まし
たが長兵衛の妻れたねが病氣でございます惣七は至つて孝心深
き故母の枕邊を離れず看病致して居ましたその甲斐もなく
次第に重なるにつれ惣七子心に醫藥の力にては逆も行ず此上
は信心より外はなしと毎夜氏神へ水垢利取て裸体參詣を致しま

七 惣 の 俠 義

すを父長兵衛は之を知。長惣七和兒の孝行は村中で誰知ん者は
無が見ば毎夜。此寒に氏神へ裸体參詣を仕て居るが。寒氣
に當つたら孝行に似て大不孝是ばかりは止て呉れ家で拜んで
その孝行が通れば御利益は有ものだ。ヨ分解つたか惣七。惣七老
爺の言事ア分つてゐるが今夜で丁度二十一日目只た一夜にして是
まで掛た大願を反古に爲のは勿体ないし夫に自分も男だアナ一
旦思ひ立た事を寒さが強いと云て中途で止るなら死だ方が勝た
ワナ今夜モウ一夜の事だから案じねへで遣て下さい。長一夜と
あらば仕方がないが必ず明日からは思ひ止まれと案じながら一
旦言出した言葉の後へは引ぬ氣象を察し餘義なく長兵衛は藥を
煎じにかゝりませする彼是七ッ下りに成ますると國の名物で雪が
チラ。降て参りませした日が暮ると益々劇しくなりましたその
雪の中を惣七は一心不亂と水を浴び鎮守の森へ掛りませする時し

七 惣 の 俠 義

第 七 席

も風は烈しうございますから雪は全で煙りの様でございます惣
七は目口から吹込れ息がつけませんから所々で立休んでは参り
ますはや鎮守の森へ差掛りまする折しも風強く吹いて参り梢に
積つて居ました雪が惣七の頭から全身へ吹れろしましたから惣
七は思はず氣絶いたしウンと云つて其處へ倒れませする所へ雪は
段々と積あはれや惣七の一命は危うい所でございました

さて申上ませ義俠の惣七も追々ど面白く處になつて参りませ今
晩から惣七の傳記に掛りまするが昨夜も申上ませする通り惣七は
寒中も厭はず毎夜。母の病氣を癒さんと水を浴鎮守へ裸体參
りを致しましたが頃しも十二月の八日の夜雪は烈しく降ませる
其吹雪の爲に鎮守の森まで来て倒れませしたかその時向ふから來

七 惣 の 俠 義

る提灯は父の長兵衛でございます同人も一旦は得心して参詣を
許しましたたが後に惣七の身を案じ鎮守の森まで参りますると
雪の中で埋もれて居るものがございますから驚致して走りより介抱を致し
ると悴の惣七でございますから吃驚致して走りより介抱を致し
ながら長ソレ見ろ自己の云ない事かヤア惣七ヤアいと呼
まするど親の真情が通じましたか惣七は呼吸をふき返しました
夫より長兵衛は惣七を背負我家へ歸りまして鶴火を焚て介抱す
ると漸々元の様になりました惣七爺かアア有難うございま
す長夫だから止と云つたんだ然し貴様の孝心は天道様も成
じ成さらうから追付れたねの病氣も癒らうヨ惣七何か早く癒れ
ば宜と話を母の種は屏風の内にて之を聞まして惣七の孝心
を喜こんで泣て居ました扱日數も経まする中に一ト度は本復を
致しましたたが定業の盡る所でございますか翌る年の四月十八日

七 忍 の 俠 義

にれ種は歸らぬ旅へと赴ひきました長兵衛親子の歎きは言迄も
ございませんが親類共に勸解られ涙ながらにれ種の葬式を出し
ました夫より惣七は所々へ奉公に出ました未に成ますると北
越俠客の一人新飯田の惣七と人に知らるゝ次夫に成ます程の
者でございますから幼少より万事に能暴且博奕を好みまして何
所へ行ても辛抱が出来ませぬスルト近所に針ヶ會根と申す村が
ございます此村に五十嵐藤左衛門と申して金満家がございま
す此家へ惣七が奉公に参りましたのは十三歳の時でございま
す或夜此家へ帯刀人体の賊が二人押入をしまして家内の者残らず縛
り上げましたたが惣七一人を見落しますと惣七は布團を被つて
様子を伺がつて居ますと一人の賊が之を認め惣七の布團を反ト
げ賊コレ丁稚貴様丈は赦して遣から金の有所へ案内しろ惣
案内はしますから何ぞ免して下さい賊赦してやるから早く安

七 惣 の 俠 義

内をしろ物此方へれ出なさいましと金雪燈を付先に立ます
から賊は手分して一人の賊に内を守らせ一人が付て行ますと
賊シテ金何處に有のだ物向ふの土藏でございます 賊ム、
好々はやく行けと扱町の土藏と違ひまして在方の土藏は表家よ
り餘程離れて居ますから此土藏へ行まする路に肥溜が二本埋
て有りますその前に來懸りますと惣七は立止り 惣モシ旦那
土藏は二ツ有ります此方の土藏は着類諸道具が這入つて居りま
す向ふの土藏は金計りでございます何方へ案内致しませう 賊
金の方へ案内しろ 惣夫では此方へれ出なさいと言ひながら賊
の隙を見て突然腰の邊りを力一杯に突ますと不意を打れて賊は
アツといふ間もなく肥溜の中へ真逆さまに落ました委細管はず
惣七は表家へ驅て参りまして家に居る一人の賊に向ひ 惣今の
旦那が仰しやいましてが餘まり金が澤山で迎も一人で寺切なの

七 惣 の 俠 義

から早く貴君を呼で來て呉ると 賊左様かと言ひながらそのま
ゝ走り出しました切戸口を惣七はヒッヤッとして仕まひまし
た賊は外へ出て 賊ムウウム臭い、鼻がもげさうだと片邊を
見ますると肥溜の中でパチャ、苦しみながら 賊誰か知らな
いが上て呉れ 賊民五郎殿ではござらんか如何したんだ 民丁
稚に謀られ此糞溜へ突落された何うか上げ下さい 賊上ろと云
つて手が付られんテ 民手が付けられんと云つて打遣とかれち
やア困るワナ 賊夫だど云つて臭くつて寄付けられないものヲ 民
和殿は其處に居てさへ寄付けないと云ふが中に這入て居る拙者
を察し玉へ臭いのは通り過て腸迄糞に成た様子だと是より漸々
の事で上へ引摺上ましたた話しは變つて惣七は家内中の繩を解
き鉄盤を叩き火事よくと聲を立ましたから二人の賊は何處へ
行たか其切に成りました主人藤左衛門は今般惣七の頓智を感心

七 惣 の 俠 義

致し他の奉公人よりも目を可愛がつて置ました物七が十五の時でございまして父長兵衛病氣に付暫時の暇を貰ひに來ました元來孝心の深い物七故早速主人方へ申し込暇を貰つて新飯田へ飯りまして表口から物七來ました長ヲウ物七か此方へ上がますと長兵衛は床の上に居りまして長宜位ひなら迎ひにやア遣ねへれ物七如何だチットハ宜かね長宜位ひなら迎ひにやア遣ねへが醫師殿の云ふにやア餘ッ程六ヶ敷と云だから手前を迎ひに遣うたんだ隣家の叔母御に禮を言つて呉れドンナに世話になつたらより看病に閑なく手を盡しました二三日経過と醫師が参りまし餘程重ひて勿論此で人參劑を用ゆれば治らん事はないがその薬を用ゆるには少なくも五兩位はなければ治らん事はないがその薬

七 惣 の 俠 義

合は薬は何時でも盛て上げる實に高金の薬ゆゑ心外ながら是許りば現金でなければ困るヲ惣ソナラン五兩の金が有りましたら爺の病氣は治りますか醫如何も治して進せる惣五兩の金を拵らへて宅へ持つて出ますから如何か願がひまうしませす醫宜しい其ちやア待て居るから藥料を持つて來て下さいと醫者は歸りました元來父長兵衛は貧窮でございましてから物七は五兩の金に差問へ惣爺己ア鳥渡そこへ行て來るから此藥を呑で居なさいと枕元へ藥を置き小包を背負て出て行ました此間村を田中村と申しまするが此處に万五郎と申す賭博打がございます乾兒も十二三人有まして毎度盛んに賭博が出来て居まするそれへ物七が参りまして惣今日は万惣七か何處へ行のだ物且那の俵ひで金を受取に行て來た万夫ちやアチット遊んで行やアナ物七は傍りを見ますると奇偶が盛んに出來て居まする

七 惣 の 俠 義

から万五郎に向ひ惣親分五兩計りコマを卸して下さい背負て居のは封金だから一ト勝負して上るからと云ふ万五郎は毎度来ては遊びますから惣七は全たく金を持って居ると心得五兩のコマを卸しました惣七は其場所に至つて頻りに勝負を挑みましたが差たる勝も得ませんから五兩のコマを彼方此方へ譲り合せ正金と交換其を何時の間にか懐ころに入れ万五郎の前へ来り惣モッ五兩コマを卸して下さい万ソリヤ卸しても遣うが先の五兩と納て呉れる惣納る位なら貸とは云ない万和兒夫でも封金が有と云たぢやアないか惣實は嘘だ一文も無い万ナコ一の賭場へ来て宜も已を騙つたか年もいかねへ癖に此万五郎ナ金さへ返せば済んぢやないか騙りだの盗人だのと人間が黙ひソナ宅へ歸れば何時でも趣興から誰でも宜から私しと一所にて

七 惣 の 俠 義

来下さい万夫ぢやア誰か一所に遣から乾度勘定しろコレ平五郎和郎太儀でも次郎吉を連れて惣七に眼て行て切を五兩取て来い平へイ畏こまりましたと次郎吉を呼び平惣七サア行ろ惣夫ぢやア一所に行て下さいと二人を伴て新飯田村へ歸りました長兵衛の門口へ参りますると惣七は二人に向ひ惣イヤ大きに御苦勞少し此上り口に腰を掛て待て居て呉ナ平成丈早くして呉ねへ惣手間は取せねへと上へ上り父長兵衛の枕邊に座り懐ころより五兩の金を出して惣れ爺先刻れ醫師さまが薬の代に五兩要と云たから金は此處へ持て来た之で薬を買て早く愈して呉ねへ惣出て出れ入り口の二人に向ひ惣れ待遠だつたが實はれ前達の見て居る通り已のれ爺が此度の病氣その薬の代が五兩入から万五郎親分を詐はつて五兩の金を持って来たのだ其様譯だから今と云つて和郎たちへ渡す金は無いから二人して手ふらでも

七 惣 の 俠 義

歸れまいから金の代りに渡す物がある之を持って行て下さい 聖
さう云ふ事なら仕方がない百貫の形に編笠一盞何でも宜から早
く出しねへ 惣今遣ヨソラ外の品ちやねへ己のこの首を持って行
て呉ると事ながら其處へドツカリと座りました二人は驚ろきナ
ニ首を持って行と 惣さうヨ和郎達も空手で歸つちや役目が濟め
へ遠慮なしに持て行ナサアスツバリと遣て呉れへと言放しまし
た面魂にギョツと氣を呑れまして言語も出ず只茫然として居り
ましが平五郎は暫時有つて 平アア驚ろひたナア次郎吉 次
兄イ宜胸胸だナア 平如何して此首計りは自己には取れねへ現
の病氣を治さんと命まで差出たとは日頃の品行には似合ぬ孝行
此話を親分に歸つて仕たらマサカ首を取うとも云やアしめナア
次郎吉 次兄イの云ふ通り歸つて話しを仕て見様と其儘二人は
歸りましたして万五郎に委細を話しますると同人も其志ろさしに感

カノ

七 惣 の 俠 義

心仕まして再び催促をいたしません物七は夫より色々手
盡しましたが其甲斐もなく長兵衛は其年の十月三日に死去致し
ました物七は殊の外力を落しまして野邊の送りを營なみまして
後は父の業を引受け船乗と成つて居りました茲に物七が始めて
俠客の名を賣出しました高野宮村の眞光寺で大喧嘩の話をしは
追々申上げます

第 九 席

引續いて申しあげます茲に新飯田の隣村に高野宮村と云ふが有
ましてその村の眞光寺と申すれ寺に於きまして毎年八月十二日
に流瀧頂と申して無縁招霊の爲に大施餓鬼がございます此砌り
には近郷近在の男女先を争そふて出ますまことに賑やかな事
ございます此とき原中の掛小の酒やに呑で居ましたは隣村の

九

七 惣 の 俠 義

分村の茂十郎と申す者でございまして五六人の友達を相手に
茂コレ和郎達は何と思ふか知ねへが此高野宮は自己の村も同様
だが真光寺の施餓鬼と云やア毎年この通り人が出るが左様云つ
ちやア自慢らしいが此かいわいで祭りだア鐵だアと云つたつて
此なに人の出る事ア有めへ押かりながら 甲さうともく 茂十
郎の云ふ通江戸だッて如此事ア有やアしねへ 乙是が人間だか
ら宜けれせも犬なら噛合て喧ましい事だらウナア 茂馬鹿ベエ
云てるだア皆々アハハハハと話しを仕て居りますと向うより参
りましたの針ヶ會根村の五十嵐藤右衛門で是は惣七の元主人
でございます此時十九に成ます娘れちかど云ふを速其後ろか
ら白根町の呉服世を致す勇二郎と申す此れちかの聲と三人連
で参りまするのを酒屋に飲で居ましたる一人が見掛 甲茂十郎
見ろ向ふから来るのは針ヶ會根の五十嵐藤右衛門が娘を連れて

七 惣 の 俠 義

詣仕たど見へる 乙やア健か茂十郎とん和郎が女房に貰うと云
つたんでアんすナア 茂成程左様だ己もアノ五十嵐とは死だ
ね母ど何分か引張合た中だ夫故己がアノれちかを貰いたいと人
を遣て掛合たがアノ藥籠親爺がジャく張てアノ後ろから来る
白根町の呉服屋で勇二郎と云ふ奴に約束をしたから駄目だと云
つて断はりやアがつた後で聞やアあのねちかも勇二郎に大變に
惚てると云ふたアナントマア思ひましたい事ではねへか此處へ来
たこそ幸はひ此酒屋へ町込で彈太された意趣晴しを仕様と思ふ
が皆なも手傳て呉めへか 甲乙共く 阿兄に酒を御馳走に達て
不好ども云はれめへ 茂夫なら頼むと待て居りまする處ろへ藤
右衛門親子は斯る事が有うとは露知らず来懸りまするを茂十郎
聲を掛けまして 茂其處へ行のは針ヶ會根の五十嵐さんぢやア
とさんせんか 藤コレハく 六分の茂十郎さん御参詣かな 茂

七 惣 の 俠 義

マア此處へ這入て休息で行なせへ 藤イヤ有難いが私しア連が
有りますから一足先へ 茂マア待ッしやい何にもねへが一ッ
香で下さへど無理に猪口を差します藤右衛門詮方なく腰を掛
ながら 藤コレ勇治郎と申しまして不
勇コレハ初めてれた目に掛ります私くしは勇治郎と申しまして不
調法者以後はれ心易く願ひます 茂ハア一和郎が勇治郎さんか
私ア茂十郎と云ふ六分村の名代者でアんすれ近附に一ッ上やせ
う 勇有難ふ頂致します 茂客だら私に呉なせへ和郎の色男
に真似る様になれ 盃でも頂ださやせうさうしたらちッどア女が惚
るだらッ皆なさうぢやアねへか 甲さうども 己も其れ餘り
の盃が頂だきてへと云ふ中茂十郎は有合ふ井を取り勇治郎に指
しながら 茂之で一ッ上やせう 勇有難うはございます御酒
は誠とに不調法で 茂ナンダ酒が嫌ひだれちかさんに酌でもさ

七 惣 の 俠 義

したら香るだらうが邂逅にやア己が酌で呑くらッせへと云ひ
ながら井に酒をつぎ勇治郎を目掛けて投付ました勇治郎はザッア
リ頭から酒を浴び 勇コレハ何をなさる 茂ナンにもしねへ阿
主に酒を呑せるのだ 甲さう共口へ呑せるのは勿体ねへか
ら茂十郎兄が頭から呑したんだ藤右衛門は見兼て割て入 藤茂
十郎兄何が眼が立か知ねへが是は私しの娘の聲でござる何故
理不盡ナ事をさつしやる 茂したがさうした總体手前たち親子
の氣に入らないのだ酒を嗜むは愚かな學愚頭々々吐しやア
斯してやると突然勇治郎を突倒しましたスルと大勢の参詣人が
ソレ喧嘩だと云ふと居合したる五六人が拍子に乗て藤右衛門勇
治郎に打てかよる此折新飯田の若者七八人始終を聴て居ました
が中へ這入 若マア如何云ふ譯か知らねへか双方とも勘辨をし
なさい 茂イヤ勘辨はならねへ其處を退て呉れ 若者是りやア針

七 惣 の 俠 義

ケ會根の藤右衛門殿だが何が意根で勘辨が出来無のだ己達も新
飯田の者川一ツ隔ッたッて一ツ村も同じとだその若者が七八人
中へ這入ッて口を利のだから何分任して吳なさい茂假如新飯田
の者たッて村内の者たッて任すとア出来ねへ若者夫ぢやア如何
でも任されねへか任されなけりやア宜サア是からア已が敵手だ
如何ともしろ茂イヤ面白野郎共打壘んで仕舞と一同擲ッて掛
りました此時新飯田の者も同じく打台大陸に成混雜をします
折から新飯田村の若者も多人數參詣に來て居りますから新飯田の者を助
飯田の者と六分村との喧嘩でございますから新飯田の者を助
けろと集まりました人數は凡そ五六十人でございました此方は
六分村三方村高野宮村の若者が一組になり新飯田の者を皆殺し
にしると總掛りに掛ります新飯田の者も今は一生懸命に敵合て
居ります其中へ年の頃五十二三になる男が衣裝を見ますると手

七 惣 の 俠 義

織木綿の着物に茶の敷餅の紋付の紋の大サは二寸七分八分袷の巾
は三寸五分長さは一尺六七寸でれ辞儀をすると背中の真中頃へ
裾の來さうな短かい羽織を着て出て参りました此仁は六分村の
庄屋で太次右衛門と申す村中の口利でございます郷合て居りま
す其の中へ分入り二言三言仲裁口も利ましたが何を云ふにも大
勢の事と脱捨て向う鉢巻を致しまして先へ立ち太新飯田の者
て羽織を脱捨て向う鉢巻を致しまして先へ立ち太新飯田の者
は一人も脱すな皆殺しに仕る三方村の渡船と早く此新飯田の
奴等が加勢に來るかも知れねへから早く仕るくど奴鳴ます
と二三人の若イ者が人を搦分一散に走り付いて三方村の渡舟を
止ました尤も此渡舟を止られますと新飯田から來る者が出
來ません其時新飯田の若イ者一人切抜け村へ立歸りました此際
惣七は宅にて一人酒を飲で居ました處へ息を切て歸込み若者惣

七 惣 の 俠 義

七兄イ〜大變だ〜惣吃驚した大變どア何が大變だそうし
て人の内へ草履穿で上る奴がある者か若者周章喰ちや不好い
惣手前が周章を喰て居るんだシテ大變どア何事だ若者何しろ水
一杯呉んねへかど一口水と呑ホツと息を吐まして若者今日兄イ
も知ている通り眞光寺の大施餓鬼村の者も大勢參詣に行た處原
中の茶屋で六分村の茂十郎其外大勢が酒を飲で居た處ろへ針ヶ
會根の阿兄の御主人五十嵐藤右衛門さんが娘のれちかさんと白
根の聲殿を連れて來懸るのを呼込んで酒を勤めて喧嘩を吹掛其上
に藤右衛門さんを始め勇治郎さんまで散々打擲て居るから村の
者が中へ這入色々口を利たが相手が酔て居るから譯らねへで口
を利た者に打つたが初まりで夫から大喧嘩になつた所ろへ
六分村の庄屋の太次右衛門が來て新飯田の者を皆殺しに仕ると
云つて指圖をするから新飯田の方はモウ半死半生だ早く兄さ行

七 惣 の 俠 義

て吳んねへ惣ソリヤア眞實か若者眞實處ろぢやない今打合の
最中だと聞て惣七立上り惣針ヶ會根の間も猶豫はならない直ぐ
の者が喧嘩をしたと有るからア瞬間の間も猶豫はならない直ぐ
に高野宮へ駈け付け御主人初め村の衆を助けにやアならないと
手疾やく支度に及びました惣七は元來力らは五人力に劣らず殊
に天性剛氣の壯夫奈何でか猶豫のございませウ銅金造りの長物
を打ち込み有り合ふ手拭を以つて鉢巻を致し尻を裏げて一散に
川端まで驅付ました來て見ると三方村の渡舟が止つて居ります
から向ふを見るとき砂煙りを立て打合の眞最中惣七見るより聲を
上げ惣舟を出せ舟人ウ々々舟を出せ〜と申しましたも庄
屋が止ましたのでございますから舟を出しません惣七焦燥て自
段駄を踏みましたので惣扱は渡舟を止めたのだナ丈の知れた此川泳ぎ越し
て六分の奴等を皆殺しにして吳んど聽て若物を脱捨手早く大刀

七 惣 の 俠 義

も七とを惣避遣飯泳麻が水を引
せを思散七易る田着に髪煙引
ず討ひして七易と村のまははり
腕取ままし戦て懸しとと苦は
と目れましたか戦て切方敵し
釘のれましたか戦て切方敵し
のつに云ながら小石或ひは薪
迄と荒廻り遂々大勢を追散し
と目れましたか戦て切方敵し
のつに云ながら小石或ひは薪
迄と荒廻り遂々大勢を追散し
と目れましたか戦て切方敵し
のつに云ながら小石或ひは薪
迄と荒廻り遂々大勢を追散し

七 惣 の 俠 義

右衛門親子並びに村の若る者を引連て三方村の渡場へ來まして
船を出しなんなく新飯田村へ立歸りました扱六分三方高野宮三
ヶ村の若い者に疵を負者も多く力之庄屋の太治右衛門にも餘程
の深疵でございますから三ヶ村の者打寄せして掛へ訴たへま
した此結局は如何なりませうか晩明申上げます……

第 十 席

引續いて昨晩の夜談を伺がひます惣七は庄屋太次右衛門を初
め大勢に疵を負せましたので深海の領主より役人が参りまし
て惣七を召捕り調べ中入牢を申し付られました三ヶ村にては太
治右衛門初め若い者の命に別條はございませんから人が這入さ
して内濟に致し惣七は出牢を致しませんと尙々好男に成せして
近郷近在の傳奕打に交際い其名を知らん者もない様になりまし

七 惣 の 俠 義

た茲に新飯田村の文右衛門と申す者の娘を高と云ふを妻と致し
た婦の中も睦ましく致して居りました高野宮の喧嘩に付入牢中
夫原の惣兵衛政五郎葛塚の小藤治加茂の虎屋を首めとして所々
水原の惣打から差入物が有ましたが如何致したか觀音寺の久左衛
の賭博から差入物の有ましたが如何致したか觀音寺の久左衛
門と長岡石内の綱助の方から見舞が参りませんから惣七は甚
はだ不平に思ひまして時機が有たら此返報を致さうと考がへて
居りましたスルト魚沼郡浦佐驛にて毎年九月一ヶ月馬市と申し
て大層土地が盛ります加之見沙門天の祭が有りますから上
は湯澤土相下は大白川二十ヶ村古志蒲原の人々が信心やら遊行
やら買物やらで老若男女の差別なく治掛で参ります此處の博
奕は越後名代の大勝負でございます上州信州の巨魁なども會り
まして盛んな勝負を致します此處は長岡石内の綱助の繩張内
でございませすが此時惣七は日頃の不平を散せんと只一人にてそ

七 惣 の 俠 義

の場所へ参りまして見ると勝負の真最中でございませす甚は恐れ
入たれ話しでございませすが龍生は博奕の事は存せんが骨子とか
まうしまして一天地六東西四三南北五二と釋迦様のれ説な
れた道具ださうでございませすが夫を二ツ坪皿とか申す物に入
して勝負と聲を懸て開ます中は偶と半どの目の争をひださうで
ござりませす惣七は群集の中に頬被りをいたし混れ居りました中
益とかまうす者が聲を上げ中「サア、張た、偶方、寄方は止
つた偶方」と頻りに呼で居りませすに此際寄方に計りコマを
卸まして偶方は張手がございませせん傍はらに居た惣七が惣偶
方へ張たい勝負しろ中「駒を卸て呉れなるとも正金を卸て
れ呉れなるとも寄方を見りやア二百兩餘りの駒と正金で纏ま
つて居るぢやア有ませんか口でばかり張たぢやア勝負が出来ぬ
へ惣口で張ちやア勝負に成ねへか成さア今帳て遣と泥草鞋の

七 惣 の 俠 義

の 榮五郎と申す人にて、中盆ソレ賭場暴だ、命の不用奴と見え、追取の腕前、

七 惣 の 俠 義

來て居ました、榮五郎と云者、肝ッ玉見殺しにするは、此處で見て居たが、年や

七 惣 の 俠 義

の新飯田の惣七といふ遺出者以後はね目を懸て下さいまし少し
の事から此機問違ひになり大間板の親分にね世話に爲ちやワ濟
ません何分れ任せ申ませうから宜敷様にね申す 榮夫で
好々何しろ此處では仕方がない何處かで一杯遣らうヲイ誰か來
てヲヨイト一杯遣處ろへ案内して吳ンねへ子分へ御案内を致
しますと先に立榮五郎は惣七を連れて浦佐驛の割烹店松平と申す
内く参りまして子分ヲイ姉ねイ ね客を座敷は空て居るか
下女「ハイ二階が空てるスケイに上んナレヤ子分親分イ二階の座
敷が空てるさうです 榮ソウカ二階が空てるか新飯田の兄イサ
ア上つて下せい惣マア親分から 榮夫ちやア御免なせへと二
階へ上る續いて惣七も上りまして座敷へ通りますと下女が茶燵
草盆を持ち来り下女「出なんシヨ今日馬市も大分盛りやんして
大層人が出やんした兄やそん達も馬ア買にござつかね今年は馬

七 惣 の 俠 義

もイレイ高直スケニ些少も賣ねへだムン夫だアから己が處も開
だスケに今頃ござつても二階の座敷が空てるガンダガチ夫は
さうとね着は何にしやんせうチシ 榮ヲイ姉ねイ和女のいふ事
は何だか一向譯らねへ下女「譯らねへガンだつて面白イ人だチッ
かムン 榮尙々譯らねへ何でも宜から酒と肴を早く持て來い
下女「直持て來だアムンと下へ降る暫時經過と綱助の乾兒十五六
人上つて参りました榮五郎の座敷の唐紙一重隣房で之も同じく
酒を始めました榮五郎は盃を取上げ 榮「新飯田の兄イれ交際だ
一杯飲でれ吳なせい 物有がたふございます頂きますと盃を引
受る此際隣房で大聲にて子分如何だ今日の喧嘩は惣七の生意氣
野郎がヒタパタしやアがつて狀ア見ろ既での事に殺して仕舞と
思つた處ろを大間板の親分が仲へ遣入らばつかりで命ちを助け
て遣つたなア ○左様どもくアノ畜生を切損なつたんで未だ

七 惣 の 俠 義

癩の虫が納まらぬへ △左様だとも親分せい遣入なけりやア今
時分は六道の辻邊で紛々して居やがる時分だ命冥加な奴ぢやア
ねいかど話しを致して居りまするのを横越で聴まして惣親分
九月になつても未だ暑くツて此通りの汗でございます御免な
い私ちア裸体になるから何ぞ免して下せいと帯を解き素裸体に
なり長脇差と着物を一つにして隣房の縁側へ投出しまして座敷
の中央へ御免なさい親分私ちやア百姓の小忰だ刀や脇差は面倒
くせへマサカノ時にやア腕一本だと胡座をかきました榮五郎は
是を見て猪口を差し榮ヲイ新飯田の兄イ猪口を差たから着を
仕やうと傍の大刀を引抜き切先に着を貫て鼻の先へ突出し榮
ヲイ新飯田の兄イ上州者の着を一つ賞翫して呉んねへ惣コリ
ヤア珍らしいね着だ越後者ア行義作法を知らねへから御免なせ
いと大口を開き切先の着を喰取りムシヤ〜と喰てしまひまし

七 惣 の 俠 義

た榮五郎は此体を見まして榮アア好い胴胸だ今に和郎は好
俠客に成だらう其胴胸を見るからはと手を叩き榮アノ誰でも
宜から石内の親分にチヨツクリ来て下せへと榮五郎が云つたど
言つて来て呉んな下女ハイと下へ降ますと暫時経て綱助は子分
四五人を連坐敷へ参りました榮イヤ兄弟宜奈て呉れたサア此
方へ綱上州の兄弟今日は色々厄介になつて濟ねへの榮濟も
濟ねへも入ものかサアア此方へ綱御免なさいヨと榮五郎の
傍に座りましたやがて榮五郎は惣七へ向い榮ヲイ兄い着物を
引掛て呉んナ惣ヲイと着物を着まして元の處ろへ坐りまする
と榮五郎はまた綱助に向い榮扱石内の外ぢやアねへが此新飯
田の惣七と云ふ若イ者ア如何にも今に名ある博奕打に爲に違ひ
ねへ他人は知らず此大間板が見た目は違はねへから是から先は
阿兄も兄弟だと思つて目を懸て遣て呉んなさいヲイ新飯田の和

義 俠 の 惣 七

郎も左様ぢやアねへか一体一トツ國の言は、兄弟同様な綱助の賭場へ来て亂暴すると云ふのは温順くねへ他國の者が此處へ来て左様ぢやア事有つたらア共に力を添ふのが同國の交誼ぢやアねへか是からア無暗な事を遣ねへで中を宜しなざるが、いゝぜ不及ながら此の大開板の榮五郎が中へ遣入て頼むからノウ惣段々々の御調諫まことに面目ございません此上は榮五郎親分万端宜しく頼みまうします榮其首で石内の此新飯田村の惣七兄イに、盃を一トツ遣て呉んねへ己が媒人をするから綱イヤ段々ど骨折を懸て濟ねへ何事も貴所に任したと綱助は盃を採て惣七に差すのを榮五郎中で取て榮石内の兄弟是から先は此惣七兄イを弟だと思つて目を懸て遣なせい惣七兄イね前も亦綱助兄弟を兄だと思つて共々力らに成つて遣なせい惣七兄イね前も亦綱助兄弟を盃を受取て綱助に遣す綱助飲で榮五郎に預ける此處で綱助惣七

義 俠 の 惣 七

は兄弟分となりまするね話變つて觀音寺村の久左衛門と惣七の彌彦祭の大喧嘩は一ト息吐て申し下げます

第 十 一 席

扱て申し上ます茲に惣七の子分に鶴森の三太郎と申して少々物の足りない人がございまして根が正直者ですから惣七初め一同に可愛がられて居りました茲に三條町の木原屋と申す遊女屋にね静といふ遊女がございまして之と深く馴染まして折々登樓を致します或日此へ来て愉快極めて居りますると同時に竹木屋と申す遊女屋がございまして其所に遊んで居た三人連の客一人は觀音寺村の久左衛門と申して越後名代の博奕打の子分で山の勝三といふ者がございまして外二人の連が有りました勝三も矢張れ静に馴染で居りますから竹本よりね静を呼びに遣り

七 惣 の 俠 義

ましたが鶴の森の三太郎が参つて居りますから断はつて参りま
せん勝三は一杯機嫌で勝れ静は何故来ないのだ下女「只今貰ひ
に行きましたかね客様が有るから来られねへといひました勝れ
られねへの来られるとの馬鹿ア言ナイ誰だと思ふ峯山の勝三様
が居らつしやつたんだ何でも管はねへから連れて来い下女「夫で
もれ客様が有るんだから左様云つたつて来やしません勝れ来な
い事が有るものか而して客といふのは何處の奴だ 下女「今聴まし
たら新飯田村の惣七親分のね身内で鶴の森の三太さんと云ふ方
でございますと聴いて勝三は面色を變へ勝れ「ナ惣七の子分だ
夫ぢやア尙ほ了簡がならねへ皆も聴や惣七と云ふ野郎は昨日今
日の博奕打で卵の殻ア尻へ着て居るくせに古い親分方を蔑視に
して居やアがる端下奴だ其子分と有るからにやア此處で逢ふた
のが百年目坊頭が憤けりやア袈裟までだ日頃已ら達の仲間を馬

七 惣 の 俠 義

鹿に仕やアがた意趣晴し是から直に末原屋へ押上つて三太と
いふ野郎を打据てね静を巳が貰わにやアならねへ二人も一所に
来て吳ンねへ「〇さう云ふ事なら勝三兄い一所に云て三太と云
ふ野郎を打ちめやうさうした上でね静坊を峯山の兄いが手に入
れやう勝れ「此事ア一番面白いと三人が下女の止るのも聞きませ
んで末原屋方へ参りました勝の森の三太はさういふ事とは知ま
せんから奥の小座敷でね静と今飲で居りまする所へ勝三が先
にたち二人後ろに續きドカカカと上りました下女「ア峯山
の親分能く入つしやいしましたねへ勝れ「能くも来ねへ二階が開
てるか下女「開て居ます勝れ「酒ト肴を早く持つて来い而してね静
を連れて来い下女「ね静さんはね客でございます勝れ「ナンダ客だ
でも喰へ勝三さんが云つたと云つて連れて来い下女「夫でも貴君
勝れ「連れて来られなけりや己が往て連れて来る下女「ア止なさい

七 惣 の 俠 義

勝「何を留るんだへ邪處をするナと下女を突飛し三人連で三太の
 飲で居まする座敷へ理不盡に足で障子を蹴倒し飛込ました勝三
 は三太に向ひ勝「ア三太兄いとやら己は観音寺の子分で峯山
 の勝三といふ亂暴者だ以後は面を覺て呉んねへソコで此處に
 居るれ静と云女は巳が遠から名染で居るんだから今夜は巳が貫
 つて行夫れとも何か云分があるか挨拶をしると座敷の真中へ大
 胡座をかきました三太は只青くなつてふるく、慄いて一言も出
 ません勝「此野郎は啞か雙か何を云つても黙つて合て張合のね
 へ大籠棒だチット性根を付けて遣らう立上りまして側へに有し
 煙艸盆で三太の頭を二ツ三ツ打ちましたれ静勝三さん人の座敷
 へ踏込で亂暴も程がありませす怪我でも有つたら如何なさいませ
 酔て居ればとつて宜加減にれしなさい勝「亂暴に違へねへ手前
 達の口を出す所ろでねへ亂暴と名が付きやア亂暴次手に斯する

七 惣 の 俠 義

のぞと又々三太に打てかゝります三太は打たれながらも一生懸
 命裏障子から飛び下りまして命辛々其場を逃出し新飯田村へ歸
 りましたのは其夜は九ツ半頃でございませす表の戸を叩き三太
 開て呉れ「岩蔵誰だ表の戸が毀れらア静かにしろ三太己だ
 開て呉れ「岩蔵三太か大層遅く歸つたナ今開けてやるから待て居
 ろと行ての戸締りを開けまして岩「サア這入れ大そう遅かつた
 ナ何處へ行たのだ三太は溜息を吐ながら三「親分岩はまだれ歸
 りにならねへが姉さんが奥に寝んで居から静かにしろと云ふ中
 れたかか目を覺しませしてたか「岩「誰だへ岩「三太が歸つたんで
 ございませすたか「ナ三太が歸つた大層遅く何處へ行たんだと云
 ふと三太はワット泣出しました岩「此の馬鹿野郎メ何が悲しく
 つて泣んだ三「口惜しいく口惜しいと高泣をしますかられた
 ねがたか「三太何が口惜しいと云ふのだ岩「聽てやんナヨ岩「此

七 惣 の 俠 義

馬鹿野郎何が口惜しくって泣んだ
三女を取られた上に打擲ら
れたア 岩夫りやア何處で
三今夜三條の末原屋へ行
た静といふ女を買つると
其處ろへ觀音寺久左衛門
の子分峰山の勝三とい
ふ奴が三人連で来て何
でも静を己に呉ると云
ふ呉れさア勘して貰つて
行くと云つて寄つて懸
つて己を三十八打擲つた
岩打たれた居て勘定を
仕て居たのか呑氣な野
郎だ夫から如何した三
夫から裏階子を飛び下り
一生懸命に逃げて来た打
れるのは何箇打れしも我
慢をするが女を取られた
のが口惜しいと又泣出し
ました岩姉さんね聽な
さいましたかナントマア
馬鹿な野郎ぢやアござ
いませんか打擲られても
宜が女を取られたのが口
惜しいとア愛想が盡て物
が云はれねへたかホント
ウだヨ今に静分が歸つて
来て左様事を聴なさんと
さんなに怒るか知やア
仕ないと話して来て仕
て居まする所へ表の戸を
叩き 惣岩や開る 岩へ
一 只今開

七 惣 の 俠 義

けまする岩藏門口を開け
岩親分れ歸りなさいまし
惣大そう家が賑やかだ
ナア未寝ないのかたか
ナアニ一寝入りました所
へ三太が歸つて来て今
皆目を覺したんです 惣
三太何處へ行たか岩親
分此馬鹿野郎にやア愛
想が盡ました惣野郎また
失策たのか岩失策た所
ろぢやア有りませんワ
ナ今夜三條の木原屋で
觀音寺の子分峰山の勝
三に散々打たれた上で
散娘までも奪取られた
て今更歸つて来て泣いて
居やアがるんですワナ
たホントうに意氣地の無
奴ぢやア有ませんか 惣
三太其勝三と云奴ア惣
七の子分と知つて打た
のか三知つて打た所ぢ
やア有ません物七とい
ふ奴は一体不山嶽の奴
だ其子分だから思ふ様
に擲れと寄つて懸つて
打ました惣ナンド逃
出したコノ義白痴めへ
手前の恥は己の恥だ
打殺されても其場に何
故居ねへ三痛くつて
我慢が出来ません

七 惣 の 俠 義

者ヲ 岩親分コンナ奴に物を言つたつて駄目だれ止なさい 惣
ホントにさうだシカシ観音寺の身内とあらば黙つて引込んぢや
居られねへ自己も彼奴にやア言分が有からと暫らく考がへ首肯
まして惣三太今度は己か意趣を晴してやるから此後は打殺さ
れても逃て来るナ 三此後は女子の側にくツついて逃ては来ま
せんどやがて其晩は寝ました借毎年六月の十四日は彌彦山の燈
籠祭と申して大層盛りますすが此處は観音寺久左衛門の繩張で大
きな博奕が出来ます惣七は豫て心に思ふ事のごさいますれば
當日只一人出掛まして彼所と徘徊して居りますると只今久左
衛門の賭場より峯山の勝三は何の氣も付ず出て来まするを惣七
は目早く見て 惣三イ峯山の兄イ一寸待て呉んねへ 勝コレハ
飯田の親分何か用か子 惣三手間は取せねへが一寸待て呉んね
へ用事とア外ぢやアねへ此間だ三條で己の子分の駒の森の三太

七 惣 の 俠 義

を能くも苛酷目に合してたナ其禮を言うど先刻から己奴の居
所を尋ねて居たんだと突然拳骨を固め勝三の横面を二ツ三ツ打
ました只の拳骨と違ひまして五人力の拳骨でございますから餘
程堪へたと見ぬまして勝三は聲を上げ誰か来てくれ 痛へく
といふ聲を聞付まして夫喧嘩だ賭場荒しだと俄かに騒ぎ立ます
ると久左衛門は之を聞付け相手は誰だと聞きまますと新飯田の惣
七が峰山の勝三を打つたといふに久左衛門大きに怒りまして新
飯田惣七といふ奴は所々の賭場を荒すと聞たが憎い奴打殺して
しまへど子分の者に指圖を致しますから子分一同は獲物くを
持まして惣七に打て掛りまするを惣七は事どもせず大刀を引抜
きまして大勢を相手に戦かつて居りまするが何分にも相手は大
勢惣七は只一人次第に弱る所を後ろより千曲川武助とい
ふ江戸場所にて二段目迄も取上げました相撲取が抱付きました

七 惣 の 俠 義

から惣七は長物を捨千曲川と組づ解れつ上になり下になり暫ら
く捻合ました惣七は最前よりの疲勞に遂々武助の爲に捻伏られ
ました所を寄てたかつてグル／＼捲に縛り上げました子分「ヤ
ア關取御苦勞大そう骨を折らせやアがつたヤイ惣七状を見ろ身
動きする事も出来やアしめへ 千曲川中々手剛い男ぢや和主方が
五人ヤ七人かゝつたッて如何して手に合もんかへソウシて是か
ら如何するのだ子分「親分が今方ね歸りになつたから此奴を家へ
擔いで行かうと夫より大勢で惣七を觀音寺村へ擔いで参りました
た入口から大勢が親分大變でしたせ 久野郎は如何した子分「遂
々千曲川關が取押へて縛り上げて連れて來ました 久夫は御苦勞
直に庭の松の木へ縛つて置いて皆なは奥へ來て一盃呑め子分「夫ぢ
やア野郎の仕舞として一盃頂戴やせうと夫より惣七を庭に繫括
にして大酒盛が始まりました久左衛門は子分に向ひ 久惣七を

七 惣 の 俠 義

酒の肴に生作にして奥やうから其準備をしる子分「畏こまりまし
たト庭へ戸板を並べ其上へ惣七を寐しまして子分「親分仕度が出
來ました 久「其ぢやア此酒を椽側へ持出せと運搬して左手に大盃
を把ながら右手には白刃を提さげ静かに庭へ下立まして惣七の
目先へ突付 久「ヤイ惣七能くも是まで其方此方の賭場を荒した
ナ今日此所へ出て來たのは己奴が命が終る時節だ久左衛門が
酒の肴の一寸だめしの生作り念佛唱へて往生しろと惣七の顔を
睨み付ますると惣七は最前より一言も口をきかず顔の色も變ら
ずバツチリ眼を開きて久左衛門の顔を見て居りますから久左
衛門は白刃を以て惣七の頬をびたり／＼と平打に打きますれど
一向恐れる氣景もございませぬから流石の久左衛門も其度胸に
驚ろきまして縛つた繩をバラりと切り捨子分に云付奥へ伴なひ
久「新飯田の兄イサア遠慮は入らぬへから此方へ來て下さい今日

七 惣 の 俠 義

の始末は外ぢやアねへが久左衛門がれ前の度量を試さんが爲に
手荒い仕事を遣たのだモウ何にも言ない感心した今日から改た
めて兄弟分に成つて呉んねへど盃を指しました此時惣七は始め
て莞爾笑ひ惣コレハ觀音寺の親分私の様な二才野郎に盃を下
さるとは有がたい以後は眼目を掛けられて引立てた呉ンなさい
と盃を受け夫より惣七は久左衛門と兄弟分に成りましたから益
々惣七の名前が上りましました扱て茲に惣七の大難に罹り不思儀に
脱がれるといふ奇談は明晩上げます

第十二席

扱て引續て伺がひます新飯田の町に三之丞と申す農家がござい
まして其家の下女にれ鎖と申して色の黒いは名詮自性其上デッ
クリと肥太た全で幸儀を見たやうな女でございましたが此女と

七 惣 の 俠 義

鶴の森の三太どが好中に成て居りました今日も新飯田の町端に
てはからず出逢三太其處へ來るのはれ鎖ぢやアないかれ鎖「オヤ
三太さん此間から手紙を遣るのに來て呉んなさらねへホントニ
和郎は無情人だヨ三何時手紙を呉んだれ鎖「アラマアアンナ
事言つてるよ昨日一昨日も遣たワナ三「フヤ〜ありやア手
紙か自己ア隣りの子供が手習紙を引裂いて投り込んだと
思つたれ鎖「アンナ憎らしい事を言つてるヨ三「イヤ實は已も
やう〜と思つては居たが親分の用が色々有から其で來なかつ
たが今夜は用を濟したから是から行ふと思つて居たのだ宜所
で邂逅したれ鎖「私も和郎に逢なればならないが有から逢
ふと思つて此處まで來たんだヨ三「立つて居て話も出來へ何
所宜所ろがと側邊を見ますると土堤下に青地藏と申す堂がござ
います青は逢とて辻占が好と洒落ながら二人は土堤を走り下ま

七 惣 の 俠 義

して見ると前戸は鍵が卸ろして有りますから横の方を開けてッ
ト這入りまして何か喃々話しを致しました未暫時詞ばがござ
いませなんだ幾等精密申し上ましても宜ろしうございますが是
からは御規則を守つて申し上ませんから何れも宜ろしくお察し
の程を願ひます 三餘り通くなるど親分に叱られるから跡は明
日の晩の事としてモウ歸らウ 鯨ソナラ左様仕て明日の晩は
開違なく顔を見せて呉んなさいと二人は出やうと致しますと
土堤の上から地藏堂の前へ駆下りて来る足音が致しますする二人
は出るにも出られず息を殺して居りますとは知らずして三人の
男一人は此長隈の青木道助と申す博徒でございます一人は金三
一人は爲八と申して矢張破落戸者でございます三人共堂の様
側腰に掛け 道扱て二人とも聞いて呉んねへ物七といふ野郎
に斯う巾をさかされちやア已達も盆の上では飯が食ねへから今

七 惣 の 俠 義

夜和郎達二人の手を借て彼奴の寝込に踏込み息の根止めて仕舞
う積りだがナント一ト骨折つては呉れないか 金夫は兄貴れ前
許りぢやアない己達も彼奴を生して置た日にやア飯をころか水
も飲やしねへナア爲八さうぢやアねへか 爲金三のいふ通りだ
シテ兄貴殺す工夫は如何する積りだ 道夜更になつて寐息を考
がへ已は表てから斬込むから手前達二人は庭から切込め 金ソ
イツハ宜工夫だ巳と爲八は庭から忍ばう 道遺損なはないやう
にして呉んねへ 爲大丈夫だ遺損なふ氣遣はないから安心しな
せへ 道ソナラ頼むと耳に口寄せ何かヒソソと密談まして右
と左へ別れました之を堂の中に聞いて居りました三太れ鐵の二
人は顔見合して 三れ鐵今のを聞いたか今夜や中に親分を 鐵
何しろ大變だ和郎はどうするへ 三どうするッテ一時も早く親
分には知らせにやアならねへ 鐵夫りやア言迄もないが怪我をし

七 惣 の 俠 義

ねへやうはさッせいヨ 三己は臆病だから怪我をする氣遣いは
ねへ 鐵として明日の晩は間違ひなく来るのだヨ 三エ、其所
どころかへど兩人は地藏堂を出ますると其まゝ三太は一ッ足飛
に歸りまして 三姉さん親分はたか「寐てお出なさるから靜かに
れしヨ 三大變が出来たから親分を起して呉んなせへたか「ま
つ始まつた仰山な大變が出来たとは何が大變が出来たんだエ
三何でもいひから親分を起して呉んなせへど大變上るに惣七
は目を覺しまして枕元で八釜敷靜かにしねへか 三親分寐て居
る所ろぢやア有ませんの方が知らぬが今夜貴君さまを殺し
に来るヨ併も三人で 惣ナニ殺しに来るとソリヤ何處の者だ
三何處の者だか知らないが今夜私が青地藏の堂に居ると表てに
聽へる足音に耳を立て居ると惣七を生かして置ては我々が飯が食
ねへから今夜夜更に斬込んで殺して仕舞ふ其處で一人の奴は

七 惣 の 俠 義

てから二人の奴は口から忍び込むと云ひやしたと聞て惣七大
いに驚ろき 惣コレ三太夫は眞實か 三眞實虚か今地藏堂で聽
た許りだ 惣ソレテ今ごろ和郎地藏堂へ何しに行たのだ 三エ
ソソリヤナニと此個は失策た其首はマアた目隠しをへ、、
惣コレ馬鹿野郎め女でも連込むんだらうアノ地藏様は崇たか
だから罰が當らアたか「親分今の話が眞實なら悠然油斷は出来ま
せんヨ 惣ナニ丈が二人や三人斬込んだッて挫折を喰う惣七
ぢやアねへから安心しろ而して手前は尋常ならねへ身体だから
怪我でもしちやアいけねへ其方の座敷で寝て仕舞へたか「縦令孕
身でも何でも現在和郎を殺しに来ると云ふのに如何して私しが
寝られませう 惣篋棒め起て居ちやア却つて足手纏ひだは寝て
仕舞へ三太郎も表の締りを能して寝て仕舞へ 三へいと慥に
ながら表の締りを致しまして狐鼠くゝと寝て仕まひました惣七

七 惣 の 俠 義

は仕度を致し其儘そこへ横に成り今にも来るかと待ッて居りま
す處ろへ三人は表の方へ立寄りまして内の様子を見ますると沉
んと致して居りますから仕済したりと二人は庭口へ廻り垣根を
越へ忍びくぐりに雨戸の際へ参り手洗水の吸込の所へ忍びました
惣七は家で大欠伸を致しながら惣アア何だか今夜は寝られ
ないと雨戸を開けて庭へ小便を致しますると二人の頭からシヤ
アと掛りまするが元より忍んで居りますると二人でござりま
するから動く事も出来ません惣七は思ふ存分用を達して仕舞心に
可笑さを堪へ雨戸をヒタリと締ながら表の方に向ひ其所へ来た
のア誰だど聲を掛けながら戸を開けて飛出しましたから戸外に
居た青木道助は不意をくらッて遁て仕舞ました惣七は引返して
縁先の戸を開きますると二人は驚ろき逃んど致しました時に爲八
は庭石に躓つぎ横に倒れる處を惣七飛掛ッて押さつた金

七 惣 の 俠 義

三は此時早くも垣根を乗り越へ逃だしました惣七は爲八を押し
惣三太く繩を持って来い 三三畏こまりましたと慄々仕ながら
繩を持って来ますと惣七は爲八を締め上げ惣ヤイ自己は何者
だ 爲へイ私は爲八と申します者で據どころなく頼まれました
貴郎を殺し奉まつりに参りましたただうそ命ちを助けて下さいま
し據どころなく頼まれましたは夫りやア何者に頼まれた 爲へイ
其頼んだ人は青木道助といふ者でございます 惣ナニ道助
に頼まれたと 爲其通り相違はござり奉まつりませんアア跡
の者は逃げて仕舞私し許り捕るとは能々武運に盡た事と存じ奉
りますとら命計りは助けて下さい 惣助けて呉ると云ふなら
命は助けてやらう以後は必ず斯な事に頼まれて来るなヨ 爲有
がたうござり奉りますすモウコレで懲々しました 惣三太野郎の
繩を解て遣れ 三ヤイ巳の親分を殺し奉まつりに来たトンデ

七 惣 の 俠 義

も ない 事 を 奉 せ つ り に 來 や ア が つ て 遂 々 自 奴 が 奉 せ つ ら れ や ア
が つ た 如 何 だ 恐 れ 入 っ た か 斯 見 へ て も 自 己 だ っ て 矢 ッ 張 腕 は 優
れ て 居 る ゴ 弱 虫 め が と 慄 ぬ な が ら 繩 を 解 せ ず と 爲 八 は 兩 手 を
合 して 惣 七 を 拜 命 辛 々 に 逃 行 せ した 夫 よ り 惣 七 は 青 木 道 助 を
何 所 で な り と 出 逢 次 第 勝 負 を 決 し や ふ と 心 掛 け て 居 り ます と
毎 年 九 月 の 二 十 二 日 か ら 二 十 九 日 ま で 三 條 町 の 本 願 寺 出 張 所 で
報 恩 講 の ね 取 越 が ござ い ます 此 處 も 博 奕 を 盛 ん に 致 し 交 して
近 郷 近 在 の 博 奕 打 が 殘 ら ず 出 張 て 大 勝 負 か ござ い ます 此 時 物
七 は 子 分 の 岩 藏 を 連 て 其 處 へ 來 ます と 本 寺 小 路 と い ふ 處 ろ で
計 ら ず か の 青 木 道 助 に 出 逢 ひ ました が 惣 七 は 元 來 其 顔 を 知 り ま
せ ん か ら 氣 が 付 かん で 居 り ます と 岩 藏 が 之 を 見 付 け 岩 親 分
彼 處 に 居 る の は 青 木 道 助 と い ふ 奴 で ござ い ます せ 惣 七 が 彼
奴 が 青 木 道 助 か 逃 せ ね へ や う に し ろ と 言 付 道 助 の 側 へ 來 て 惣

七 惣 の 俠 義

ア イ 兄 イ チ ヨ イ と 待 ね へ 巳 の 面 を 忘 れ は し め へ 夫 ども に 新 飯 田
の 物 七 を 知 ら ね へ か 何 日 ぞ や 態 々 巳 の 村 まで 首 を 取 り に 來 た ぢ
や ア ね へ か 今 日 は 幸 は ひ 此 方 か ら 首 を 持 っ て 來 た ぢ 南 無 三 三 と
れ と 云 ひ な が ら 大 刀 を 抜 き 斬 て か っ ち ます と 道 助 も 南 無 三 三 と
は 思 ひ ました が 據 せ ころ なく 之 も 大 刀 を 引 抜 き 渡 り 合 ました が
次 第 惣 七 に 斬 り 立 て ら れ モ ウ 叶 は ぬ と 大 刀 を 捨 て 逃 出 し ました
た 惣 七 法 な り 道 助 と い ひ な が ら 跡 を 追 っ 懸 ます と 岩 藏 も 後
ろ に 續 い て 追 かけ ました 道 助 は 三 條 中 を 逃 せ ました 未 に 渡
場 まで 参 り ます と 丁 度 今 舟 が 出 や う と 云 ふ 所 ろ で ござ い ます
る か ら 道 助 は 其 舟 に 乗 り 向 へ 渡 り ます と 此 處 を 本 成 寺 村 と 申
し ます 此 村 に 本 成 寺 と 云 ふ 寺 が 有 り ます 此 の 寺 は 日 蓮 上人
の 御 弟 子 で 日 郎 上人 と 申 します 昔 しが 御 座 いた して 其 日 朗 上人 が
開 き ました 本 山 で ござ い ます 昔 しが 御 座 いた して 其 日 朗 上人 が

七 惣 の 俠 義

へ這入り懺悔をなし出家となれば命ちは助かる事で御座ります
る夫故に青木道助は本成寺へ逃込まして上人に身の懺悔をして
救ひを願ひまする所へ惣七は岩藏を連れて本堂の前へ来て大
音を上げ惣頼むく番僧何誰ぢやい何方かられ出惣私しは
新飯田村の惣七と云ふ者ですが只今當山へ青木道助といふもの
を逃込みましたから此處へれ出しなすつて下さい番僧何ぢや知
らんが今方来た人も有りましたが奥へ行つて尋ねて見ませう暫ら
く待つて居て下されと番僧は奥へ行く跡に惣七は岩藏に向ひ
惣岩裏手から逃るかも知れぬへから裏手へ行つて見張て居ろ 岩
ヲツト承知と裏手へ廻りまする程なくれ上人が出て参られまし
て上人和主か惣七といふ人は成程今方青木道助といふ人が参
つて身の懺悔に及ひ命を助けて呉れいと愚僧への頼みぢや夫故
に引渡す事は成んわいな惣ナニ渡す事アならぬといよく

七 惣 の 俠 義

道助を出さないと云ひなさりや此本堂へ火を着て焼て仕舞ふせ
上人イヤ夫は無法ぢや縦令れ上の罪人でも此寺へ這入つて頭髪
を落して弟子となれば命は助かるといふ昔からの法ぢや況てや
私くしの意怨ぢやアないか其様事を云はんで助けて遣りなされ
と理非を分ました上人の言葉に惣七も元より譯つた人でござり
ますから成程れ上人の言葉恐入ましたと助けて遣る氣になり
ました處ろへ奥の方にキヤアと云ふ聲がしましたから惣七は裏
へ廻つて見ますると子分の岩藏が此談判を知りませんから早く
も踏込み道助を引摺出し一太刀おびせましたから惣七は見るよ
り驚ろき惣岩藏エ、飛でもねへ事を仕たと見ますると餘程の
深傷でござりまするから是は到庭も助かられんと思ひまして道
助を引摺ながら惣れ上人御意見を聴かぬ亂暴者と思し召ませ
うが子分の過失で此深手逆も存命は思ひも寄せせんから惣七が

七 惣 の 俠 義

此世の引渡を渡して遣ますこれやア真に些少が後の影向をし
て下さいと金壹兩紙に包んで渡しれ寺の内を汚しちやア濟ませ
んからと道助を門外まで連行し到々首を打落ししました夫より三
條町の内藤紀伊守様の御陳屋へ自から名乗て出まするとれ役人
方は直に惣七を拘留夫々吟味に成ますと元々青木道助と申者
は名代の悪者でございませる其上に此事を以音寺の久左衛門と
石内の綱助との兩人が聞付まして早々三條迄参り夫々多分の金
銀を遣ひ上下の方を拵らへましたから惣七は十日許り留置れ無
罪にて放免に相成ました次第は又明晩申上ます

第十三席

扱申上げます義俠の惣七も追々膏が乗て來ましたが今席で申し
上ますのは結局に至り惣七が大野町の木山治六と申す者に信

七 惣 の 俠 義

濃川で殺されまする其遺恨の初まりを一口申上ます爰に大野町
に穀物を渡せと致しませる龜田屋幸兵衛と申して有徳の商人が
とさりました嫡男を國太郎と申して當年二十二才になりませが
其國太郎が新潟古町の古葉屋と申して當年二十才になりませが
と申す者と深く成まして互ひに夫婦の約束を致し一世は愚か二
世三世末の末迄と云ふ深い交情でございませました或時國太郎は新
潟へ参り白山神社へ参詣と申してた糸を連出し直ちに大野へ参
りましたたが父の幸兵衛は悴に反り極々の固人で有ますから申々
内へ連込にも参りません據どころなく其頃及大野にねいて木
山治六と云ふ子分の七十人も有ます博奕打の親分がございま
す是を頼まんと思ひ國太郎はれ糸を連て門口から國親分はお
宅でございますか子分れ出なさいませ親分は奥に居ります國夫では
の若旦那サアれ上んなさいませ親分は奥に居ります國夫では

義 俠 の 惣 七

一寸私しが参つたと仰しやつて下さいまし子分長こまりました
と奥へ行まして子分親分龜田屋の若旦那がチヨイと貴君に目
にかゝりたいと云つてれ出でなさいました 治左様か一人か
子分「イ、エ奇麗な姐さんを連なすつて 治何しろ此方へ通
し申せ子分「ハイ」と出て参りまして子分若旦那サア此方へ
上んなさいまし 國御免なさいとれ糸を連て奥へ通りました
治國さんかへサア此方へ新潟へ行つたと聞きましたが今ね歸りか
子 國只今歸りました夫に就き親分にチトれ願ひの事が有つて
出ました 治ハチ子何んでございます 國外では有りませんが
此處に居りますのは新潟の藝妓で古葉屋のれ糸と申す者です
糸親方初めてれ目にかゝります 治「ヤヤ古葉屋のれ糸さんか私
しも新潟へ行つては度々藝者も上ますが名前は聞て居たが掛違
つてれ目には掛らなかつた而して國さん頼みとは 國「そのれ願

義 俠 の 惣 七

ひと申すは外でも有りませんが此れ糸と自己とは夫婦の約束を
致しまして夫は「深い中 治「ヤヤ」大變な話しだナ 國「親
分「アね聞なすつて下さい所が親爺がア、云ふ堅固人間でござ
いますから中々物が解らなくつて思ひを遂る事が出来ません其
處で實は白山へ参詣すると云つてれ糸を連出し直ちに此方へ参
つたのは如何か二人が添れる様貴君様のれ骨折で親爺の方を拵
らへて頂だきたうございます 糸只今國さんの言た通りですか
ら何分どもに親分様如何ぞれ願ひ申します 治「何の事かと思つ
たら左様云ふ事でもございませるかハ、兎も角話しは仕て見ませ
うが何を云ふにも彼通り堅いれ人だから何と仰しやるかは知れ
ねへマア一番行つて見ませう 國如何御願ひ申します 治「コレ誰
か居るなら此處へ茶を入れるよと言付治六は直ちに支度を致
しまして龜田屋の方へ参りました見ると幸兵衛は帳合を致して

七 惣 の 俠 義

居りませするから 治、旦那今日は結構なれ天氣でございます 幸、
是は木山の親分かへサアね上んなさい 治、御免なさいと上りま
して 治、さて旦那私ちやア少うし貴方にね話しが有つて参りま
した 幸、左様かナシテ話すと仰しやるのは 治、外ぢやア有り
ません、が此方の若旦那、國太郎さんが今しがた私くしどもへれ出
でなすつて仰しやるには新湯の藝妓の古葉屋のれ糸と云ふ者と
互に深く言かはし今更切にも切れぬ中是非共夫婦に成たいが親
爺が堅い方だから自分で言出す譯にも行ず折入て頼むから如何
か話しをして貰ひたいと餘義ない頼み若い間だは随分有中の
事と思ひましたから能く出向て来ました御不承知でも有ませう
が此治六に對じて如何か夫婦にして上て下さいナ 幸、エ、怪か
らん何のれ話しかと思たらアノ伴れが藝者を女房に持たいと云
ふので貴方の願へれ願ひ申しに出ましたかイヤハヤ飛だ野郎で

七 惣 の 俠 義

ございます如何して、藝者や女郎が商人の女房に成れるか成
れないか親方も御承知でせう憎ひ奴だ道理、コソ近頃新湯へ買出
しに遣と船の都合で荷が這入ないとか何とか角とか云ちやア四
日も五日も泊て来やアがつて私しが行と其日の中に用がちやア
んど足りますへイ、外の事なら兎も角も是事計かりは親分さん
れ断はり申します 治、左様だろうとは思つて居ました、が實は違
てのれ頼みゆゑ據處ろなく上つたのでございます、夫ぢやア如何
でも不宜ませんかね 幸、れ顔を潰す様だがれ断はり申します
治、其様仰しやるも御無理のない事は非に及びません、計趣ひきを
れ話し申しませう、大きにね喧ましうございまして 幸、マア宜し
ふございませう、今茶が入ります 治、又緩々参りますと治六は
立歸ました、が直に奥へ来まして國太郎に向ひ 治、マア待遠う
でございまして 國、親分誠とに有難うございませう、親爺はなんと

七 惣 の 俠 義

云ひました 治如何も不いな色々云ッて話したが御承知が
ないね 國夫ぢやア不好ませんか 治不好ません子何と云ても
ね聽入なさらず何でも添せる事は出来ねへど仰しやひましたま
た承たまはつて見りやア無理もないてと聽て國太郎は顔を
見合せ溜息を吐き涙を含で居ます 治國さん仕方がねへから絶
念なさい又其中に折を見て親爺さんに話させう其上最前の
れ話しには此れ象さんを白山へ參詣すると云ッて連出た儘だと
仰しやつたが遅くとも今日の中に返せば仔細いはないが一晚で
ても泊ると面倒だから直に是から新潟へ送つた出なすつた方が
宜ございませう 國夫ぢやア親分左様云ふ事に致しませう 象
色々れ世話に成まして難有存じます 治誠とにれ氣の毒だつけ
子へ國さん成丈急ひでれ出なさい 國大にれ喧ましうござい
ましたとれ象を連れ情々ど大野の町を離れました只今とは違ひ

七 惣 の 俠 義

まして腕車杯のない時分でござりまするから道が涉取ません大
野から新潟までは三里ございますから途中で日が暮ました二人
は足も進みませんが通り掛りました處ろは平島と申して信濃川
の縁で向ふは鳥屋野村でございます新潟の燈火が水に映り見
々ど見ぬまするから國太郎はれくめに向かひ 國モウ新潟へ來
たが如何した前世の悪縁か幾多思ひ直しても絶念られぬは和郎
の事 象妾しもれ前の云ふ通り逆も此世で添れねば死ぬと覺悟
を仕て居ます 國和女が左様云ふ心なら一人は殺さぬ私も一所
に情死して有か無かは知らないが未來どやらで夫婦に成らう
象夫なら左様して下さいましと月明りに顔見合せホロリと溢す
一ト雫芝居なら後ろを清元の延壽さんに遣て貰ひたい様な所
でございます次手に龍生が一口申し上ますが世間の誹謗に越
後女は薄情だから男に惚る氣遣いはないと申しますが私くしも

七 惣 の 俠 義

永がく御當國に居りまして略俗風人情を承知致して居りますに
中々其様薄情ナ者は有りません原來新潟の藝者娼妓衆と申すは
皆幼少の時から抱主に養育せられホンノ内娘同様で有りまして
頃のギリ／＼から足の爪の先迄親持でございまして暑塞の心配
もなく後生樂なかはりに十錢の纏頭までも私有する事は出来
ません茲に三都と違ひまして數の極つた青樓ですから好人と潜
り込んで取遣なしの真猫遊と云ふ様ナ意氣筋な場所も有りませ
ず其上に客は皆石部金吉で金鎖と襟から掛給ふ旦那方ですから
眞底から耽溺と云ふ様ナ不体裁は出来ませぬのでございませ
コで此國太郎れ糸の一件も部會の摺ッからし(否)通人のれ目から
は實に意氣地のない事に思し召ませうが此首が薄情でない驗し
で女は只男まかせ毫末活潑の舉動のない所ろが此時代新潟の風
俗でございませすから花柳社會の情事とせずホンノ地色と御覽し

七 惣 の 俠 義

給へサテ二人は小石を拾ひ袂に入れまして南無阿彌陀佛と云ひ
ながら既に飛込んど致ました後ろから帯際を取つて男待なさ
いと聲を掛け止めましたのは別人ではございません新飯田村の
惣七でございませす惣マア／＼待つた何處の人かは知らないが
先刻から何だか様子が怪しひから木影に立聽仕て居たのだマア
／＼待なさいと言へば國何方様かは知らないが生て居られぬ
私等二人 糸如何ぞ放して殺して下さい 惣イ、ヤ放さぬ自己
ア新飯田の惣七と云ふ者だが何様な事かは知らないが事に依
ら新主方の話しに乗まい者でもないマア／＼二人共心を静めな
さいと無理に止めお糸の顔を見て吃驚 惣れ前はれ糸ぢやアな
いか 糸貴君は親分さん 惣如何云譯で和主達は死なうと云ふ
のだい話で聞しては呉んなせい 國御尋に預まして面目次第も
ございません私くしは大野町の穀物渡世龜田屋幸兵衛と申しま

義 俠 の 惣 七

する者の伴國太郎と申者此れ糸と夫婦に成うと思ひまするが親父がなかく堅固人ゆへ如何しても添して呉れません夫故に死ぬ事と覺悟を致しました惣ソリヤア飛でもない了簡達いだ夫式の事に大切な命を捨様といふは馬鹿くしい夫なら何か此れ糸さんと和主さんが夫婦に成れさいすれば死な無つても宜のかい國夫婦にさい成升れば別に死ぬにも及びません 糸實は死度有ませんが添れないから死なうと云のでございます 惣ソハ……然し人間は其處を行為の本當だ自己の様に成て仕舞ちやア犬も喰ねへ夫ぢやア是から前達を親父さんの處ろへ連れて行き理を非に曲ても添して上様と二人を連れて大野へ参りましたのは其夜の九ツ頃及でございました惣七は龜田屋の門口へ参りまして戸を叩き 惣御免なさい一寸と開て貰ひ申したい 幸何方でございますか商賣は夜分は致しません 惣イヤ買物に來たのぢや

義 俠 の 惣 七

アございません此方の御子息國太郎さんの事に就て参りましたと云ふから主人が戸を開まして兎も角も惣七を上茶杯を出して款待しました 惣私しは新飯田の惣七と申す者でございます貴方が旦那で居らつしやいますか 幸ハイ私くしが主人でございます 兎の惣外の事ぢやアございませんがト是より平島にて國太郎れと言立る一伍一什間た儘を物語りまして 惣モシ旦那御無理でもございませうが如何ぞ夫婦にして上てれ矣んなさい見ず知らずの惣七が頭を低てれ願ひ申しますと聞て幸兵衛は心ろの中に驚ろきまして 幸イヤハヤ如何も難有ございまして決して夫婦にはさせられません奴ではございませが親方のね顔もあり死なうと迄に思ひ詰たる二人ゆへ添せる事に致しませう 惣其由一言は千兩万兩の金圓を貰つたより難有ございませと入口にイん

義俠の惣七

で様子伺がふ二人を連れて来て、惣二人共に聴なさい親父さんが承知して夫婦にして遣うと仰しやるから悦びなさい。是から末は夫婦中よく親父さんを大切にしまさるが宜と聴て二人は夢かど計り手を合せて惣七を拜みました。惣七も心ろ嬉しく色々止まするを断はつて其儘新飯田へ立歸りました。何が何分急場

第十四席

の事故國太郎の一件を木山治六に挨拶を致す事を心ろ付ません。でした。是が惣七治六遺恨を結ぶの首まりでございませぬ。此後、は明晩申上ます。

義俠の惣七

夫婦にするとは憎ひ仕方何時か此返報をして遣らうと云ふを幸兵衛が薄々聞まして如何も二人を宅へ置ませんから一度江戸へ遣らうと思ひます。幸は幸兵衛の弟は江戸淺草三軒町の越後屋嘉平次と申して、搦米屋を致して居ます。其處へ手紙を付て國太郎れくめの兩人を遣はしました。國太郎夫婦は惣七嘉平次の世話にて同所並木町へ龜田屋と云ふ暖簾を掛まして惣七を化の三年に難吉と云ふ長男を設けまして同じく五年に若と申す次女を生まれました。が同八年に遂に病死を致しました。惣七の悲歎は大方ならん事と云ひました。ヌルト觀音寺久左衛門の子分金五郎と申す者が病死を致しまして其妻さよと申して廿七八に成ります。其子に年と申して二才に成ります。之を久左衛門が娘にして惣七の處ろへ年藏を連子として後妻に成りまして夫婦交

七 惣 の 俠 義

情宜く暮して居りましたが爰に推谷と申す處ろに毎年馬市がございます是も亦名代の大博奕が始まり申す惣七も其場所へ参りまして歸路掛に寺泊りの割烹店桑名屋と申す宅の奥座敷で一人酒を飲で居りまする處ろへ大野町の木山治六の子分に上州の太吉と申して漸々此頃子分に成つて未だ十日程にし成りません馳出者が這入つて來ましたが惣七の顔を知りませんから草鞋穿でズツト通りまして太何でも宜から一杯付けて呉んナと入口へ腰を掛ました下女へ只今直上げますと酒肴を持つて参りました是より太吉は銚子を替て十二分に酔ました舌で上唇を嘗ながら太ヲイ内の旦那へ已ア上州の博奕打で近頃此國へ來て大野の木山の子分に成つたんだが越後と云ふ處ろは國は大きいが博賭は小せいナア推谷の馬市は大層だと云ふから如何な博賭が出来るかど行つて見たら何だアンナ兒戯行を見た様な事を

七 惣 の 俠 義

して居やアがツてアンナ博賭は上州へ來ると毎日片ツ端から出來て居らア而して一疋でも眞正の博賭打らしい奴アねへ生意氣な事を言はねへで獅子でも冠つて轉覆つて居やアがるが宜ト酒が云はせる悪口を主人が聽て奥に惣七が飲で居りまするから聞へなければいゝがど心配を致して居ますると惣七は手を鳴し女中を呼まして惣姉や勘定は幾何になる下女ハイ有がたうござりますす三朱と二百文でございます惣左様かい返錢は入らないと一分出しまして惣姉や又來るせと仕度を致して出て参りますると主人マアね靜かに入ッしやいまし惣毎度御振介と云ながら太吉の前に在る徳利と脇差の鑑で以て態と三本顛覆しませして素知らぬ顔をして黙つて出て参りますから太吉は之を覗て太ヤイ盲人人の酒を顛覆して黙つて出て行く奴が有るが何どか挨拶をして行け惣尻に目がねへから譯らねへ太何だ尻に目

七 惣 の 俠 義

をクッ付て歩く奴が有かへ盲碌めが惣左様よ越後の博奕打は
盲碌だから挨拶の仕様は知らねへが強てしろと云ふなら今挨拶
をして追うと聽て拳骨で太吉の頭を打たうと振下しまするを太
吉は何をすると思へ退ます途端に拳骨は太吉の目と鼻の間だに
當りまして急所でござりまするから堪らず太吉は只一ト打に思
が絶ました惣七は南無三とは思ひましたか索知らぬ顔で惣七
御亭主野郎が氣を失なつたから水でも打掛てやつて呉ねへ
主人如何か致しましたかな惣ナニ如何もしねへが酒に酔て居
るから目でも廻しやアがつたんだらうト其儘惣七は彼是する
面倒と思ひましたから桑名屋を足早に出でました後に家内中
太吉を色々介抱しましたか更に氣が付せんから醫師を呼に遣
まして診察を受ますと最早絶脈したと聽て家内一同驚ろき騒
いで居まする表は人立が致して罵々云つて居る所へ参りまし

七 惣 の 俠 義

たのは大野の木山が一子分で白川の虎と云ふ博徒でござります
る虎何だ大層人が立て居るナ何だ間違かね皆々何だか知
らないが大野の木山の子分が今方新飯田の惣七親方に打殺され
たと云ふ話したと聽て白川の虎は人を押分け遣入て見ますると
太吉でござりまするから桑名屋の主人に事の次第を聞き惣七の跡
を追懸ましたが行た先が譯りませんから立歸つて駕を雁ひ太吉
の死骸を乗まして大野へ歸て参りました虎親分新飯田の惣七
といふ奴飛だア野郎です今日寺泊りの桑名屋で上州の太吉を惣
七が打殺したと云つた跡へ私たちが通り掛り死骸は駕へ乗て來が
コリヤア此儘打捨ちやア置れませぬい治此間だ龜田屋の一條
と云ひ遣恨重なる惣七め憎い奴だ是から直に新飯田村へ虎私
もれ供を致しませう治ヲウ跟て來いと俄かに支度を致し白川
の虎を連れて新飯田へ斬込うと出掛ましたね話しは變りまして此

義 俠 の 忍 七

方は惣七でございませす太吉を殺して直に観音寺村久左衛門の處へ
参りまして門口から惣七奥へ通り惣七居かい子分親分は奥に居ッしやい
ますと聽て惣七奥へ通り惣七居かい子分親分は奥に居ッしやい
歸りか惣七今日寺泊りの桑名屋で一杯飲つてると其處へ來のは
ぢやアねへが今日寺泊りの桑名屋で一杯飲つてると其處へ來のは
大野の木山の子分でも面も知らねへ奴だが上州者を鼻へ掛て
此越後には博奕打がねへ様に悪口を吐したから據どころなく一
ッ打と打處が悪くッて遂に其奴ア其儘往生したのが兄貴如何仕や
う久そいつは飛だ事を遣かした併し大野の方は己が如何なに
でも納め様がお上の方が此度はチト面倒だと云ふのは先頭や三
條で青木道助を殺した時巳と長岡の綱助とが漸々の事で濟した
が其時に役人が今度は此儘下て遣が此後斯云ふ事が有った日に
やア中々只は濟されんから能く當人に言付ると旁々引導を渡さ

義 俠 の 惣 七

れて來たから惣七悪い事は言はねへ斯様しろ一ト先江戸へ草鞋
を穿け手前の妻が見ぬなけりやア下で事濟にして仕舞う幸はひ
此間二ヶ月計り巳の處に來て居たのは江戸の淺草堂前で源太郎
と云ふ貸元其處へ手紙を付て遣からア二月三月行つて來い
其中に此方が濟ば手紙は直に出して遣るさうした上で歸つて來
い惣七夫ぢやア兄貴阿兄の云ふ通り左様云ふ事に決着仕やう
久夫ぢやア今新飯田へねさよと子供を迎ひに遣うからと子分の
中心利たる者を呼び久政吉是から直に新飯田へ驅付ければよ
と子供を駕に乗て連て來い而して宅へは子分の者を一人も置ず
彼の躰の婆あを留守居に置いて來い万一すると木山治六が斬込
むかも知らねへから成丈急いで連て來いと言付ければよ始めて政
吉は大急にて新飯田へ驅付け久左衛門の口上を述べればよ始め
三人の子供を駕に乗せまして觀音寺村へ立歸りました其後へ木

七 惣 の 俠 義

山治六は白川の虎を連れて来て見ると誰も居りませんで當年六十
五になる豊の婆が一人留守居をして居ります 虎「ヤイ婆ア惣七
は何處へ行つた 婆今年で六十五に成ります 虎「此奴は豊だと
耳に口を寄せ大きな聲をして 虎「ヤイ婆惣七は何處へ行つた婆
宵に飯を喰つて寐た計りだ 虎「ナアコサ惣七は何處へ行つた
婆「左様サもう九ツにでも成るだらう 虎「仕様がねへ豊だ 治「虎
書て見せて遣れ 虎「左様しやせうと豊へ字を書て見せると 婆
私しは字はいろはのいの字も讀ないヨ 虎「字も讀なくツちやア
仕様がねへ親分如何仕やせう 治「何にしる惣七の行た先が知れ
なくツちやア仕方がねへ 虎「折捨此處まで来て手空で歸るのは
残念でございます 治「残念だつて仕様がねへと不屑に兩人
は歸りました惣七は觀音寺にて堂前の源太郎へ手紙を貰ひ妻子
を入左衛門に頼み其夜の中に觀音寺村を出立しまして江戸へ志

七 惣 の 俠 義

ろさす途中信州の上田假治町の松江右一郎の宅へ尋ねると云ふ
れ話しは明晩申上げます

第十五席

扱「昨晩のね後を申上げます惣七は觀音寺村を出立致しまして信
州善光寺から上田へ参りました此時惣七は松江右一郎へ久々無
沙汰を致しましたから假治町へ参りまして尋ねますると直に分
りました惣七は右一郎に對面致し又悴の縫之助にも會色々の物
語りを致しました此時右一郎は六十歳に相成ました妻のね勝は
先年相殺しました悴縫之助は妻を迎へ其名をね梅と申して夫婦の
中に周藏と申す悴をまうけました其夜は右一郎孫を儲けし話し
なを致して夜を明し翌朝惣七は上田を出立致して日を重ねて江
戸へ参りました直に淺草堂前の貫元源太郎方へ来て 惣「私は越

七 惣 の 俠 義

後觀音寺村の久左衛門の處から参りました此方の親分さんがね
宅なられた目に掛りたうございますと聽て女房の執次で奥へ通り
ますると源サア様此方へ出なさつて下さい惣コレハ
惣七と申しました昨日今日の若者でございます以後はれ心易く
願ひ申す源コレハ御町なご挨拶私しが堂前の源太郎で
ございます以後何分宜しくお交際を願ひます而して何か御用が
有つて此方へ出掛に成ましたか惣左様でございます委細の
事は此手紙に細く書いてございますからと久左衛門よりの手紙
を出ました源太郎は請取り讀了りまして惣れ手紙の越ひきは
承知しました夫ぢやア前さんは寺泊りと云ふ處ろで木山の子
分太吉と云ふ者を打殺しなすつたのだぞ惣殺す氣も無かつた
がツヒ怪我で遺つけました源宜ございますマア私しの宅にね

七 惣 の 俠 義

出なさい其代りね管ひ申す事は出来ませんが昔時の内辛抱なさ
いましと源太郎も惣七の潔然とした氣性を愛しまして何吳とな
くいと深切に世話を致しまして先は此處に足を留めまして惣七
は江戸は始めての事でござりまするから今日は淺草の觀世音吉
原向島明日は上野筋途日本橋或ひは兩國回向院と子分を付て見
物をさせました或日惣七は源太郎に向ひ惣兄貴今日は偶然觀
音様へ行て來やうと思ふが如何なるう源れ天氣が宜から行つ
て來のも宜からう誰か付て遣らうか惣此の間だ一返行たから
今日一人で行て見やうと仕度をして金龍山の奥山へ参り彼
方此方と見物した末中店から雷門を出まして並木町へ掛りまし
た見る煙草屋がござりまするから惣七は店先へ参りまして惣煙
草の宜のを一ツ下さい主人へいと云ながら惣七の顔を見て主人
貴方は新飯田の親分様ではございませんかと云はれて惣七主人

七 惣 の 俠 義

の顔を見て吃驚、惣ヲヤ誰かと思つたら大野の國太郎さんちやアないか、國何うもマア思ひ掛ない親分様如何してね出に成ましたマア、これ上りなさいましたね、新飯田村親分様がね出になつたと聽てね、條は奥より駈出しまして、條、オヤ親分様宜マアね出に成りました、サアね上りなさいました、惣、コレハね、條さんかへ、國、サアね上り下さいました、惣、夫ぢやア御免なさいヨと上へ上り奥へ通ります、國太郎夫婦は惣七の前へ手を突まして、國、サア親分様其節は難有ござりました、私共を助けて下すつたのみならず、夫婦にまでも仕て下すつた、御恩の程は片時も忘れ、た事はございませぬ、惣、毎日、ね、噂を致さない日はございませぬ、能マアね出なすつて下さいました、惣、夫は左様とね、前方二人が此江戸へ來て斯やつて居なるとは少しも知らずに居ました、如何した、此江戸へ出て來なすつたのだ、國、其仔細を申

七 惣 の 俠 義

しませぬのは親分には御存じもございませぬが、元々木山の治六さん、をね頼み申して、私共二人を夫婦にして呉ます、様仰しやつて下さつたをア、いふ固い親爺だから、斷はりました、其夜の事計らず、貴方に助けられ、夫婦になつたを、遺恨にして、鬼や角面倒な事を聞きました、故、越、こ、ろ、な、く、親、爺、ど、も、相、談、し、て、當、分、の、中、江、戸、へ、出、る、事、に、し、て、此、淺、草、の、三、軒、町、の、搦、米、渡、世、を、致、し、ま、す、越、後、屋、嘉平次と申し、今、此、者、は、私、の、實、の、叔、父、夫、へ、便、つ、て、參、り、ま、し、て、叔、父、の、世、話、で、只、今、は、此、並、木、町、へ、煙、草、店、を、出、ま、し、た、が、ね、か、げ、と、繁、昌、致、し、ま、す、條、而、し、て、親、分、様、は、江、戸、見、物、で、ご、ざ、い、ま、す、る、か、惣、イ、ヤ、左、様、云、ふ、譯、で、は、ね、い、が、私、し、も、木、山、治、六、の、子、分、か、ら、少、し、國、に、は、居、ら、れ、ね、い、の、で、此、江、戸、へ、參、り、ま、し、た、國、シ、テ、只、今、は、何、方、に、ね、出、で、ご、ざ、い、ま、す、惣、堂、前、の、源、太、郎、と、云、ふ、者、の、所、ろ、に、居、り、ま、す、國、鬼、も、角、も、親、分、様、私、の、宅、へ、ね、出、を、願、ひ、ま、す、ナ、ア、ね、條、條、ね、管、ひ

七 惣 の 俠 義

申しは致しませんが幸は二階も空て居ますから夫婦の着の御
送る縦令三日でもれ出なすつて下さいまし 國三日所か一生
涯れ世話申し上たとして御恩は返せませんと強て留られて惣七
も是非なく惣夫ぢやア御振介になりませうが今日は一ト先立
歸つて明日から世話に成ませう 國何卒左様して下さいま
し 釜必らず待て居りますと此中に酒肴を持来りまして惣七に
馳走を致しますと夕景に惣七は立歸りまして源太郎へ此由を話
し翌る日から國太郎の所ろで振介となりましたスルト五月廿八
日は兩國の河開きでございますから國太郎は 國モシ親分様今
日は兩國の河開きで大分賑かでございますから行て御覽なさい
ませんか 惣成程話しには聞て居たが國の土産に行つて見ませ
うと是より兩國へ参りました見ると噂さよりも賑やかでござい
ます芝居の小屋手品輕業祭文ヲヨボクレ色々の見世物が出て居

七 惣 の 俠 義

ります橋の上は人の山をなし河は舟にて水面も解らず流石の惣
七も實に目を驚ろかせました所ろへ向ふから頬被りを致した一
人の男が突然惣七に突當りましたから 惣ア痛へ氣を付けろと
懐中を索しますると紙入がございせんから周章て其男を捕ま
へ 惣飛だ野郎だ紙入を出せ 男私ちア和主さんの紙入は知り
やせん 惣知らねへ事が有るものか只た今己の懐中から取つた
に違へねへ 男ナンダ己が紙入を取つた面白へ取たと云ふなら
裸体になつて見せるから能く見やアがれと三尺を解き裸体にな
り振て見せましたが紙入は早くも相騙に渡して仕舞て有りませ
ん斯る事とは惣七は知りませんから只だ其男の仕業どのみ思ひ
詰 惣藏さすと出せ 男裸体に成つて見せても未だ和主にやア
譯らねぬか能も己を泥棒に仕やアがつた明りを立ると詞詰にさ
れて惣七は當惑を致します所ろへ向ふの棧橋へ付いた舟の中

七 惣 の 俠 義

から出ました男は年の頭廿七八で衣装は薩摩上布の帷子博多の
帯結の羽織を疊で懐中へ入れ藝者を二人連まして男ヲイ箱屋
の吉公手前深川亭へ行つて涼しい所ろが空てるかヲヨソクリ聴
て来て呉んナ吉畏こまりましたと深川亭へ参ります跡に其男
は大勢の人を押分け男何でございます ○ナア一ニ今巾着切
が捕まッたんだ男左様でございますか悪い奴は捕まッた方が
宜うございますと見ますると今惣七は騙の爲に詰られまして困
つて居りますから右の男は藝者に向ひまして男ヲイ小花チ
ヤン美の吉チャン己は後から直に行くから和女達は二人で先へ
深川亭へ行きねへ藝者夫ぢやアね先へ行きませすから直に入らッ
しやいと二人は深川亭へ参りました後で右の男は惣七と騙どの
中へ這入まして男如何したんです惣何誰かは知りませんが
此奴が私しの紙入を何でも取つたに違いないと思ひませすがスリ

七 惣 の 俠 義

未だ其様な事を云つて居やがる何處へ取つたへ能く見ろ男大
方相騙にでも渡したんだらう紙入を此れ方に返せ返さなければ
斯だと拳骨で横面を打ましたから騙は面をかへて何方へか逃
て仕舞ました右の男は惣七に向く男何にしるれ前さんは御炎
難だ此頭は悪い奴が多くッて困ります惣誠とに有りがたうご
さいました男兎も角も私しど一所に一寸れ出を願ひませすと先
に立ッて参りますから惣七も何處の者かは知りませんが據ど
ころなく眼で参りますると彼男は深川亭へ上りまして男ヲア
此方へ上りなさいまし惣有がたうございますか男イヤッ
ツト和主さんにな聴申したい事が有りますから夫れ連申した
のでございます遠慮は入らないからズット先へれ出なすッて
下さいまし藝者アノ旦那今箱屋が迎ひに來ましたが如何仕ませ
ら男今日はね前達も書入だから行ッて來ねへ藝者ソナラ左

七 惣 の 俠 義

様してね呉んなさい開次第直に來ますヨ小花ちやん一寸行ッて
來やう貴方御緩りと藝者箱屋は皆歸りました右の男は惣七に向
ひまして男先刻から和主さんのね詞ばを聞くに越後でござい
ます子惣越後でございます男越後は何方でございます惣
三條在の新飯田と申す所ろでございます男ナニ新飯田だへ夫
ぢやア和主さんに聴いたら知れるだらうが永らく三春に居た長兵
衛と云ふ人を御存じかい惣へイ夫は私しの父でございます
男夫ぢやア和主さんは惣七さんと仰しやるかな惣宜く御存じ
です如何にも私しが惣七でございます左様云ふ貴方は男夫な
ら惣七さんでございましたかアア悪い事ア出來ねへものだ實
は私しは上州吉井の新平の侍兼松と申す者でございます惣夫
ぢやア私しの子供の時分來なさつた新平さんの令息で有りまし
たの兼思ひ掛ない所ろでお目に懸うせした時は因置今取られ

七 惣 の 俠 義

なすつた紙入は金でも這入て居ましたか惣金は些か三十五兩
だが書付が有りますからと話しを聴いて兼松は表の方を見て居
りますると通り掛つた一人の男がござりまする兼ヲイ〜銀
次〜ヲヨイと來て呉れど右の男を呼込みまして何か耳打を致
しますると男は出て參りました暫時立つて右の男は歸つて來ま
して兼松の側へ來て懐中から包んだ物を出して渡しました兼松
請取つて兼ヨシ〜シテ二人は銀今下へ連れて來ました
兼モシ惣七さん取られた紙入は之でございますかと包みの中よ
り紙入を出だして惣七に渡ししました惣七は不思議さうに見て
惣モシ如何して此紙入がね前さんに兼中を改ためて見て下さ
い惣物中に間違ひはございせんか此紙入がね前さんの手に如
何して這入りました兼實は私しは此巾着切のカスリ取り幻の兼
松と云ふ盜賊でございます惣エ、何だへ盜賊だへト驚ろきま

七 惣 の 俠 義

した 兼惣七さんね前さんの紙入を取つたのは此二人でござい
ませう物七は覗ると最前裸体に成つた巾着切でございますから
吃驚致しました是より物七兼松深川亭を出まして今戸の兼松の
宅へ参りますると云ふれ話しは明晩申上ます

第十六席

初申上げます惣七は兼松と深川亭の二階にて一所になりました
船に乗浅草今戸町の兼松の宅へ参りました「オヤれ歸りかへト出
で来る女を見ますると年の頃は十九か廿才位ゐの垢脱た女で
さいます是は元深川仲町で藝者を致した朝霧の小富といふ別名
付の悪婆でございます唯今は兼松の女房となり共に悪事の語
人でございます兼小富今日は珍づらしいお客様を連れて来た
二階は奇麗に成つて居か 富民老爺に掃除をさして置たから奇

七 惣 の 俠 義

麗に成て居りますサア貴君此方へれ上んなさい只今御挨拶を致
します 兼サア上つてれ吳なさい惣御免なさいと上へ上りま
すると小富は先へ立て二階へ案内を致します兼松も續いて上り
兼惣七さん此方が涼しうございますから裸体にでもなつて緩々
涼んでれ吳なさい惣飛だ掘介に成て濟ませんと云ふ折柄小富
は酒肴を携さへて参り小富何にもございません眞の有合物で
さいます 兼小富此方は己の阿爺の馴染で越後新飯田の惣七
さんと云ふれ方だ小富れ初にれ目に懸りまして善入いしました
惣「コリヤアれ女房でございますか思ひも因す飛だ掘介に成ま
す小富どうか御緩々と召上つて下さい 兼何でも宜から肴を早
く持て來ねへ小富はハイといつて下へ降ました跡に兼松は惣七
に向いまして是までの悪事の段々を物語りました惣七は聽て驚
ろきまして 惣人間は長い浮世に短かい命だどやら何でも遣が

七 惣 の 俠 義

宜がしかし人の物を取事丈は止なさい自己も盆の上では随分人
も殺したは是まで人の物塵一本取た事は無い止られる事なら夫
斗かりは止なさいと云はれて兼松は頭を掻ながら、無段々御意
見難有うございませ何所までも如此事をして居られる者ぢやア
なし是から心ろを入替て堅氣に成ませうと話の中央に小富は希
を持って参り、富餘まり何にも無から水具を取に遣ましたサア緩
々地と上つて下さいと盃を差サテ四方八方の話しに時を移しま
する中小富は手を拍いて「老爺や〜れ銚子が出来たら持てれ出
へいと酒を持って参りましたは年の頃五十位な男でございます
兼民五郎老爺サア此方へ来て一杯飲ナ 民難有うございます頂
戴致しませう 兼老爺も越後だと云ふが此處にれ出なさるれ客
様も越後だせ物七さん此老爺も若い時分には随分悪い事をした
者だが今ぢやア佛の様に成て内の厄介者でござい升 民初めて

七 惣 の 俠 義

れ目に掛ります私らは民五郎と申して此方の兄イの厄介者而し
てれ客様は越後は何の邊で入らつしやるイ惣新飯田村でござ
いませす 民新飯田と云へばれ話しが合ますが私ちは元新飯田の
地頭澤海の足輕の息子で民五郎と申しましたが同役の息子に教
唆され酒と女郎に身を持崩し到底親父に勘當受如此身に成つて
仕舞ました散々悪い事を仕た中に忘れもしないのは針ヶ曾根
村と云ふ所に五十嵐藤右衛門と云ふ農家が有りましたが俗にい
ふ貧の盗みとやら其内へ二人で押込で金を取らした所を
聽なさい其所に十二三の丁稚が有りまして此小供に謀られて裏
の肥溜へ突落され命ちからに逃出しました夫からは惣々
仕まして悪い事は止ましたが根が懶惰者ゆゑ何の仕出した事も
なく今ぢやア内の厄介者ヲットれ酒の座敷でトンド穢ない話し
をいたしましたハ……惣夫では其時の盗人はれ前かね 民へ

義 俠 の 惣 七

イ私くしでございます 物さうか其時糞溜へ突落した丁稚は已
だヨ 民エーエ其時の丁稚さんは貴客でアア悪い事は出ぬ
ヘナア皆さんね聴成れたか恐ろしいもンダナアと老人は頻りに
歎息します中惣七は懐中から金子五兩取出だし 惣ヲイ民五郎
とやら悪い事は出来ねへど氣がついたか是りア誠に些少が和
主に遣から向後は之を資本に一文商ない爲してなりと堅氣にな
つて一生を送りなさいと言はれて民五郎は涙を流し民有がたう
ございます仰しやるまでもございせんモウ〜 悪事はスツバ
リと思ひ止まります折から聞ゆる鐘の音とアリやア何時ダ 兼
九ツでございます 惣夫ぢやアモウれ暇を仕やせら 小富マア
宜うございます御緩くりと今夜は泊つて下さいナ 惣宿でも案
じて居らうからモウれ暇を致しませうイヤ兼松さん今日は大
層御馳走に成りました近々に國へ歸るからは是非尋ねて来て下

義 俠 の 惣 七

い 兼「私ちも此ウ云ふ身体だから何時颯風に遇うも知れねば其
時やア厄介に成りに行ます 惣是非来て呉んなさいと惣七は
今戸町を出まして並木町の國太郎方へ歸りました是より惣七の
れ話しは申し上る程の事も有ませんから暫時預かりといたし
兼松の方にては二三日立ちますと子分の富三と申者が顔色變
て参り 富頭大變が出来たデットしては居られぬへ 兼何だ大
變とは 富外の事ぢやア有りませんが阿兄さんと阿姉が働らい
た悪事の尻が破何時召捕に來やうも知れぬへと確かに探つたか
ら注進に來ました 兼エ、夫は大變チットの問も斯う遣ては居
られぬへ小富仕度をしる 小富夫りやア大變如何仕らう 兼如何
もかうもねへから手前は川越の安藏の處へ逃げて行け跡から己
も行かうから富三汝へは小富を送つて呉れ 富畏こまりやした
阿姉ッア〜 早く支度をなさいと是から小富は手早く支度をい

七 惣 の 俠 義

たし富三を連て逃ししました兼松は勿々に跡を取片付門口へ出
ます途端閃めく十手と共に御用と云ふ聲が懸りました兼松一
生懸命七八人群かり掛る捕人を右と左りに突除まして間に紛れ
て逃出しましたサテ小富は富三を連て花川戸の川岸まで参りま
すと向ふから御用と書た提灯が見へますから脚に疵持二人は
南無三と後退りをしまして遠州やと云ふ船宿の軒下へ蔭れまし
た役人は我提灯を見て蔭れる者が有ますから傍わらに居る捕人
に指揮してソレ召捕と云ふが否や五六人の捕人が御用と云ひな
がら小富に組付ました小富は手早く頭に挿て居る簪を抜て組付
た捕人の目を規つて突ましたからアツト兩手を放す隙を見て東
橋を向ふへ越うと橋の中央頃まで参ります向ふより又々御用
と云ふ聲が致しまする橋の前後を挟まれしました事故後へも先へ
も参られませんから懸て欄干へ手を掛まして身を躍らして川中

七 惣 の 俠 義

へ飛込む機發に運宜も一艘の屋根舟が橋を潜つて出ます船首
際へ飛下ましたが間の事故一向譯りません小富は息を殺し小
くなつて潜み居りました扱此小富のね話しは後篇残る月影に到
りまして譯りに成ますね話し元へ復り兼松は大勢の捕人を突
除一散に通延漸々川越の江戸町の安藏方へ参り表口から兼安
兄イ居るかイ 兼イヤ兼松兄イか如何して 兼イヤ別に如何も
しねへが四五日此方の内の拒介だ 兼颯風でも喰つたか 兼如
何にも年貢納めの催促だが小富は來ねへか 兼まだ來ねへ 兼
ハテナ來ねへ譯はねへが已より先へ富三を付て來した筈だが
兼來ちやア居ねへ 兼どうして來なからう途中で遣られなけり
やア宜が 兼氣遣ひも有めへマア息吐に一杯遣ねへとは是から酒
を始めましたが兼松は兎角小富の事が氣に懸り少しも酔ません
兼兄イ酒は之限にして寝して吳んねへ 兼夫ちやアそうしねへ

七 惣 の 俠 義

と床を延て其夜は寝て仕舞ました翌日の正午過に表てへ参りま
したのには子分の富三でございます 富兄は宅かへ 安誰だ
富富でございやす 安ム、富かと振向て兼松兄は富が来たせ
兼エ富か小富は如何した 富阿姉でござんすか今上つて話し
せうと草鞋を解足を洗ふて上り 富さて頭アレから阿姉と一所
に花川戸の川岸まで来と向ふから御用提灯が見へましたから遠
州屋の軒下へ這入と御用と掛られて私ちやア直に隙を見て逃て
仕舞ましたが阿姉は何でも御用に成つたに違ひ有めへと後から
様子を聴いて見てもサツパリ分らねへから若ヒヨット先へ此方
へ来て居やアしめへかど遣て参りました 兼其奴ア心配だ如何
か旨く其場を脱れて居りやア宜が 安さうヨ彼様伶俐い女だか
ら多分は相違いは有るめへが一日二日の中にやア何とか様子が
知れやうからマア安堵て居るが宜と夫より三人は此處に小富の

七 惣 の 俠 義

安否を今日は知るか明日は来かと待て居りましたサテ政府にて
は兼松小富を取り逃しましたから五街道の口々は申すに及ばず
夫々探索有りまするが兼松は川越へ参つたと云ふ足が付きました
たから直役人は川越へ乗込んで参り松平大和守殿の町奉行へ届
けね捕人を借受川越の町は偶々までも探索に及びますると江戸
町の安藏の宅に借れ居る事が知れましたから大勢の役人が此に
来たつて手配りになりましたとは安藏の宅では露知らず兼松と
富三が三人酒を飲で居りまする處ろへ御用くど踏込まれ兼松
は南無三と思ひましたのが脱れる丈はと大刀を抜役人に向ひ捕
人六人に疵を負せ手痛く働らさましたが遂に此場にて召捕に成
りました直に江戸へ送るべきの處ろ川越の捕人に疵を負せまし
た事故調べ済になる迄は川越の半屋に繋がれました爰に兼松工
夫を凝して半破りの一段は明晩伺がひます

七 惣 の 俠 義

扱引續きて申上ます兼松は召捕の上殿重に入半になりましたが
 何分盗人社会にては随分立派な男ゆへ這入て三日目に半名主に
 なりました兼松も今度度は迎も首は無のでございませうから如何
 かなして今返装の風は逢たいと夫より色々工夫を致して半
 の床下の石を掘出して大雨の夜に紛れて其穴から抜出ました
 て園み殿重の練堀から外堀迄難なく飛越まして其夜の中に中山
 道の岡部まで逃ましたサテ兼松は越後の國新飯田村の惣七方へ
 尋ねんと存じましたが中山道は横川の關所が殿重でござります
 から山越に沼田街道へ掛りまして清水越を致します此清水越と
 申しますは餘程の難所でございまして白日には往來は出来ませぬ
 身休ゆへ夜に入まして段々と昨に掛りましては往來は出来ませぬ

七 惣 の 俠 義

ッたらうと思ひますと月は木の間に洩れて白玉を砕くが如く
 谷間の水音は木精に響いて物凄くございませうから流石の兼松
 も薄氣味悪く喘々て上りまします向ふより年の頃十八九とも覺し
 き娘の顔色青ざり面部に少し疵を受け髪はたゞろと振亂し
 跳足のまゝで参ります兼松は一目見るよりゾツと身の毛立思
 はず後へ五足六足下りました女も共に驚ろき是後へ退りまし
 て暫時兩人睨み合言葉もなく立て居りましたが兼松は懐ねなが
 ら兼其所へ来たの何者だ女貴方は何でございませう兼自
 らア旅の人間だが和女は何の化物だ女妾しも矢張人間でござ
 いませ仔細有て藤原まで参りませう者兼何だ藤原まで行のだ
 ど而して年頃の娘が只一人今頃此恐ろしい山の中を藤原迄行と
 云のは嘘だらう女夫には仔細の有事でございませう兼傍へ寄
 ちやア不宜ないゾ女御不審ならば一ト通り聞て下さい妾し

七 惣 の 俠 義

は藤原の者でございませうが父は信州松本の浪人で金岡伊織と申
るが其日の烟りも立兼まする所から妾しを六日町の金満家で
阿部佐忠太と申す宅は小間使ひ奉公に遣れまししたスルト主人が
妾しを取へて無休の戀慕の許さぬ事故に頼はり申しませする
と憎ひ奴だど妾を一昨日から裏の物置へ縛上げ聴た時は許して
遣る聴ない時は此通りだと木太刀を以て擲打御覽の通り顔に迄
疵を付けられましたから漸々に其處を脱れ
男の厚情で縛られた總を解て呉れましたから漸々に其處を脱れ
藤原の父の許へ参りませうと馴た所とは云ひながら夜更た上
に此深山を恐さも打忘れ此處迄は参りました何方へ出のれ方
かは存じませせんが如何ぞ不憫と思し召是れから藤原まで妾しが
送つて下さいませしナと聴て兼松は心地落居 兼何しろ氣の毒な

七 惣 の 俠 義

譯だシテ其藤原と云ふ處ろは未だ餘ッ程有るのかネ 女ハイ此
向かふの山を越て下ると藤原でございませう 兼夫ぢやア大した
道でも有るまいから其所迄確かに送つて遣うが已は勝手を知ら
ねへから案内をしながら和女は先へ行なさい 女有難存じます
ね禮は就れ内へ行つて申し上ますト女を先へ立せまして夫より
藤原道へ這入ました名にし負ふ山又山を登つたり下つたり兼松
餘程勞れまして 兼姐さん未だ餘つ程有るかネへ 女ハイ最
う些少でございませう 兼何だか大變に草臥た姐さん待な巳が先
へ行くと兼松が先に立まして谷際を二町斗り参りませると月
雲間に隠れましたから 兼ヲヤ暗くなつた姐さん危険せと云ひ
ながら向ふを見るときは四箇斗鏡の光が見へませう 兼姐
さん向ふに光る者が有るがアリやア何だへ 女アレマア大變で
ございますアレハ狼の眼玉でございませう 兼ナンド狼だと大變ナ

七 忍 の 俠 義

奴が出やアがつたナサア〜後へ歸らう 女歸れば直に喰れま
すモウ仕方ございません 兼夫りやア困つた後へ返つても喰
ひ殺される前へ行つても喰ひ殺される如何仕ても免れる事は出
来ぬへの 女仕方がございません 兼脱れられぬへと有らば仕
様がねへ迎も喰れて死ぬのならア叶はぬ迄も一番遣て見やうと
れ町を後に圍み飛付いたら一ト打に打つて呉れんと拳を固めて
身捕に及びました二疋の狼はオウ〜と怒吼ながら牙を噛鳴し
まして兼松を見てジリ〜と進み寄肉と飛で喰ひ付きまするを
兼松は一生懸命夢中で一疋の狼が横面を打んど致しまする機發
片邊の石に足が懸りますとがらり石が崩れましたからア〜とい
ふ中千尋の谷へ落ました二疋の狼は兼松の後に續き共に谷間へ
飛下ました此隙にね町は危うい場合を脱れまして漸々藤原へ歸
りました兼松は谷へ落まるとさ下猪小屋を推らへ獵人が焚

七 惣 の 俠 義

火を致して居ます其屋根を突抜て中へドツサリ落ました獵人
は驚ろきまして獵人「ア、吃驚した何だヲヤ〜」人間だハテナ人
間の降さうな天気でも無が如何したんだらうと見ると兼松は氣
絶を致して居ります獵人「目を廻したかト聽て用意の氣付を出だ
し口に含ませ谷間の水を汲で呑せながら獵人「ライ旅の人と耳
に口を寄まして呼ました兼松は息を吹返し 兼ウーン 獵人「氣が
付たかしッかりしなさい 兼難有ございませす誰殿でございませ
か恐い目に逢ました獵人「和郎は一体何處のれ人で何處へ行ので
ございませす 兼「私しは江戸の者でございませすが越後へ行とッて
清水峠へ懸りますると據どころない譯で藤原といふ所へ廻る途
中狼に出會し己での事に喰付かれやうとしたを外す機んに谷へ
落まして圖らず御厄介に成りました獵人「ムー而して藤原の何處
へれ出でなさるのだ 兼「何處だか一向譯りませせん 獵人「自己の行

義 俠 の 惣 七

處ろが知れぬへちやア困りものだ 兼、ソナラ貴方は藤原の力
でございませうか 貴方に聞いたら解りませうが娘を六日町へ奉公に
遣たど云ふ方を御存じでございませうか 獵人私しも娘を一人六日
町の阿部左忠太といふ豪家へ奉公に遣はしやしたが 兼、夫では
貴方は信州松本の御浪人ぢやアございせんか 獵人如何にも私
しは松本の浪人金岡伊織と申者だ 兼、夫ぢやア貴方の處へ参り
ますのだ 獵人ナニ私しが宅へ來るとは 兼、實は越後へ行くと此
辭へ懸りました時に向ふから十八九になる娘が振髪で参りまし
たのを見て驚ろき仔細を聞けば奉公先の主人が無休の戀言事を
聞かないのを憤どほり縛り上げた處ろ下男の厚情で脱れ出して藤
たれたから死なうと覺悟をした處ろ下男の厚情で脱れ出して藤
原の父の許へ通歸るのだから送つて呉れると云はれ 兼、夫は不思議
く廻る途中今の災難に遇ましたと始終を聞いて 兼、夫は不思議

義 俠 の 惣 七

な事娘を助けて下さつた其人を又此處で私しがれ助け申すと云
ふはよく不思議な縁で有る夫は扱て置き心に懸るは娘の
身の上直に是より歸宅致さうから和郎も同道しなすつて汚穢し
くも今夜一夜は 兼、難有存じませう何か泊て戴だきたい 兼、御一
所にど立んど致しましたが兼松は最前谷へ落ました時彼所此方
を打ましたから身体が適せせん伊織は見ても 兼、身体が痛いかの
兼、痛くつて歩行せせん 兼、夫は困つた待なさいと鐵砲を兼松に
背負せ伊織は兼松を肩に掛け漸の事に藤原村の宅へ歸つて参りま
した見ると内には燈火が付て居ますから伊織は門口から 兼、娘
ではなにか可親父さんでございませうか 兼、ム一無事で有た
かト兼松を慰勞がら上へ上りまして 兼、委細の話は概略聞
いた憎むべき奴は阿部左忠太浪人しても武士の娘に無休の戀慕
其上ならず繩を掛け打擲を致すとは如何に無學の百姓でも餘り

義俠の惣七

と云へば非道の奴た町に親父さん善マア様子御存知で兼御
存知な筈でございませぬ姐さん先程はト這込で來ました顔を見て
れ町ヲ貴方は先程妾しを送ッて下すつた旅のれ方善くマア無
事でも居て下さつたと思儀さうに顔を見て居まする金不審は
尤ども今夜何か獲物をど不入の澤の片邊りに鳥屋を作ッて居る
に俄かに屋根を打抜て前へ落たは此れ方イヤモウ吃驚したがる
介抱して様子を聞ば右の次第先マア汝へにも別條なく此れ方に
も怪我もなく此様目出度事はない無何しろ憎い奴は其六日町
の阿部佐忠太どかいふ者私は越後の新飯田村といふ所に惣七
といふ人がございませぬ其處へ尋ねて参りまする者其惣七と云ふ
人は随分相談相手になる人ゆへ此方の姐さんが此様な顔にされ
る程酷ひ目にね遇なさつた其意趣晴しは私たちが今夜斯して御掘
介の恩返しに一ト肌脱て遣ませう金御信切は忝じけないが手

義俠の惣七

荒ひ事を致しては後で誠に迷惑致すヲ兼手荒い事は致しま
せん此後惣々致す様何か工夫を致しませう金夫では何分宜敷
頼むト夫より膳を出し食も了れば間もなく夜も明々ど明渡りま
した未明に兼松は出立を致さうと思ひましたが何分身体が適ま
せんから茲に七八日厄介に相成て居ましたが宜敷梅に身体も癒
りましたから愈いよ越後へ出立の事に成ました尙も金岡親子に
六日町の仕返しを色々話しを致し新飯田村へ着次第事に由る
と迎いを遣はしますから其者に同道有る様にと堅く約束を致し
藤原を出立致しまして越後の國新飯田村へ参りました是から惣
七に逢ひて仔細を語り六日町の阿部佐忠太への仕返しは明晩申
上ます

第十八席

七 惣 の 俠 義

昨夜の續き兼松は藤原を出立致しまして清水を越六日町長岡夫
より三條へ出て漸々の事で新飯田へ参りました惣七の宅を聞ま
するど直に譯りました惣、ヤア兼松さんかサア、此方へ来て
下さい私も此間だ漸々歸つた計り江戸を立時今戸の宅へ暇乞に
行たらば御用に成かけたから風をくらつたと聞たゆへ據所らな
く歸つて来たが如何して此方へ出て来た兼、誰殿も居なさらな
いなられ話し申すが實は私ちもアノ井一旦は遙たがどう、川
越で御用に成ました其中日數を経て旨々川越の牢を破り親分
も歸つた時分と考て脱れて來ました如何か暫時の中藏匿てれ貰
ひ申したい惣、ソナラ牢破りをして來たのか縱令天下のれ尋
ね者にもせよ親からの懸念な中自己も新飯田の惣七だ宜ござい
ます及ばずながら惣七が命に懸て藏匿させウ兼、早速の御承知
ありがたい是で兼松も息を繼たワイ惣、モウ心配には及ばない

七 惣 の 俠 義

ト是より酒肴を出し稍や閑話しに移りました末に清水越の一
から六日町の阿部佐忠太の非道の事金岡伊織に助けられし事を
話して兼、親分如何か此仕返に宜工夫は有まいか惣、左様サ別
好工夫もねへけれども何にしる其佐忠太いふ奴は非道ナ野郎だ
已は此ウ云ふ事には不慣だが何と如斯して遣て一番膽を潰させ
たら如何だと耳打を致しませ兼松は聞て横手を拍ち兼、妙々面
白い夫ぢやア明日にも藤原へ人を遣り親子の者を呼寄せて早速
一番行て見様兼、然し夫は和主が爲が宜已は尋常の博奕打だか
ら強談がましい事は出來ねへ兼、夫りやア私が一人で行が和兄
は只後見になつて呉れりやア宜のだ惣、夫ぢやア芝居の作
者かハ、ハ……と其夜は飲明し二三日立まして早速藤原へ人を
遣はし金岡親子の者を呼迎ひました金岡伊織は娘のれ町を運ま
して惣七方へ参り元は武士の果なれば惣七に初對面の挨拶を致

七 惣 の 俠 義

しまして金、此度は色々御心配を懸難有存ますね迎ひに従
がひまして娘を連れて出ました兼、モシ先生其様に四角引ッちや
アれ話しやア出来ませんが私共ア、兎暴者だからザックバラリ
に遣ませウ時に六日町の一條だテ此方の親分に話したら何しろ
憎い奴だから充分に仕返をして遣るが宜と云ふに就て迎いに遣
ましたノサ、兼、夫ぢやア親分金岡さまもれ出で成すつたから明
日直に行事に仕やラソコで和主も六日町まで行て下さい惣、己
は先の宅へは行かないぞ、兼、ナア、先の宅ぢやアねへかの後見
の一件で只だ宿まで行ッて呉れりやア宜のだ惣、夫ぢやア宿ま
で行かふヨと其夜は休みまして翌日朝早く惣七兼松は金岡親子
を連れ出立を致しました三日目に漸やく六日町へ参りまして蛭子
屋といふ旅店へ宿を取り其翌日伊織惣七を宿に残し兼松はね町
を連れ阿部佐忠太方へ参りまして店先より兼松は小腹を屈曲な

七 惣 の 俠 義

がら猫撫で兼、へイ御免なさいまし私しは江戸の者ですが此
方の旦那さまに是非れ目に懸つてね禮を申し上げたい事が有つ
て参りましたね宅にれ出でなさるなら一寸に目通りが致したう
ございます番頭、江戸は何方でれ名前は何と申します兼、れ目に
懸りさへすりやア直に譯りますから宜敷ね頼み申します番頭、夫
ではれ名前だけ兼、名前は兼松と申します番頭、少々お待ちな
いと番頭は不思議さうな顔をして奥へ参りましたがふた、び店
へ出て来まして番頭、只今旦那に申し上げましたら兼松さんと云ふ
方は覺へがないと申しますが宅が違やア致しませんか兼、イ、
ニ違やアいたしません此方の宅が阿部佐忠太さまと仰しやい
ませう番頭、ナール佐忠太は此方でございすが兼、夫れ見なさ
い旦那へモウ一返左様云て下さい目懸れば譯る者だと番
頭、へいと奥へ参りますと暫時して佐忠太は店へ出て参りました

七 惣 の 俠 義

佐「私しに逢たいと仰しやるのは貴方でございますか 兼「是は是
は貴方が旦那でございますか私ちは兼松と申してと表を見て手
招ぎを致します門に待て居ました町が這入て参りました
兼「此れ町の私は兄でございます長々妹が御扼介に成ましたね
に一寸上りました一「ハア夫ではね前が其れ町の兄さんか
兼「左様でございます久しく江戸へ行って居ましたが親父も追々取
る年ゆへ如何か樂をさしたいと此間だ藤原へ歸へりました所
思ひ懸なく妹の顔を見ますとナンダか疵だらけで全でた
芝居の累ねの様ナ面相をして居ますから元々如此不細致ナ
者ぢやア無つたが如何したのだと尋ねますと此方さまへ奉公に
差上て置た中旦那様が如手づから御打擲を成つて如此に成つた
のだと申しました所ろが全た不調法でもしたに違へなからウと段々
叱り付ました所ろが全た不調法でもしたに違へなからウと段々

七 惣 の 俠 義

やる事を承知せないから怒り成つての御意見だとか申します
がナ「ニ女のいふ事ア當にはなりませんしかし旦那へ兎も角も
此顔の疵が証據と成て見ますりやアマンザラ無事では有ますま
い子へ旦那女は顔が貴重なもの其顔を此通り疵を付られちやア
第一此女の一生一代の晴仕事嫁入といふとが出来ません無理な
れ願ひかは存じませんが旦那のれ手でチヨイとね癒し成つてれ
貴ひ申したいと存じまして連て参りました此方の宅へ小間使ひ
の奉公にやア上りましたが旦那の寝間のれ伽をさせる譯に上た
のぢやアございません如何ぢ旦那へ躰入すとチヨイと癒して下
さいませと店先へヒツかりと大胡坐をかきました佐忠太は青く
なり赤くなり七面鳥の様でございまして一言の語も出ず目を白
黒致して居ます番頭が見兼まして番頭「モシれ静かに願ひます
旦那様貴方は奥へれ出なさいと佐忠太を奥へ遣り番頭は兼松の

七 惣 の 俠 義

前へ兩手を突まして番頭私くしは當頭の善平と申す者先程から
のれ話しは彼方にて一々承知はりました御立腹の段は重々御尤
とも然し今貴方が町さんの顔の疵を此處で癒せと仰しやいま
するのには醫へにもいふ比丘尼に何とやらも同じ事出来ぬ相談
ナント此様しては下さいませんか貴方の方で御療治を爲すつて
下さい其代り療治代は私しの方から差出します事と和談申
ては如何でございませう兼松は莞爾笑を合み兼流石は御大家
の番頭さん丈有つて物の解つた今の言葉夫ぢや仰せに從がつ
て左様のいふ事に致しませう番頭早速の御承知で有難ございま
江戸のれ方は誠とに譯りが早くつて居らつしやるから面白
して療治代は何程差上げて宜うございませう兼ナアニ少々で宜
うございやす番頭少々と仰しやつて何の位か兼何此顔が治
まする式で宜いのでございませうから百兩遣てれ呉んなさい番頭

七 惣 の 俠 義

エー百兩エアノ通用金の百兩かね兼百兩で安けりやア其上は
思し召次第幾多でも遠慮はしないハ……人の娘を疵物にした主
人の佐忠太此處の宅へ連雀を付て背負て立ても言分は有るめへ
グヅグヅしやアがると横ッ面ア張挫くゾと睨み付られました番
頭は吃驚して奥へ飛込んで参りました主人に此話しを致します
ると主人も膽を潰しましたが身の過まぢゆ是非もございませ
んから言が儘に百兩の金子を渡しました兼松は受取てれ町を連
れ兼大きに喧ましようございませう兼申上げませうと番頭モウ
なさへ又此近所へ参りますと兼態ア見やアがれと捨臺辞
に決して出て出でには及びません兼態ア見やアがれと捨臺辞
に末を物語り四人は大笑ひを致しました扱物七は兼松に差圖を
致しませして其金をそつくりと金岡伊織に渡しませうと伊織はな

七 惣 の 俠 義

受取ませんから色々に勤めて漸々渡しました伊織親子は涙
だを流して神を述べ其の翌日藤原へ立歸りました物七は兼松を
連れ好い後生をして遣つたと六日町を立ちまして長岡の波里町
小熊屋といふ旅店へ宿を取まして雨人二階で酒を飲で居ます
とね話しは變りまして武州の川越では兼松が破牢を致し逃去り
ましたから松平大和守様より諸所探索に相成りました末越後へ
足が付きましたから越後の大名家へ頼みに相成りましたに就
き長岡の牧野備前守様も御家來に言付けられ悉く御探索に成
りまして所ろが今日波里町の小熊屋にて異形体の他國人を認め
其と察して召捕方の手配りに成りませしたるが傍に新飯田村の惣七
が居ますから手出しをする事が出来かね早速石内の綱助をね呼
出しに成つて頼みに成りました綱助も御領主の沙汰なれば捕
まころなく子供を二人供に連渡里町の小熊屋へ参りまして

七 惣 の 俠 義

此方の宅に新飯田の惣七が來て居るかへ主人「ハイ 綱夫ぢやア
御免よト二階へ上まして兼松の飲で居ます次の間で 綱時に
惣七和郎は兼松と云ふ盗賊を連れて歩いて居るさうだが夫に就て
今係りの役人が召捕に向つたが和郎が居ちやア面倒だからと云
つて巳の所ろへ頼みに來た如何様譯があつて匿まふのだから知ら
ねへがマサカ盗人を隠し終せたとて左のみ男も好なりもしなか
らウから巳に任して其盗人を縛らして遣れ 物何の事だと思つ
たら其様事で來なつたのかね如何にも兼松といふ盗人は己が
隠匿して置が是ばかりは兄貴の辭ばに従がつて渡す譯にやア行ね
へ巳も頼まれた男づく命に懸ても渡されねへツナ 綱夫りやア
左様で有うが巳も斯ウやつて來たらやアよく ださう云は
すに渡して遣て呉れ惣外の事なら阿兄の言事だから如何でも
するが是斗りは堪忍して呉んねへ 綱夫ぢやア手前兄弟分の交

七 惣 の 俠 義

誼がねへちやアないか 惣假如交誼が無からうが一旦頼まれたらア渡す事は出来ません 綱渡されなければ仕方がねへ己も頼まれた義理づくだ刀に掛ても受取ぞ 惣イヤ面白いさういやア此方も亦刀に掛ても渡さねへ 綱屹度渡されねへか 惣連て行者者ならア腕づくで連て行きねへ 綱連て行なかつて如何する者かと双方刀の柄に手を掛けて立上らんと致しました處ろへ下り綱の子分が上つて参りまして慌忙て二人の中へ這入り子分親分方待なさい今御二人の間答を隣り座敷に聞て居た兼松といふ盗人が裏梯子から表へ出て係りの役人へ自から名乗て出ましたと聞て二人は驚ろき 惣扱は二人に兄弟の義理を潰さしちやア濟ねへと思ひ自から名乗て出たか 綱愚にも強けりやア善にも強いとは縦合の通り此兼松とかア云者は立派な男だナアと夫より綱助惣七の兩人は兼松への差入物の相談に掛りまするれ

七 惣 の 俠 義

話しは明晩申上ます

第十九席

扱申上げます兼松の目から名告て出まして繩に繋りました綱助惣七の兩人は半内の土産として金百兩を遣はしました其内に兼松は綱乗物にて川越表へ差立に相成りました惣七は長岡より綱助に別れを告て新飯田村へ立歸りました茲に大野町の木山治六と惣七との軋轢も久左衛門が中へ這入りました一旦は中直りには成りましたが何も心中は睦まじく行ませんヌルト 新湯地方は大野町の木山治六の繩張ですからカスリは之まで木山治六が取居ました此節は惣七の威勢朝日の昇るが如く其勢はひに乗じて新湯へ足を入れ大概のカスリを取居ますから木山は怒つて段々小争論も有ました或日新飯田村の惣七は新湯へ趣むかん

七 惣 の 俠 義

と支度^しを致^しして居^りますると妻^づのれさよが ねさよ「親分^{おやぢ}何所^{どこ}へれ
出^いでなさいませ 惣^{おん}新湊^{しんみなと}へ一寸^{いっすん}行^いて來^こるさよ「夫^{おつと}リヤアれ止^となす
つた方^{なた}が宜^{よろ}うございませウヨ 惣^{おん}ナせれさよ さよ「夫^{おつと}でも此^こ二
三日^{さんじつ}は夢^{ゆめ}見^みも悪い^{わる}いし氣^きにする故^{ゆゑ}か鳥^{とり}鳴^なも悪い^{わる}ひから四五^{四五}日は何處^{どこ}
へも出^いずにな出^いなさい夫^{おつと}ども用^{もち}が有^あら岩^{いわ}藏^{ざう}を代^かりにれ遣^やなす
つから宜^{よろ}うございませウ 惣^{おん}馬^ば鹿^かア云^いへ夢^{ゆめ}見^みや鳥^{とり}鳴^なが當^{あた}になる
ものか是非^{是非}ども今日^{けふ}は行^いなればならねへど三太^{さんた}を供^{とも}に連^つれま
して出^いて參^まりました跡^{あと}にれさよは虫^{むし}が知^しせましたか如何^{いか}も遣^やり
度^どございませんで何^{なに}とか用^{もち}を拵^{しら}へて止^と様^{さま}と思^{おも}ひまして外^{そと}へ出^い
て見^みると早^{はや}妻^{つま}たが見^みへさせん惣^{おん}七^{しち}は其^{その}日^ひ新湊^{しんみなと}へ乘^{のり}込^こで參^まりまし
た此^{こゝ}時^{とき}大野^{おほの}の木^き山^{やま}治^ぢ六^{むつ}も白川^{しろがわ}の虎^こを供^{とも}に連^つれまして古町^{ふるまち}の池^{いけ}上^{うへ}
と申^ます旅^り店^{てん}へ宿^{しゆく}を取^とり居^ゐましたが惣^{おん}七^{しち}の來^きたのを聞^きまして治^ぢ六^{むつ}
は白川^{しろがわ}の虎^こに向^{むか}ひ 治^ぢ惣^{おん}七^{しち}が來^きたといふが此^{こゝ}間^{かん}だッから此處^{こゝ}の

七 惣 の 俠 義

カスリの事に付^つて色々^{色々}咄^{はな}しもしたか聞^き入^いらず今日^{けふ}又^{また}此處^{こゝ}へ乘^{のり}込^こで
來^きて彼^{かれ}奴^{やつ}にカスリを取^とれては無^な言^{げん}ちやア居^ゐられねへど云^いて爭^ま立^た
ればア、云^いふ遣^や七^{しち}だから如何^{いか}な事^{こと}をするかも知^しれねへ夫^{おつと}は恐^{おそ}れ
ねへが久^{ひさ}左衛門^{ざゑもん}が一旦^{いつたん}纏^{まと}めた事^{こと}だから事^{こと}を起^たさば觀^{くわん}音^{おん}寺^じの顔^{かほ}を
潰^{つぶ}して仕舞^{しま}はにやならねへ夫^{おつと}故^{ゆゑ}隠^{かく}便^{べん}にするのにはチヨツクリ手^て
前^{まへ}が惣^{おん}七^{しち}の宿^{しゆく}へ行^いつて丁^{てい}寧^{ねい}に巳^みが左^{ひだり}様^{さま}云^いたと云^いて新湊^{しんみなと}次^{つぎ}のカスリ
は半分^{はんぶん}遣^やるから此^{こゝ}末^{すえ}れ互^{たがひ}ひに間^ま遣^やの出來^いない様^{さま}にれ頼^{たの}み申^ましや
すと云^いて來^きい 虎^こ畏^{おそ}こまりましたが親^{おやぢ}分^{ぶん}餘^{あま}り安^{やす}目^めぢやア有^あませ
んか 治^ぢ仕^し方^{かた}がねへ久^{ひさ}左衛門^{ざゑもん}の顔^{かほ}があるから 虎^こ夫^{おつと}ぢやア行^いつて
來^きませうと惣^{おん}七^{しち}の旅^り宿^{しゆく}へ參^まりまして面^{おもて}會^あ致^{いた}しました上^{うへ} 虎^こ外^{ほか}ぢ
やア有^あませんが親^{おやぢ}分^{ぶん}が左^{ひだり}様^{さま}云^いて遣^やしました御^ご存^{ぞん}知^ちの通^{とほ}り今^{いま}まで
此^{こゝ}新湊^{しんみなと}のカスリヤア皆^{みな}な私^{わたし}ちの方^{かた}で取^とり居^ゐたのでございませが
貴^{あなた}方^{かた}が度^ど々^々ね出^い甸^{けん}ゆへれ顔^{かほ}を立^たまして半分^{はんぶん}上^{うへ}ますから其^{その}思^{おも}し召^{めし}

七 惣 の 俠 義

で間違の出来ねへ様ね頼申やすと親分が言付て遣しました惣
何だど此新潟のカスリを巳に半分呉れるとへん惣七は半分計の
カスリは貰ねへソツクリ丸で取んだから歸つて治六に其様云つ
て呉れ夫共に不好と云ふなら惣七は腕ヅクで取から遣も貰ふも
入るもんかへ木山治六は親代々の貸元だからカスリ場も有だろ
うが此惣七は一本立腕ッ限り取なけりやア大勢の子分を養なふ
事が出来ねへと歸へてサウ云ト聞て虎は餘りと云へば無法の換
摺とは思ひましたが據所ろございませんから虎夫ぢやア歸つ
て其由を親分に申しませうと歸りました治六に此の話しを致し
ますると治六は暫時考がへ虎に向ひ治夫ぢやア仕方がねへか
ら皆な遣ると仕様かど聞て虎は膝を進め虎親分臆病神に取り
付れ成すつたな新飯田の惣七が夫程恐ろしいかチ一度ならず二度
三度彼奴に面を潰されて其上カスリ場まで云ふが儘に取られ

七 惣 の 俠 義

ちやア貴方は宜か知ねへが子分の者ア如何するのだへ宜分別を
して下さいと言葉忙しく申しませると治六は聞いて莞爾と笑ひ
治虎静かにしろ己も大野の木山治六だカスリを丸で遣ろうと云
ふにやアテットア了簡が有つて云ふのだワ虎シテ其了簡と云
ふは治耳を貸せど何か密語ました虎成程流石は親分チヨツ
クリ夫ぢやア行つて來ませうと又々惣七の旅宿へ参りまして
承知歸つたら宜しく云つて呉れるソコデ一杯遣りたいたが治六親
分をね招き申しちやア濟ねへが自己から行くのも變だから遊び
かたふ來て下せいと云つて呉んな虎畏こまりましたと立歸
り此由を治六に話しませると治六も喜こび酒と肴を先へ持して
遣り白川の虎を連れて惣七の方へ参りました是より酒盛と成り
まして四方八方の話しに時を移しませした治六は了簡が有り

七 惣 の 俠 義

するから少しも酔ません。惣七に計り差まする惣七は何の氣も付かず早十二分に酔ました。治新飯田は今日は泊るかい。惣イ、ヤ遅くも歸る積りだ。治夫ぢやア又此次に緩々地と遣ふ今日之でモウれ預かりにしやうと挨拶そこへ。虎を連れて立歸りました跡に惣七は酌に呼ました片原のれきんと云つて藝者上りの女を連まして新堀から船に乗り新潟を立ましたのは文政の六年四月十七日の夜の四ツ頃及でござりました下りと違ひ上り船の事と惣七は大刀を船梁に差した金の膝を枕に寝入ました三太は船尾の方に寝倒れて居ますると向ふより一艘の下り船が惣七の船を目懸て漕寄せますると惣七を乗た船人が豫て相圖の有つたと見へ静かに舟を止りますと彼方の舟の中より一人の男長物を故苦を捲つて寝て居る惣七の脇腹を目懸て物をも言は

七 惣 の 俠 義

す突込みましたから流石剛氣の惣七も不意を打れてウムと云ひ様に起上らんと致しまして刀を握む所ろを引れましたから指七本を切落されました二太刀目を胸に突込み一ト扶り扶りましたから惣七は無念と一聲後に残り果なくも一命は信濃川の水の泡と消失しました太平の代に生れまして下等の業ではございまするが誰一人の助けも受す我腕一本を以まして北越一國に雷鳴を轟ろかし觀音寺石打の兩名すら身慄いをさしませました惣七の半途にして相果升たは誠とに歎かはいし事でも有りまするか先生が惣七を博徒中の那波列翁一世とか申されましたが龍生には何の事だか解りませんれ金は只驚ろき聲をも上ず慄へて居ますると三太は此隙に川中へ飛び入り拔手を切つて漸々の事で彼處の岸へ着升た此惣七を一刀に刺殺した曲者はすなはち木山治六でござりますかねて虎とも示し合せ舟子等にも其由を含ませ置惣七の先き

七 惣 の 俠 義

へ子分を四五人も連れ顔の輝らぬ様に墨を塗り川の中に待伏し
まして逢々物七を仕留まして悦び勇んで大野へ立歸りました
三太は新飯田を指して飛が如くに参りましたが其夜の八ッ過で
とざりますす表の戸を敲き 三三開て呉れ 岩喧ましい誰だ
三三已だく 岩三太か 三三三太だく 早く開て呉れ 岩れ様を
遣て居やがる今開て遣と門の戸を開き三太の姿を見て吃驚如何
しやがつたのだ 三三如何も斯うも入つた者か親分が殺された
岩ナンドダ親分が殺された姉さん 大變だ親分に間違ひが有
つたさうだ起きて下さいと聞いて妻のれさよ長男の雛吉次女の
れ若三男の年藏も飛起きて三太を取巻仔細を聞くト白山浦にて
何者共知れず物七を害せし事を一々聞いて皆々顔を見合せ餘り
の事に涙も出でず只忙然して居ました岩藏は心を激まし 岩姉
さん泣いて居る處ろぢやアねへ是から私しは三太を連れて其場へ

七 惣 の 俠 義

駆付殺した奴を聞出して警を討にア子分の道が立ねへと取急ぎ
支度を致し三太を連れて白山浦へ来ましたは翌日の晝頃でござ
いました惣七の乗つて来ました舟は岸邊に付いて居ますから
岩藏は飛込舟の中を見ますと惣七の死骸は無惨の有様で倒れ
て居りますから岩藏は直に舟人を尋ね様子を聞きました誰だか
分明ぬと計りで一向手懸りもござりませんから片原のれ金の方
へ行聞糺しましたたが更に詳りませんから據所ろなくれ係りへ届
け御檢使の上惣七の死骸を引取り涙ながらに葬むりました戒名
を釋妙劍刃芒莞位と申しまして大衆の乾兒がいと美事に立
したは只今の墓所でございます借四十九日の追善も濟せ岩藏は
夫より物七を殺害致した者を種々尋ねますると新潟梨子島の
舟人與吉と申すは從來惣七の恩義を受ました者ゆゑ段々骨を折
まして漸やく大野の木山治六の所爲と云ふ事を聞き出だし注進

義 俠 の 惣 七

致しましたから岩藏は聞いて大いに喜こび早々新飯田へ立歸り
岩藏さんね喜こびなさいまし親分の警が知れましたさよナニ警
が知れたと而して何處の何んど云者だへ 岩大野の木山治六で
ございますすと聞いて雖吉は 雖ナニ親父さんの警が大野の木
山治六だと云ひながら長物を打込み出やうと致しますかられさ
よ岩藏は慌忙てさよ早まるは尤どもだが今和郎が行つたつても
敵手は大野の治六と聴やア到底討事ア思ひも寄らないマア
ね待 雖夫れだつて此儘聴捨にして片時置事ア出来ません 岩
御尤どもでございすが斯敵の分けた上は是から貴方が劍術の一
ト手も覺へ立派に名乗つて敵を打が親分への孝行乾見の奴らも
ふたゝび世間へ面が出せやすマア急がすと私ちに任して下さ
いさよ岩の云ふ通りミスく 行けば負を取るのを知つては如何
して遣られやう 岩縦令博徒にせよ破落戸にせよ親の警を打に

義 俠 の 惣 七

やア式作法も有と云へば花々しく尋常に遣らなけりやア親分の
耻ぢやア雪げましねへせ夫に就て思ひ當つた事がございます何
時や親分が世話をした上州藤原の金岡伊織先生は餘程劍術の
御名人と聞きましたから夫へ貴方を連れ申して修行の事を願つ
たら忽ちち警を討れる様に教へて下さいませウと思ひますが姉
さん如何でせウさよ宜所ろへ氣が付た夫では雖吉左様れしな
雖左様云ふ事に致しませうと俄かに支度に掛りまして岩藏を供
に連新飯田を出立致しましたは同年七月廿日の事でござりまし
た日を重ねて上州の藤原へ参りまして金岡伊織に對面を致し仔
細を語り此處で修行を致す事になり岩藏は一ト先歸りました新
飯田では雖吉が早く上達して立歸へるを日に夜に待つて居ます
る中に娘のれ若は漆山と申す處ろへ縁付ました雖吉は一生懸命
看古を致しますると太刀筋も宜く一を聞いて二を悟りますから

七 惣 の 俠 義

金岡伊織は世話甲斐が有ると喜こんで居りますと其十一月下旬より風を病の床に付きましたから色々介抱を致し醫師にも掛けました次第に重くなりましたのみ金岡は新飯田へ早速人を遣はさうと存じますれど餘程雪の烈しい所ろでございするから往來が止り自由が出来ません其中途に翌文政七年二月廿二日に死去致ました是より三男の年藏が本所村千間原に於て父の敵討は明晩申し上げます

第二十席

引續いて伺がひます其年の四月下旬に漸やう雪が解けましたから金岡方より難吉の死去しました訃言が参りましたたれさよを首め一同の者は驚愕て早速岩藏を遣はしました處ろ既に死骸は火葬にして有りまする事ゆゑ岩藏は萬事の禮を厚く述べまして遣

七 惣 の 俠 義

骨を背負て歸りまして是も念頭に葬ひりました或日れさよは年藏に向ひさよ和兒も知てる通り親父さんは非業の御最期其仇が討たいと兄さんは修行中に果敢なくなり姉さんは女のこの事お親父さんの仇を討者がないから善くね母さんの云ふ事を聞いて付敵は討所存と話し中央へ門口からチト御尋ね申したい物七さんの宅は此方かねさよ誰殿でございすど見ますると立派な武士でございます さよ何方から出でござります 士手前には信州上田鍛冶町松江右一郎の伴籠之助と申す者此度仲が眼病に付き菅谷の不動へ参詣に参りし序で久々に一寸ね尋ね申しに参つたさよソレハよれ出なさいましたサアれ上り遊ばしませと濯ぎを出ますと縫之介は足を洗ひ刀を片手に提げ奥へ通りまして尋常の挨拶もすみ 縫サテ惣七殿は何方へかれ出で

義 俠 の 惣 七

さるかなさよ「ハイ夫は昨年の四月十七日に死去致しました。縫
ナニ惣七殿には死去なすつた少しも拙者は存じなかつた。テ
御病氣は何病でござつたさよ。病死ではございませぬ。人手に懸つ
て相果ました。縫、人手に掛つて果られたとシテ何人の手に掛つ
てさよ「大野の木山治六と申す者に殺されましてございます。縫、
彼程の大丈夫をいかにも残念な事を致したな。ア年藏は手を支へ
且那樣親父の仇が討たうございます。が百姓の事で刀を抜事も知
りませぬから致し方がございませぬと涙ぐむを縫之助は見て
縫「ムー小兒ながらも感心な心ろ掛け天晴、夫でこそ俠客惣七
どの子だ定めて聞いても居られるだらうが自己の父も親の仇を
討損じ入水して自滅させれば本國へ立歸り打たも申す証據が
なく遂には永の浪人となり自己に至つて二代の間だ無念の月日
を送り申す其主従の因縁ある物七どのが人手に掛り非業の最期

義 俠 の 惣 七

を遂げられたとは母兒の心中に察し申す好々其志ろさしを見る
からは是より年藏どのを自己が連れ歸り一兩年の間だ武藝を教
授た上、屹度敵治六とやら云る者の首級を擧させ惣七殿の無念を
霽さすでござらう。年「ア有難い御辭、何卒其様して下さい
ませよ。母子の者を不憫と思し召し何分どもに引立てを願ひ
申し上ますと此處にて年藏を縫之助が預かります。相談が極り
夫より二三日逗留致しまして年藏は縫之助に従がひ新飯田村を
出立致しました。是から順路長岡柏崎高田善光寺と参りまして早
上田へ着ました。借縫之助は年藏を家内の者へ引合し内々其意味
を話しまして翌朝から年藏を稽古場へ呼出し面小手を着させ
教授致しました。年藏も一生懸命に勵みます。生得不器用でござ
さい。まして中々氣強く恰で麥打の通りです。から縫之助も種々骨
を折教へます。が何分にも不好で固却つて居りました。或時縫之

七 惣 の 俠 義

助の倅周三と申すが年藏の様子を見て氣の毒に思ひ周年藏れ前
は餘程不器用だナ劍術が出来ないかへ年如何しても不好ませ
ん周出来なければ出来る宜いれ守りを私しが持て居る之を和
見に遣うが然し大切な物だから無事は遣られん此しなさい茲で
小手返しを仕様私しの手を和見の小手で十ウ打たら此れ守り
を遣らう打損なふと此の弓の折で和見を打が如何だト聞て年藏は
喜こび年本當に和見さん劍術の上手になるれ守りを持つてれ
出なさるのでございませうか周其様ヨ年十ウ打つたらそれを
下さいませうか周如何にも十ウ打つたら遣ふ打損ふと頭だよ
年宜しいト是より小手返しは初まりました十ウの事を扱置き一
ツも打させんから年藏は口惜がり如何がなして打ふと色々工
夫を致しませうれと偶には二ツ三ツ位は打てますが到底十ウ所
るか五ツとは打てさせんから弓の折で番毎に頭を打れます年藏

七 惣 の 俠 義

も腹立紛れに一生懸命毎日隙さへ有ば小手返しを初めまし
たが習ふよりは慣ろで二ヶ月計り遣りませうと先づ七ツ八ツ位
のまでは打る様になりました縫之助は斯る事とは夢にも知らず
此頃年藏の武藝が俄かに進みまするを不思議に思ひまして縫
コレ年藏貴様は此頃神信心でも致したか不思議に思ひまして縫
した如何した譯だど申しませう後ろの唐紙を開いて周年藏
の武藝の上手に成つたは此周三がしたのでございませうと出て参
りませしたを縫之助が見て縫ナニ年藏が武藝の進達は其方が致
したと周左様ございませう年藏は至ての不器用でれ父上が斯
程ね骨を折なされても上りませんから可憫想に存じましたか
ら實は劍術の上手でなる御守りを持つて居るから自己を小手返
しで十ウ打てば之を與打損なへば此弓の折で打が申したのも年
藏は本當に思ひませう其守りが先さに今日で百日程小手返しを

七 惣 の 俠 義

致しましたでしの間だは漸やラ一ツか二ツより打ませんてたが
此の頃は八ツ九ツも打ッ様になりまして是が若干劍術の足にな
つたのかと存じました夫より年藏はますく、怠たりなく丹精を凝し
頓智を感じました夫より年藏はますく、怠たりなく丹精を凝し
まする中早三年の光陰を送りまして劍術も餘程使へる様になり
ましたから縫之助は此腕前なら仇の討ざるはよもあるまじと
思ひましたから年藏にも云ひ含め郷里の新飯田村へ歸る事に成
りましたサテモ年藏は新飯田へ歸りまして母に委細の物語りを
致しませると母の喜びは元より子分の岩藏も大方なすら悦こ
びまして近々の内に父の仇を討んと付視ひまする事を觀音寺の
久左門衛が聞きまして穩かならん事と存じましたから密に仲人
を入まして色々扱ひ仇討を止めさせんと計りましたが年藏は到
底聞き入れませんから久左衛門も今は據せころなく手を引まし

七 惣 の 俠 義

た其年の十二月廿日の朝表から這入て参りましたのは子分の岩
藏でございます。岩若親分いよ、和郎さんと自己が命ちを捨
るか後の世まで名を獲すか二ツに一ツの時節が來ましたせ、年
エ、敵の安否が分解たか、岩、昨夜から大野へ行ッて段々様子
探した所ろが治六は水原の代官の供をして葛塚へ行つたと聞
した其歸へりを待請て尋常に名乗り掛け親の仇親分の仇、縫
十人の加勢が有るとも此方は乾見を一人も連す二人の力らを一
ツにして片ツ端から斬し日頃の怨みを露さふぢやないか、年
ムーム善く言つたそれぢやア、れッ母ア、いらは直岩藏を連れ
さよ、若しも叶はぬ其時には二個とも活て再び内の敷居は踏
からう子へ、岩、姉さん御心配はございません三日立ない中に治
六の首を引提て親分の墓へ手向させウ、年、仕損じた日にやア
岩藏と其場も去らずさし違へ彼世で親上に言譯しやう、さよ、夫、

七 忍 の 俠 義

いて安心したチツトモ早く支度して行き十岩藏は茶わんに水を
入れて持つて参りまして 岩サア門出の盃祝ふて一ト口トれさ
よ年藏自分と三人が飲ましてエイト一ト聲茶碗を握り破しまし
た此勢はひに激まされて年藏も立上がり 年ねつ母ア宜い吉左
右を待つて居なさいト岩藏諸共表の方へ驅出しますとねさよは
後ろ影を見送りましてほろりと涙をこぼしました爰に大野の木
治六は今日が此世の門出とは神ならぬ身の白川の虎を引連れ
代官を水原まで送りまして歸り掛け葛塚から道を急ぎ大野へ歸
らうと本所村の渡場まで参りまするが此方は年藏岩藏に向ひ
年「モウ追付来るだらうか 岩左様だモウ間も有るめい 年時に
自己は治六の顔を判然とは知らねへせ 岩「夫れやア心配はない
今にも来たから私ちが先へ廻つて顔を見て治六なりやア持つて
を放り出すから私ちを合圖に名乗り掛けなさいイザと云やア私ち

七 惣 の 俠 義

が飛出しすから確かり遣ねへヨ 年「大丈夫だ夫ぢやア笠を
投げるを合圖としようど待間程なく渡し船が岸邊に着ますと舟
より上る木山治六に白川の虎が續いて参りました岩藏は是れを
見て 岩若親分来たせ顔を見られちやア不宜私ちア先へ行くか
らど早足で先へ驅抜ました年藏は治六と虎藏の跡に付き渡し場
より四五町参りますると千間原と云ふ原がござりまする其原の
中央頃まで来ますと白川の虎が 虎親分チヨイと御用達だ先へ
行つて呉んねへと片邊を向きませんで小便をして居ますから
治六はふらふらと歩行ますると向ふから岩藏が参りまして治六の
顔を見るより持つて居ました笠を投捨てました合圖に年藏は跳
り懸つて聲高く 年「木山治六能く聴け自己は新飯田の惣七の二
男年藏で有るぞ三ヶ年以前我父惣七を白山浦に連れて申法にも
欺し打にした其時の怨みの刃今更ためて受取れど扱打に肩先へ

切掛を打たした治六は不意を打れましてアット一ト足退がきました
が今更仕方も有りませんからナニ小頼ナ青二才と一刀を抜合し
互ひに秘術を盡して戦かひました治六は一ト太刀深疵を受け
て居りますから次第に弱りまして年藏が一ト足飛込んで
ニイと聲懸突を入れました銚先に咽喉を貫ぬかれ後ろへ堂と倒
れまするを年藏は乗懸り新飯田村の住人瀧澤年藏親の仇木山治
六を打取つたと大音に名乗り遂に首を上げました是より先き白
川の虎は小便をしながら此方を見ますと年藏が飛出しました
から己れと云ひながら騙出しを横合から岩藏が切てかゝ
りますから振向く機会横面を切付られアツと云つて疵を押へ
がら何所へか通て仕舞ました是から岩藏は懐中より風呂敷を取
出だし首を包んで背負まして兩人は急ぎ新飯田へ立かへり母に
首尾宜く仇を討たる事を知らせ直に治六の首を惣七の墳墓に手

向夫より兩人は澤海のれ役所へ訴たへ出ました所ろ立派に仇討
を致しましたに相違ないのでございますから其まゝ無罪放免に
なりました扱其後年藏は父の跡を襲ぎました又兼松は間もなく
死刑になりました小富は何うなりましたか行衛知れずとなりま
した先は之れにて結局と致します長々御退屈さま……

討敵 義 俠 の 惣 七 終

明治三十二年六月廿五日印刷
明治三十二年七月廿二日發行



發行所

校閱者 三遊亭圓朝事
出淵岩治郎

淺草區同柳原町一丁目二十七番地
司馬龍生事

口演者 村松新三郎

本所區相生町五丁目一番地

發行者 五十嵐專法

東京市神田區表神保町十番地

印刷者 大島寬治

東京市神田區表神保町十番地

印刷所 大島活版所

東京市本所區相生町五丁目一番地

文明林書店

終

